

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

テキストの日本語訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀, 斯, 琴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008923

テキストの日本語訳

I 守護神

DM3000101	エゼン・サブダグ (守護神)	119
DM300156(1)	ブルガン川地域に移動してきたバンギン・フレーの話	119

II バンギン・トルグードの移動

DM300082(1)	家柄	120
DM3000100	私の父	120
DM300080(1)	バンギン・トルグードの領主	121
DM300095(1)	領主がイジンマジンに行った話	121
DM300080(2)	継父がイジンマジンへ行くことになった話	122
DM300091	母がイジンマジンに行った話	122
DM300092(1)	イジンマジンへの旅	123
DM300095(2)	アープ・ノヤンは仏の地で亡くなった話	125
DM300080(3)	母はイジンマジンから帰ってきた話	125
DM300092(2)	イジンマジンから帰る旅	127
DM300116(2)	母がイジンマジンから帰ってきた話	127
DM300080(4)	12歳のときバイタグへ移動した話	128
DM300081(1)	中国での商売	130
DM300156(3)	中国でのバンギン・フレー	130
DM300085(4)	フレーの解散	131
DM300142(1)	ゲセレが逃げた話	132
DM300123	3人の僧侶が逃げた話	133
DM300142(2)	チョイバルサンがオスマンに銃を提供した話	133
DM300142(3)	バイタグにある千本の木でつくった砦を占領した話	135

III ノースタイの生活

DM300080(5)	ヨンゴの家への逃走	136
DM300080(6)	チョンジへの逃走	136
DM300116(1)	逃走	142
DM300153	兄の結婚	150
DM300154	結婚後	151

DM300155(1)	母が狼に追われそうになった話	152
DM300155(2)	中国で商売をした話	153
DM300085(1)	漢人に雇われたり、商売したりした生活	157
DM300156(2)	ブルガン川地域に移動するときの話	158
DM300081(2)	ブルガン川地域で申年の雪害の中での移動	159
DM300155(3)	ブルガン川地域に移動してきたときの話	159
DM300082(2)	グループに300人を集めた話	161
DM300085(2)	参戦	162
DM300141(3)	読み書きの勉強	162
DM300085(3)	ブルガン川地域で結婚して暮らした話	163
DM300142(4)	カザフ人のオスマンが馬群を強盗した話	164
DM300085(5)	ブルガン川地域の建設	167
DM300115	脚の治療・農作の収穫・交換	168
DM300121(1)	穀物の値段	181
DM300087(2)	カザフ人と牧草地を競争したと吹雪に遭遇したこと	181
DM300141(1)	タルバガンの狩り	184
DM300141(2)	ネグデルへの加入	185
DM300121(2)	ネグデルの家畜を放牧した話	186
DM300087(1)	牛を届ける仕事	189
DM300164	家畜を追い立てた話	190
DM300165	警備になったこと	199
DM300127	定年	200
DM300080(7)	次世代	201

I 守護神

DM3000101 エゼン・サブダグ (守護神)

セチェン：ヌトック (故郷) のエゼン (主) やサブダグ (地主神) を見たことがありますか？

ノースタイ：わかることなどないだろう。そうだね。わからないことを言うと嘘つきになる。嘘を言って採録されても何の意味があるか！嘘を話してはいけない。ここから移動してあそこに行き、また、中国に居て24歳のときにここに来た。この国に来て60数年使われ、一生懸命働かされて、今このように88歳になっている。

この人はサブダグのことを訊いているね。サブダグが何かを私は知らないと言っている。サブダグがどんな姿かなんて、私にわかるものではない！〔そばの人びとに〕おまえはわかるかね。ほら、わからないにきまっている。サブダグというのは私たちにわかるものか！

セチェン：昔の人びとはアルタイのサブダグ¹⁾と出会っていたと言う人もいますね。例えば、アルムス²⁾と会ったとか、見たとか、そんなこんな話があるかなと訊いたのですが。

ノースタイ：サブダグというものがどのようなものか私たちがわかるものか！あの世や、このブルガン地方に、どのようなサブダグがいるのか、いわゆるサブダグがどんなものなのか、私たちにどうしてわかるものかね！

セチェン：ダシワンジル山のオポーにどのようなサブダグやエゼンが存在しますか？

ノースタイ：ダシワンジルのオポーはこの辺りにあるに決まっている。ダシワンジル山はここ、見えるじゃないか。

セチェン：その山の守護神はどういうものですか？

ノースタイ：それはわかるものか。サブダグはどうやってわかるものか。どのようなものかはどうやってわかるか。そこに掛けてある絵画になんの仏が描かれているか、今あなたに訊いたよね！あれが仏か？何か？誰もわからない！わかることなど何もないのだよ。

DM300156(1) ブルガン川地域に移動してきたバンギン・フレーの話

セチェン：あなたたちは自分のフレー³⁾と一緒にここに来ましたか？

ノースタイ：私たちがかね。もちろんだ。

セチェン：フレーが移動してくるとき誰がリーダーになりましたか？

ノースタイ：フレーを知識のある僧侶の長老たちがリーダーになってここに連れてきた。ツァガン・トロガイの南側の不毛の地にフレーがあった。その上のほうのウルト・ハラ・ツァラガスで2年経った。あそこ〔ツァガン・トロガイ〕で3年経った。あそこに居て

からまた移動してフフ・オンドルのこちら側に来て宿営した。そこにおいて、のちに解散した。仏像はウランバートルに持って行かれた。12人の僧侶と一緒に。ドルジ、シリグ、ウルト・オンドル、ボロたちはみんな若かった。ストック⁴⁾たちが移動して来て冬を過ごした場所はこの林のところだ。

セチェン：仏像を何に載せて来ましたか？

ノースタイ：あばたの〔顔の〕老人が1頭の白毛の去勢雄（以下、雄と略称する）駱駝を提供してくれた。その駱駝に〔仏像を〕載せて来た。ほかの3つの仏像を黒毛の種牡馬（以下、種牡は牡を省略して種と略称する）、淡黄色の種馬、栗毛の種馬に載せて来た。どんな仏の仏像かはわからない。ボグド・ツォンカパ尊者の仏像は白毛の駱駝に載せて来た。バイタグ⁵⁾（地名）の険しい崖を乗り越えて来た。どうやって乗り越えるかは任せるって。そして、駱駝の鼻綱を放置した。〔制御されないので〕おのずと駱駝は仏像を運んで行っていた。その後ろから馬が行っていた。人がそれを引っ張っていく。1頭ずつに1人がついている。あの仏に。そのほかの仏像もたくさんあった。入りきれなかった。載せる乗りものがないので捨てた。

II バンギン・トルグードの移動

DM300082(1) 家柄

わが母はラムツェレンという。ここに来て83歳で亡くなった。わが母の父はソラホバヤルという人だ。彼は漢文とモンゴル文の読み書きができる。アープ・ノヤン⁶⁾の書記だった。仕事のできる人で、統計を出したりしていた。戸数を統計して組織する人だった。ノヤンのそばにいる人だ。あの人がチョンジ（地名）で80代まで生きた。この人は前妻に死なれ、再婚したので、わが母は孤児になった。のちに再婚した妻には2人の男の子がいる。わが母はアープ・ノヤンの親戚だ。

わが母が今生きていたら、よく説明してくれたと思う。私たちは当時、ものごとを考えて勉強することがなく、本なんか知らない。誕生日なんかわからない。無知なストックだよ。そのノヤン、高官たちが指導して引っ張っていたおかげで暮らせた。私たちは食べものを探して、あれこれ着るものを探して、このブルガンで農業をしていた。

DM3000100 私之父

わが父は、22歳に亡くなった。ノヤンの下で給料を支給する〔人だ〕。あのノヤンは100戸あまりの隷属民を持っていた。〔父は〕チョンジで商売し、契約を作ってホブドに持って来ていた。このホブドは中国の領域だった。民衆に食糧をほどこした。フフホトのテントは何百頭の駱駝に荷を載せて来ていた。駱駝で運んでいた。食糧を。彼らを迎えて利用していた。フフホトから来た人たちのテントには、布、磚茶、小麦粉、穀物な

どが持って来てあった。ここではライ麦を栽培し、麦粉を作って食用する。こうして暮らしていた。わが父（実父）は書記の長だった。漢文とモンゴル文がわかる。いつも給料を集めて配布する。そしてウルムチに給料を配布しに行っていた。こうして行っているうち、肝炎に罹って亡くなった。私はまだ母の胎内にいた。兄は3歳、姉は5歳だった。だから、3人だ。母が育てて1人前にしてくれた。

ムジンダイという人がいた。トゥンベイ、ゲセレという2人の息子をもっていた。アーブ・ノヤンがいた。〔領主は〕「子どもたちを自分の足で立たせるまで育てなさい」と言い、わが母に「ムジンダイと結婚しなさい」と言い、ムジンダイに「あなたは彼女をもらいなさい」と言って2人を結婚させた。「この人と結婚し、〔自分の連れ子の〕1番目の子どもが10歳になるまで育ててみなさい」と言った。そして、母はムジンダイと結婚した。そして私が生まれてアーブ・ノヤンのそばに1年、アニヤ・ノヤンになってから2年経って、バイタグに出て2年になって、それから移動して、6歳になればチョンジに行くものだ。〔だから私は〕6歳でチョンジに入って24歳でこちらへ出て来た。ホシュドのプレーで勉強したのは7歳だった。

DM300080(1) バンギン・トルグードの領主

私はツァガン・ゴルというところに生まれた。アーブ（父）というノヤンの時代だ。あのノヤンはものごとを見ればわかるという人だった。そのノヤンには息子が多い。4人の息子がいた。ゴンブが1番上、アニヤが2番目、チャグダが3番目、ヨンゴが4番目だ。1人の娘がいた。名前は忘れた。私はこの4人の息子の名前を覚えている。母が言っていた。私は少し覚えている。私はそこで生まれた。バンガハン〔バンギン・トルグードの領主〕には100あまりの世帯があった。わが父はチョンジで商売をし、彼らに報酬を支払っていたのだ。トメントグトフという。姉はセチェという。その次はニマという人だった。わが姉は5歳、わが兄は3歳、私は母の胎内に残った子だ。ツァガン・ゴルに住んでいて、そこから移動してダシワンジルに来た。アニヤというノヤンがいた。彼はアーブ・ノヤンの息子だ。そうこうするうちに、私が2歳のときバイタグに行った、私たちは。バイタグに出て2年経った。私は4歳、兄は3歳上。姉は5歳上だった。父が亡くなると、母はしばらくしてチョンジに移動してバイタグに入った。私は4歳で〔チョンジに〕入って、24歳でここに移動して入って来た。

DM300095(1) 領主がイジンマジン⁷⁾に行った話

アニヤ・ノヤンは、泥棒を集めて遠近の家畜を盗むような貴族だった。アニヤ・ノヤンの右翼には、泥棒をする何人かの男たちがいた。アニヤはカザフ人と仲良くしたため、父親〔アーブ・ノヤン〕は不満だった。「あの子はカザフ人と仲良くなった。カザフ人の家に通っている。カザフ人の茶を飲むようになった。程なく死ぬ、彼は。〔彼は〕執政で

きない。むしろ、わがチャガダがきつと執政するだろう」と、その人〔アーブ・ノヤン〕は言い、仏の居るところ⁸⁾へ行つた。80歳を越えた人だったそうだ。

DM300080(2) 継父がイジンマジンへ行くことになった話

わが母はイジンマジンに行つてしまった。なぜイジンマジンに行つたかという、私の継父と一部の人が泥棒をして人々を苦しめていたからだ。アニヤ・ノヤンの父親が死ぬとき、彼らと呼び、「私が死んだ後、おまえたちはめいめいの命が助かるようにしなさい。パトンガという人がおまえたちを捕まえて漢人に突き出すぞ」と言つて逃げ去つた。イジンマジンの領主はブルワという人だったそうだ。

DM300091 母がイジンマジンに行つた話

私はフレーというところで、マンジ(小僧)になつた。マンジとは読経を学ぶ入門僧をいう。そのため私はバイタグ(地名)に出て来た。バイタグにホシュドのフレーがあつた。そこにわが母の親戚のトゥブという人がいた。彼が私に読経を教へていた。

わが母がチョンジにいと、継父がやつて来て「一緒に行かないなら、おまえを殺して行く」と脅かしたそうだ。すべての牛などの家畜を売り払つて、〔母を連れて〕イジンマジンに行つてしまった。ゴビを抜けて行つた。「あなたについて仏の居るところへ行く」と言つて1人の僧侶が一緒に行つた。そうして行くと、山中でのどが乾いて死にそうになり、乗つた馬がすべて死んで、〔のこつた〕4頭の駱駝をつれて行つた。「未熟ものめ。行くべき道を行かず、子どもたちののどを乾かして殺すか、おまえは。私ののどを乾かして殺すか」と喧嘩になると、その僧侶は「そこに見えている青い山に向かひましよう。もう大丈夫です。行きましよう」と言つた。彼らが持つていた茶をわかす水は熱でくさつてしまつた。行くほどに山は近づいていたそうだ。青く見えていたそうだ。その僧侶には1頭の黒馬がいる。行き続ける。その僧侶の馬はまったく平気だ。その僧侶は暑いとも言わない。ひたすら行くのだ。その山の南麓に着くと白い床のような土地があつた。水は無い。そのそばに来て僧侶が言つた。「降りてください。降りて器をすべて上向きにしておいてください。みんなゲルのウニ(屋根の棒)で影をつくり、その下で背中を上にして横になつてください。私は何か方法を考へてあげましよう」と言つて、僧侶は降りて馬をつなぎ、地面から土を取り、空中に撒いていく。床のような空地の片側にこのような丘がある。こちら側にこのような赤い山がある。その僧侶は2回まわつてから床のような空地の真ん中に座つた。手から白いものをぶらさげている。読経しているにちがいない。みんな横たわつて祈つていたそうだ。のどが乾いて死にそうだったそうだ。祈りつつ見ていると、床のような空地の真ん中のところに、白い雲がまわつていて黒くなつてきたそうだ。

DM300092(1) イジンマジンへの旅

暗くなって雷がなり、これ〔親指〕ぐらいの雹が降ったそうだ。雹が降り、その器がいっぱいになり、その空地が湖になったそうだ。「やあ、これ(雹)を止めてくれ」と叫んだそうだ。そして、わが継父は湖に雹が降ったとき、銃を背負って走っていったそうだ。というのも、その山から野生動物が下りて来ているからなのだ、とか何とか。水が流れてそこに〔野生動物が〕下りて来ていたのだそうだ。その僧侶はあそこからこちらに来て「もう大丈夫です。地面は硬いのでこの湖は2、3日残ります。乾きません。この水を飲んで1日泊まるかどうかは若い人たちが決めなさい」と言ったそうだ。

〔継父は〕正午にならないうちに1頭の野生動物を狩って背負ってきた。そこに3日過ごしたそうだ。そうして、その湖から水を汲んで移動したそうだ。そのまま行き1泊して翌日続けて行って、着いたのがハミと言うところ。その高い赤い山の向こう側にもう1つの丸い赤い山がある。それはハミの向こう側の黒い山だ。目的地はそこだと言っていたそうだ。そのように行くのか教えて行った。そのとおりに行き、翌日、果樹林に入る。果樹林に入り、素早く茶をわかして飲み、その果実を食べ、すぐ林を出ると言っていた。そうして、果樹林に入ると、あらまあ、果実がいっぱい生えている。リンゴはこのように木の上に生えている。それで荷物を降ろし、果実をどうやって食べるのかと訊くと、「食べるのに困ることはない」と言って銃の尻で樹木を叩くと熟したリンゴがころころ落ちて来た。赤い葡萄などがある。「みんなで食べよう」と食べさせたそうだ。食べてから寝なかったそうだ。少々茶を飲んでから果実を取って林を出た。そして、あその高い山に行ったそうだ。高い山に着き、そこで一夜を過ごし、翌日、出発した。

そこに1本の大きな支流が流れ込んでいる。その谷を行くと向こう側に1つの赤い高山があったそうだ。「かつて婆さんが娘といたが、今、いるかね。もうすぐ2年経つ」とあの人〔継父〕は言った。〔母が〕「それはどういうことか」と訊くと、「ここにいる者だ」と言った。そして、その下の谷で止まった。野生動物はたくさんいる。水はどこにあるかと訊くと、「この谷に水がある」と言って桶を取って、母を連れて走ったという。砂を掘るとそこから水が出た。その水を汲んで引っ張ると、砂が元に戻ったのだという。野生動物が来て前足で掘って、水を飲んで去るという。砂ばかりだそうだ。そこでそのようなところを見て歩き、泊まった。彼〔継父〕は「ここで2日過ごそう。ここには婆さんが娘と2人である。彼女に会おう。朝、2人で行こう」と言ったそうだ。そうして、行ってみると、1つのかたむきかけたゲルがあったそうだ。おやおや、畜糞が〔積み上げられて〕、なんとまあ、ゲルの帯の高さまで届いていたそうだ。そうして、入って挨拶をした。婆さんは銀髪だった。娘も銀髪だった。2人いたそうだ。

〔婆は〕「いや、ムジンダイ〔継父の名〕、おまえが来ないようになって2、3年経つね。なぜ、どこに行ってたのか、おまえは」と言った。〔継父は〕「おお、私は里帰りし、結婚し、そして移動して来た」と言った。「まあ!いつもいつも移動する人だね、おまえ

は。見ないからどうしてるかと思っていた」と彼女は茶を飲みながら言った。そうこうするうち、昼間ごろ、羊、山羊の群れが帰って来た。家畜の群れが帰って来てそのあたりに止った。子羊と子山羊たちはそばで草を食べて歩いている。羊〔家畜〕には羊飼いがついていない。あの2人〔婆と娘〕が桶を取って出ていき、わが母と3人で乳を搾り、たくさんヨーグルトを作った。大きい塊のチーズを山ほど積んでおいた。そんなふうに暮らしていた。

〔婆は〕「いや、このゲルをあそこに立て直してくれないか。30頭の駱駝が〔野外に〕いるが、3年経っている。出産したら、40頭になっているはずだが、これらの駱駝を集めてきて見せてくれないか」と〔言う〕と、〔継父は〕「3年経った駱駝たちはどこにいるか」と、〔婆は〕「駱駝たちは遠くない。近くにいる」と。〔そう聞くと〕たちまち、彼〔継父〕は駱駝に乗って行ったそうだ。えーい！3、4、5時間を過ぎたころになると、たくさんの駱駝を追って帰って来た。そうすると、このような（人差し指と中指を立てて駱駝のコブを描き、太っている丈夫な様子を表す）雄駱駝がいた、と〔母は言った〕。あのあたりの男たちはいつも〔これらの〕雄駱駝を去勢してくれるのだ。「えーい！あの駱駝は出産した。この駱駝も出産した。みんな増えた。すごい」とあの人〔婆さん〕は言う。〔婆さんは〕「あそこの端にいる黄色毛の駱駝を捕まえて乗りものにしなさい」と〔言った〕。わが父は駱駝を持っている。あの〔黄色毛の〕駱駝に縄を投げて捕まえようとしたが、暴れてどうしようもない。駱駝に乗ったまま、縄を投げ〔黄色毛の〕駱駝の首に輪を入れて引っ張るとあの駱駝の首を怪我させた。あの人〔継父〕はすぐ降りて駱駝の首を蹴って治した。〔継父は〕「この駱駝は怪我をした。次の冬に取りに来る。来年秋、取りに来る」と。「あの婆さんが駱駝の群れに近づいても、大きな身体の雄駱駝たちは動かない。静かに立っている。なぜかわからない」と母は言ったものだ。

そうこうするうちに、わが母に子牛のような〔大きな〕15頭の山羊をくれたそうだ。黄色のまだら模様の15頭の山羊を捕まえてくれた、と〔母は言う〕。〔婆さんは〕「家畜にしなさい。ここからイジンマジン（イジンマジン）は遠くない、わが子よ。家畜を育てなさい。子どもに乳茶を飲ませてやりなさい」と与えたそうだ。その山羊たちは向こう〔イジンマジン〕に行き、3、4年経って帰って来るとき100頭あまりになったね。あの婆さんがくれたものだという。あの婆さんはそこで老いて亡くなったとき、ほかに面倒を見ている人がいたかどうかはわからない。

〔あの婆さんについて〕どういうことかと言うと、「男たちがたまに巡って来て、あの婆さんの面倒を見るが、彼らが来ないとこのように困るのだね。家畜は勝手に行き来したり、出産したりする。決まった時期がある。種雄の山羊は時期になると雌の山羊を追いかける。あの雌駱駝たちは通常どおり種雄の駱駝に追いかけられる。馬も牛もいない。あの2人は母と娘だ」と言う。婆さんはよく寺院に金銭を捧げるから、あの僧侶は彼女のことを知っていた。あの僧侶は彼女の家で読経して3泊した。そうして、移動してイ

ジンマジンに行ったと、母はよく言ったものだ。

あそこ〔イジンマジン〕に入って数日経っていると、わが継父はどうしようもないやつだから、あの僧侶と喧嘩した。喧嘩して〔僧侶の〕額を殴って血を出してしまったじゃないか。すると、あの僧侶は「今月この日、おまえは私の血を取った。来年の同月同日、私はおまえの血を取ってもいいだろうね。私は辛い方法で血を取るからな。子よ」と、馬に鞍を置き、布の入れものを載せて行ったじゃないか。仏の居るところに行った。その冬を過ごし、翌年になり、僧侶を殴った同月に継父は下痢をし、鼻から血を出して亡くなった。

DM300095(2) アーブ・ノヤンは仏の地で亡くなった話

そして、〔アーブ・ノヤンは〕40人ほどの男を連れて中国の地域を、1日分の道のり、半日分の道のり、と言っては進み、仏の居るところ〔イジンマジン〕に着いた。そこに40人の男とともに着いた。そこにしばらくいて、ある日、集まった。人びとを集めて、「私は明日12時に死ぬ。これは書類だ。書類の四隅に押印してある。この書類を持っていれば、おまえたちは故郷に送り届けられる」と言い、その書類を見せた。そして、残った財産を皮袋に入れ、「私がどのようになるかを見てから帰るがよい」と言い、翌日12時に亡くなった。彼が亡くなると、その仏の居るところから僧侶たちが来て、バターを集めて、その中にそのノヤンを座らせて火葬し、2日経った。偉い僧侶たちが読経し、あれやこれやして、ノヤンの遺体は火の中で起き上がり、座った。そうすると、「このノヤンは、もう仏になった」と言って〔遺骨を〕持って行ったそうだ。

DM300080(3) 母はイジンマジンから帰ってきた話

そして、イジンマジンに行つてわが継父は死んだ。そこへ行った人びとの一部が死んで、15戸が残った。シリグの父親でアムルジャヤという人がいた。この人はわが母の〔親戚の〕弟だ。そして、彼は100人のモンゴル兵士を連れてハミに行った。ホイホイ（回族）と戦った時期だ。

イジンマジンへの道、このハミで、中国とホイホイが戦争をしていた。その戦争の時期にここへ移動したのだ。向こうで15戸を集めたとき、母はこのような〔2コブの屹立した〕駱駝を3日間縛り〔食べものを与えずに減量して〕、夜走らせた。夜走らせて夜明けにゴビに入って隠れ、日が暮れるとまた走らせて夜中に駐屯地に入ってきた。入ってくると、黒々としたものがあつたそうだ。駱駝がそれを見て驚いている。何だろうと思つた。「ツウフ」というとひざまずく駱駝だつたそうだ。静かなものだ。駱駝を寝かせると、言うとおりにしてくれた。降りてみると、死人ばかりだそうだ。つい先ほど戦いがあつた。死んだホイホイだそうだ。それを見て折り返して走らせ、夜明け頃に2つの山の谷に着いた。わが継父は〔イジンマジンに〕行くとき「南側の山の南麓に黒い山があ

る。ハミというところはそこだ」と教えていた。ホイホイの中に入ってしまう、かわいそうに2人の息子たちを孤児にしたか（自分はもう死ぬか）と思ってじっとしていると、明るくなってきた。よく見ると谷があったそうだ。そこを見ながら駱駝に乗って入ってきたそうだ。馬の要らない駱駝だそうだ。音を立てて谷を走り抜けていき、射撃されるかと思ったが、されなかった。向こう側に何かあるかと覗くと何も見えなかった。まったく明るくなったそうだ。そうしていると、北側の山から馬に乗った30人ほどが砂埃を立てて駆けて来た。しばらく行って彼らは銃の先に白いタオルを縛って振っていたそうだ、その人たちが。「あら、これはわが兵だ。白いタオルを振っているからわが兵にちがいない。ホイホイは絶対こうしない」と〔母は〕思いながら逃げていたそうだ。乗った駱駝はとてもよいものだった。そのうち、馬に乗った人たちが止まって集合し、その中から3人が列を出たという。ソラムバという人、テムルという人、トンベという人。わがトンベじゃないか。トンベのことを知らないか、おまえ（そばの人に訊く）。トンベは当時そこ（軍隊）でラッパ吹きだったんだ。この3人が名乗りをあげて「止まりなさい、私はソラムバだ、私はあれだ、これだ」と叫んだという。そのままそこで止まっていると、3人がやって来たそうだ。会って挨拶を交わし、「どうやってここまで来たのか。昨日戦争だった。ホイホイは向こう側に逃げ込んでいる。現在、ホイホイはジェレ・ハラ（地名）の向こうにいる」と言った。「死骸の中に入ってしまったね。なんとついている婆さんだね。もし昨日来ていたらホイホイの中に入ってしまうところだった」という話になった。「あなたの弟はあそこの高所にいる。5人いる。その手前に兵隊が分かれて陣を張っている。さらにその手前にわがモンゴル兵が陣取っている。ここで私たち30人ほどが来て後ろを見張っている」と言った。「あなたの弟はもうすぐ来る」と言うと、栗毛の馬に乗った、帽子を被っていない人〔弟〕が入ってきた。弟に会ってそこで2日泊まり、3日目の朝〔母が〕呼ばれた。「姉さん、もう帰りなさい。送りますから」と言った。翌朝、15人の兵士を呼んで「民家に入ってはならない。『家はどこ？』と訊き『そこ』と言えば『では帰って下さい』と見届けてすぐ戻って来い。民家に入ってはならない」と言いつけて送り届けに行かせた。その夜出発し、次の1泊2日間進んで母を家に送り届けた。〔派遣された兵士は〕「家はどこか」と。〔母は〕「そこだ」と。〔兵士は〕「何世帯が住んでいるのか」と。「15戸が1つの谷に集まって住んでいる」と〔母は〕言う。と、「家に帰って下さい。私たちは戻ります。民家に入ってはいけないと言われたのを聞いていますよね」と〔兵士は〕言った。「わかった、わかった」と言って母は家へ帰り、彼らは戻った。日時を約束した。15戸に「何月何日に30人の兵士を送ってあなたたちを移動させるから、その際、乗りものなどを準備して1つの谷に集まってください」と伝えた。〔母は〕「私たちはこの谷に集まっている。この上、向こうの人たちを集めておくから、迎えが来たらただちに出発する」と言った。こうしてイジンマジンから15戸が移動してきたのだ。あの人はこうして移動させてきた。そこで1泊させた。翌日「ホイホ

イは再び攻撃しようとしています。あなたたちは今移動してください。こちら方面は大丈夫です。安心して進んでください。泊まる場所に泊まって落ち着いて行って下さい」と。彼らは移動してチョンジに来た。

DM300092(2) イジンマジンから帰る旅

シリグという人の父親はアムルジャヤで、母の弟にあたる。アムルジャヤはハミで100人の兵士を率いていた。この人はムジンダイが死んだことを耳にした。だから、どうやって母を里に帰らせるかといつも言っていた。そのとき、あそこに以前から次々と逃げていった男たちの家族が残っていた。彼らはある谷に集まり、15戸だった。そして家畜を放牧していた。〔母は〕「私はアムルジャヤのところに、一度行かないといけな。下のほうへ移動しよう」と何人かの婦人が相談し合った。わが母はそうして1頭の駱駝を減量（遠出の準備）し、乗って行ったのが、その話だ。3日間、窪地で縛っておき（夜行の準備）、暗くなると乗って夜明けまで走った。ある赤い山へ進むとき、水を運んでいった。水を飲んでそこで泊まり、暗くなると出発して夜行した。すると、あの赤い山が見えてきたそうだ。そうして進み、赤い山に近づいたそうだ。行く先に暗い谷があったそうだ。そこに入っていくと、駱駝が驚くのだそうだ。何で驚くのだらうと思って駱駝から降りて見ると、一面、人の死体だらけだったそうだ。ただちに駱駝に乗って谷を出たそうだ。そのうち夜明けになった。駱駝の下を見たら死体が見えないそうだ。また、駱駝に乗って再び谷を走ったが、何も見えないそうだ。向こう側は野原だったそうだ。野原に入り、教えてもらった黒い山に向けて走っていると、後ろから30人ほどの馬に乗った人たちが、砂煙を立てて追いかけて来たそうだ。「私を殺すのか。馬で走っているからね」〔と母は思って逃げている〕。追ってかなり近づいて来て〔あの人たちは〕止まって集合した。その中から、3人の者が行列の前に出た。

アムルジャヤという人は隊長だ。彼はそこでホイホイと戦っていた。母が駱駝に乗って走っているところを望遠鏡で見知り、兵士を派遣した。彼ら〔アムルジャヤ〕の兵隊は2つに分かれて陣を張っている。向こう側にホイホイの兵隊がいた。

こうして、兵士たちがやって来て〔母とアムルジャヤの〕2人は出会った。兵士を見張り番に出した。〔アムルジャヤは〕母を連れて住んでいるところに行き、2日泊まった。そして、3日目に15人の兵士を派遣して〔母を〕送った。

DM300116(2) 母がイジンマジンから帰ってきた話

〔イジンマジンから〕こちらへ15戸を移動させた。こちら側から20人の兵士を出して出迎え、15人兵士を派遣して送らせた。わが母は1頭の駱駝を減量し、遠出できるように縛っておき、遠距離を走れるように、暗くなると走らせ、1泊して翌日渡って来たじゃないか！1つの黒い小高い所があった。そこを曲がると、黒いものがあったそうだ。

すると、駱駝が鼻をゴゴと鳴らしてきた。あら、ホイホイの領域に入ってしまったかと思って振り返って行った。こちら側に出て来た。出て来てまだ夜明けにならないという。駱駝を谷の斜面に置いた。すぐそばに谷がある。谷に入った。谷の向こう側にホイホイがいるかと思うと、何もなかったようだ。谷を走った。ハミはどこだろう？その駱駝は良馬みたいに走るものだったようだ。だが、後ろから30人ほどの馬に乗った人たちが砂煙を立てて追いかけてきた。〔母は〕ホイホイが私を追いかけいていると思い走らせている。すると、大勢は止まって集まり、テムルという人、トンベという人。この3人⁹⁾が手を振って、馬を走らせていたようだ。「私はソランバです」と、「私はオチルです」と、「私はトンベです」と。「私たちは3人です」と叫んだので、母は駱駝をひざまずかせて降りた。会った。「あのフンデレン・ハラ⁹⁾の向こう側にホイホイがいる。どうやって来たのか。昨日来ていたら、ちょうどホイホイの中に入ってしまうところだった。よかった、よかった。突然、谷に下って平野に入ると見えた。敵が入って来たかと思ったが、向こう〔移動する準備中のところ〕から来ているかもしれないと怪しく思いながら追いかけて止まった。私たち3人はあそこから来た。あそこの尖った高台の上に、弟さんのアムルジャヤの兵隊がいる」と言う。そうして、出向いて会った。〔アムルジャヤには〕銃がある。刀がある。だから嬉しい。すべてをなげうって来た。こうして移動して来た。どんなふうに故郷に近づいたものか〔やっと帰ってきた〕。

〔アムルジャヤは〕「ある月のある日に私は20人の兵士を派遣します。あなたたちはその谷で荷物をまとめて待っていてください」と伝えた。そして、15人の兵士を派遣した。「民家に入るな。家がそれだと言われたら、行かせて、〔おまえたちは〕戻れ」と〔兵士たちに〕言いつけた。ゲルに入らずに戻ったようだ。当時の兵士はね。

DM300080(4) 12歳のときバイタグへ移動した話

そうこうするうちにまたヌトックはこのバイタグに向かって移動した。バイタグに移ったとき、チャグダというノヤンがいた。かつて活仏だったガチンという人がいた。ホイホイが来てチョンジを占領し、サントイ（三台）を攻防して冬じゅう戦い、ウルムチを占領してサントイを占領できずに冬じゅう戦った。ウルムチを占領して、自分たちで昼食をして去る。そのとき、北からロシアの兵隊が来て、ホイホイの部隊を待ち伏せて撃退した。そのため一部は歩いて逃げ帰ったので、そこでは大量の銃を入手しできるものだった。

私たちが移動してきたとき、チャグダ・ノヤンはたくさんの兵隊を持つようになっていた。みんな銃を持った。そして、わがヌトックは移動してバイタグの向こう側に着くと、活仏は言った。「離れ離れになってはいけない。一緒に集まって行きなさい。遭難する兆しがある」と言うのだ。こうして移動してバイタグの向こう側についてテントを張った。その中から8戸の遊牧民は牛や小型家畜に荷を載せて後ろから移動してクブ（地

名) から入って来ると、そこにいたカザフ人が、わが8戸の遊牧民を殺した。すべて殺した。チャグダ・ノヤンは「私には50人の兵士がいる。銃も持っている。わが民を殺したカザフ人と仲良くするくらいなら、私の命は無用だ」と言って、襲撃した者〔カザフ人〕を追った。彼〔チャグダ・ノヤン〕は銃弾を無駄に撃たない。〔部下は〕「災難の兆しがあるので、彼を連れ戻してください」と。〔しかし〕彼は追いかけてカザフ人の旗を射撃した。「青い弾を無駄に地上に落とさないアルタイの王チャグダ・ノヤンが射撃したぞ。私たちに仇を返すつもりだ。場所を譲ろう」と〔カザフ人の年寄りたちが相談した〕。〔若い人たちは〕その話を聞かなかった。

そうこうするうちに、また、クブに戻って、殺された人びとの死体を処理する。どうしてもそこを通ろうと言って、行き、そこにいるうちに、雪嵐に追われて荷駄用の駱駝、牛、小型家畜をすべてバイタグの所で失い、チョンジに戻った。私はそのとき山羊を放牧して後続した。私には100頭あまりの山羊があった。母がイジンマジンから持って来た私有の山羊だ。そのとき、私は12歳だった。その山羊どもの世話をして追っていた。〔私は〕山羊を追って折り返して道をたどったところに、たくさんの羊が山羊の群れに突っ込んできて〔コントロールを失って〕すべていなくなった。雪嵐が強くて暗い中で何も見えない。こうして進んでいると、前にこつこつして何か動いてぼんやり見えた。なんだろうと思って私は〔その動いているものの〕後ろから、狼みたいについて行った。しばらく行った。1人は「わがフレールはどこを通って行ったのか。ヌトックの人たちのことがわからなくなった」と言う。「じゃ、どうしよう」と〔もう1人は〕言う。「ここで荷物を降ろそう。どこを通るかよくわかってから行こう」と先のが言う。こうして荷駄を降ろして1時間経った。私は犬みたいに少し離れたところに立っていた。目はよく見える。よく見ていた。2、3頭の牛に荷を載せていた。荷駄をすべて降ろした。彼らは横になった。私は彼らの荷物から敷きものを取って〔寝る〕場所を作って寝た。そのまま寝てしまった。目覚めると、夜が明けて穏やかな天気になった。見ると、あのものたちはいなくなった。どうしたのか。私を捨てて行ったのかもしれない。かなしく思って起きて足跡を追って〔足で〕走った。走っていると、背中に鞍をつけて鼻に紐をつけたツァル（乗れる用に準備万端整った去勢牛）がハラガナ¹⁰⁾の植物にからまっていた。私の幸運だったのかどうかわからない。そのツァルに乗って行った。

そのツァルに乗って走っていると、わが集団の3人に出会った。〔あの人たちは〕「あそこから出て行く荷駄の隊を見たか、息子よ、おまえ」と言うので、〔私は〕「見た」と答えた。「それを目標にして進みなさい。彼らが乗り越えているところの向こう側にフレールとヌトックの宿営地がある」と言ってくれた。ツァルに乗って走らせていた。言われたとおりの小高い地を乗り越えると、なんてこった、母が茸毛の馬に乗って、スカーフもかぶらずにまるで馬のように走ってきた。「お、息子よ、帰ってきたか。母さんのところに。カザフ人に殺されたかと思って探しにきた。帰って来て何よりだ」と〔母は〕言う。

「山羊を失った」と〔私は〕言った。「とんでもない。半分は羊の中に混じりこんで帰って来た。半分はいない。息子が帰って来たのなら、ほかのことはどうでもいい」と言って2人で1頭の馬に乗り、ツアルを後ろから追って行った。ヌトックの宿営地を回り、「このツアルは誰のか」と尋ねた。とある婆さんのツアルだったので、鞍と一緒に返した。

ヌトックがそこに滞在していると、12人のカザフ人がやって来た。「ぜひ戻ってください。ここのカザフ人が悪いことをしてしまいました」と言う。〔そこで私たちが〕どうしたのかと言うと、ゲルのテレム（格子壁）¹¹⁾を囲んで立てる。屋根がない。円形にして、その中に12人のカザフ人を入れた。「私たちはクブに行ってきた。このようなことになった。マリという人はカザフ人だ。彼は以前アニヤ・ノヤンの右翼だった。モンゴルとカザフは兄弟だ。それなのになぜこのようなことが起きたのか」と言う、「悪い人たちが悪いことをしました。戻ってください。行く先を譲ります。ダシワンジルの故郷に戻ってください」と言う。すると、わが活仏は「彼らは嘘をついています。彼らの言うことを聞いてはいけません。策を練って12人のカザフ人を捕まえなさい」と言った。茶をわかし、麵をゆで、バターを出した。〔カザフ人は〕みんな銃をテレムに寄せて置いて、茶を飲んでいた。「さあ、こうして、素晴らしいことばを言いに来てくれましたね。戻ります、私たちは。遠くから来たのだから、ゆっくりお茶でも飲んでください」と。そして〔カザフ人が〕座っていると、〔その後ろに〕12人の男〔モンゴル人〕が立っていた。突然襲って銃を奪った。こうして銃を奪って12人のカザフ人をそこで殺した。そして、ヌトックは移動してチョンジに行った。

DM300081(1) 中国での商売

申年の雪害¹²⁾のころ移動して来て、ヤマント（地名）にいた。〔移動する前は〕サントタイ（地名）のショルンクー（地名）にいた。〔ショルンクーは〕わがバングハンに中国が与えた土地だ。貧しい者は漢人に雇ってもらい、空腹を満たしていた。漢人でモンゴル語のわかる人は稀だった。私は漢語をよく覚えた。漢人に雇われて空腹を満たしていた。衣類をなんとか手に入れて身につけていた。私たちはとても貧乏だった。兄弟2人はヤン・ジンジンという漢人の家畜を放牧して数年経った。そうして、その漢人のもついで力をつけ、自分の家畜を持った。兄は商売を始めた。3、4年のあいだ商売をして富を得た。

DM300156(3) 中国でのバンギン・フレー

セチェン：チャグダ・ノヤンは自分のフレーと一緒に移動してきましたか。フレーは移動してきましたか？

ノースタイ：チャグダ・ノヤンは向こう〔チョンジ〕で亡くなった。

セチェン：西にいたとき亡くなったのですか？

ノースタイ：シヨルンクーにフレーがあった。北〔ハラシャラ〕から移動してきた。中国で土地をもらった。そこに10年間いた。セチンホー（地名）というところ〔ノースタイたちが住んでいた〕。フレーはあそこ〔シヨルンクー〕にあった。自分の隷属民がオスマン¹³⁾の兵士に殺され、そこ〔シヨルンクー〕に逃げて家畜をカザフ人に奪われた。そこから、活仏とノヤンは北へ移動して、北へ、ハラシャラへ、行くつもりだったが、なかなかできず、手前で宿営した。活仏とノヤンはウルムチに行った。

DM300085(4) フレーの解散

そのとき、わがフレーはこの上、ウルト・ハリン・ツォルハというところに宿営した。ここに南へ突き出ているところが見えるね。その内側にフレーがあった。えっと、バンギン・トルグードのフレーだ。仏や守護神などはそこに置いてあった。フレーがここに来て2年が経った。再び、フレーはそこから移動し、フフ・ウジュル¹⁴⁾（地名）のこちら側に移った。そこに3、4年いて、5年目に解散した。若い僧侶たちは還俗して、みんな嫁をもらった。若い者も年寄りもみんな還俗して、フレーは解散した。それより上の能力のある12人の僧侶が、仏像をもってウランバートルに行った。〔仏像は〕野に捨てない。12人の僧侶たちがいたが、今はみんな亡くなった。えーい！とても優れた知識人で有徳な僧侶たちだったね。わが有徳な僧侶にツォンカバという仏がいる。もう2人の仏がある。どういう仏かは私にはわからない。

ツウルトウムという人がガンダン寺を建てたため、ウランバートルに行ってきた。そこに家を建てて住んでいた。ツウルトウムはとても能力のある有徳な僧侶だ。仏教が禁じられたので、ツウルトウムは嫁をもらった。彼の嫁は馬に引きずられて死んだ。その嫁は3、4人の息子を産んだ。ツウルトウムは嫁の死を悼み、ガンダン寺を建立して亡くなった。彼は亡くなる時、弟のチョウザルに「あなたはブルハン¹⁵⁾のことを引き受けなさい」と言って任せた。パザンという人もいた。彼はブルハンに行った。また、ホボグ（地名、ホボグサイリのこと）からある年配の僧侶が来た。彼ら3人がいた。そうこうするうち、その老人は亡くなった。チョウザルは亡くなった。みんな亡くなり、ブルハンには世話をする人がいなくなり見捨てられた。

わがヌトックがここに移動してきたとき、そこ〔フレー〕に行つて仏を拝んでいたのだ。そのブルハン（寺）に家畜を捧げる。乳製品を捧げる。酒やバターを捧げる。わがフレーは菓などを出してくれる。仏を拝みに大勢が集まる。バンガハンのフレーが西のチョンジから移って来ているうちに、仏典が没収されることになった。宗教を壊滅させようとしたため反乱が起こり、〔僧侶たちを〕捕まえたりして残った一部の人は嫁をもらって散らばっていった。嫁をもらった人たちの子孫はいる。

DM300142(1) ゲセレ¹⁶⁾が逃げた話

当時、私は27、8歳だった。私が24歳のとき、バイダグでグループ¹⁷⁾に入った（徴兵された）。ストックから〔グループに人が〕集められた、移動してきた年に。ウルシが隊長だった。わが兄はグループに加入していない。兄は密偵として7泊とか10泊とか出かけていた。中国とモンゴルの国境を回り、敵はどこにいるか監視することを任務としていた。ダシナをはじめとする何人かの男を連れてトブドンは国境を回っているうちに殺されたのだよ。トブドンとツァンツダは兄弟だ。ツァンツダは弟で、トブドンは兄だった。彼らはチュルルダイとザカ老人を捕まえてカザフ人に差し出すつもりだった。馬を盗んでいったから、それに取り戻しに行った者たちだ。

このフレーの3人のゲセレが逃げた。3人のゲセレはザカの馬たちをエレハラ（地名）に追い出して3頭の馬を奪っていた。3頭の馬がいなくなったのでグループが後から追いかけた。チュルルダイがリーダーだ。トブドンは息子を連れていた。ハチンの息子、もう1人はウーダンだ。また、ザカ老人も行った。あの馬たちがいなくなったと言われて、グループが後ろから追いつこうと行った。バイダグの手前の谷に着くと、バトマンライのゲセレは「あなたたち2人は先に行っていないさ。私はちょっと小便をしておきましょう。この茸毛の馬に乗り換えます」と言い、馬から下りて後に残った（3人のゲセレの1人が居残った）。彼は茸毛の馬を引き連れていた。そうして、茸毛の馬に鞍をつけ直し、前の馬（今まで乗っていた馬）を自由にした。そうして仲間の2人は谷に着くところだった。そのとき、四方八方からカザフ人が出てきて、その2人を捕まえてしまった。すると、〔バトマンライのゲセレは〕引き連れた馬を放棄して、茸毛の馬に乗ったままアラタン・ガダスの方向へ逃げた。逃れてアラタン・ガダスを越えようとしたところ、後ろから馬に乗った3人のカザフ人が追いかけた。

この一件は後にオーシャ〔という人〕が話してくれた。黒馬のカザフ人が近づいていると、先に深い溝があったそうだ。茸毛の馬は深い溝を飛び越えていったそうだ。黒馬のカザフ人は飛び越えることができず、そこ〔深い溝〕に落ちた。後から来た2人のカザフ人は追いかけるのをやめて去った。ゲセレはそのまま逃げきり、ガシユンの手前のジャンジャンのゴビを走った。そこに漢人の車が見えた。〔ゲセレは車のところに〕走っていった。車が止まったので、「私たち3人が行っていると、2人がカザフ人に捕らえられて行きました。私は逃れました」と言ったそうだ。車に乗せて行った。そのとき、バイダグに中国の電話があったにちがいない。電話で話し、「あの2人を馬とともにこちらへ引き渡せ」と中国側が要請した。こうして、あの2人の仲間を取り戻し、3人はチョンジの牢屋に1、2ヶ月入った。牢屋から出て、馬もいなくなりました。バトマンライのゲセレはフレーの礎石のあった場所で70歳までいたそうだ。1人は仏の地に行った。もう1人はハラシヤラへ行ったとのことだ。

DM300123 3人の僧侶が逃げた話

バトマンライのゲセレが3人逃げた。その人たちに追いつくため、ジャンブルの父、老人が追いかけてバイタグの手前のところでこう言った。「この先を進んではいけない。向こうにカザフ人が待ち伏せしている。戻ろう。もう追いつけない。」

バイタグの手前に谷があるそうだ。だから、あの3人はあそこに行って、テブケの葦毛の馬をバトマンライのゲセルが引いて行った。みんな馬を1頭ずつ引いて行った。〔乗り換えるために〕余分の馬を持っているのだ。そこに着くと、ゲセレは言った。「私はちょっと小用を足します。あなたたち2人は先に行ってください。私はこの葦毛の馬に乗り換えます」と言った。

そう言うので、あの2人は先に行った。2人が例の谷に近づいていると、突然、こっそりと人が出てきてあの2人を捕まえた。捕まえると、〔あの2人は捕まると〕、彼〔もう1人のゲセレ〕はアラタン・ガダスの方向へ逃げた。引いていた馬を捨てた。逃げ続けた。逃げていると、後ろから3人のカザフ人が追いかけた。上から追いかけてきた。追いかけると、あの葦毛の馬はすごいものだ。とても良い馬だね。そうやって進んでいると先にこのような深い谷があったそうだ。その深い谷を飛び越えた。そうして越えて行くと、後ろから追いかけてきた1人は、そこを越えようとして馬が谷の崖にぶつかり、落ちてしまった。そのまま逃げ続けて逃れ、ジャンジャヴィのゴビに到着した。中国の車が走っている。その車のところに行き「私は逃げて来た。カザフ人が銃撃した。私たちは3人だ」とここにきて知らせる。車に乗せて、サントイ（三台）というところに連れて行った。あの2人をカザフ人から救うために、ゲセレという人はバイタグにいたニマという人に知らせて、2人を救った。カザフと中国が仲良くなっていた時期だ。

DM300142(2) チョイバルサン¹⁸⁾ がオスマンに銃を提供した話

ホイホイの木をどのように運んだか！駱駝で運んだ。ホイホイは戦うため、このバイタグ（地名）でたくさんしたことをしたね。そのようなたくさんのことをして再びモンゴルを攻撃するつもりだったため、このウリヤスタイ（地名）の軍隊がこの地に入り、秋が過ぎるまで駐在した。このヤマント（地名）から上のほうの地にヌトックを住ませた（駐屯地より上流へ移動させた）。ヌトックに迫ってこの下のほうには行かせない。〔そこに〕いさせた。このアラグ・トルガイ〔地名〕のあたりにモンゴルの兵隊がいた。ホイホイが来るとか、カザフ人が来るとか、オスマンが来るとか言われていた。ああ、あれまあ、なんてこった、なんとというリーダーだったっけ。チョイバルサンだ。オスマンに銃を提供した。このあばたの〔顔の〕老人がいた。そのとき、ヌトックは入って来ていなかった。ヌトックは西のチョンジ、つまり中国にいたではないか。あのあばた〔顔の人〕は老人だ。80歳になっていた。彼はそこに住んでいた。チョイバルサン〔元帥〕は、アラグ・トルガイ（地名）でオスマンと兄弟になり、銃を与えた。

あのあばたの老人が行くと、「明日来なさい、今、無理だ。明後日、来なさい」とか言って、チョイバルサン〔元帥〕と会えない。2日経って3日め、オスマンが来たとか、チョイバルサンが銃を与えるとか言うので、〔あばたの老人は〕額に黄色い毛のある1頭の雄羊にハダグ（絹）を結わえ、それと一緒に1瓶の酒と黄色の嗅ぎ煙草入れと乳製品を持ってきた。「こんな人が来た」と通報すると、〔チョイバルサン元帥は〕「ここへ入らせましょう」と言ったそうだ。雄羊を入りに縛りつけ、ものを入れ、乳製品を差し上げた、あの老人が。そうすると、〔チョイバルサン元帥は〕「わが兄弟のオスマンが来た。私は銃を与えるよ。これ〔銃〕で調整しよう」と言った。「わが子よ、カザフ人はあちらで笑ってこちらで怒るのですよ。銃を得てから逆に私たちを痛めよう、どうしよう、としているのですよ」と言っても、〔チョイバルサン元帥は〕「大丈夫です。オスマンがいくら強くなったとしても、私たちモンゴルの男を治められません。彼がそんなことをしたら、かえって鎮圧されます。彼は今私たちの右翼になっています」と、オスマンを仲間に引き入れて銃を与えるたそうだ。こうして、オスマンはその銃を持って、再び、わがツァガン・ゴル（地名）にいて、それから、裏切って中国と仲良くなり、再び、テンゲル・エレス（砂漠、地名）をめざしていた。

ツァガン・ゴルの向こう側にソ連の軍隊がいた。その軍隊に食糧を運んでいた。〔オスマンたちは〕道で待ち伏せしてその食糧を奪い、テンゲル・エレスへ移動して行ったね。後ろから、わがグループが追いかけて、銃撃し合った。交戦してオスマンを投降させるつもりだったが、できなかった。あるカザフ人の老人はオスマンの右翼の一部がここにいると言った。〔あの老人は〕この南側に住んでいた。

薪を集めていたカザフ人を捕まえ、その人に〔オスマンのことを〕訊いて、話してくれたら殺さないと言い、留置した。〔そのカザフの老人は〕「オスマンですか。オスマンはこの後ろに5軒のゲルを持っている。彼は毎日夜明け前に行ってしまう人だ。今日は白馬にしたら、明日は黒馬に、明後日は栗毛の馬に乗る。オスマンは馬を変えたり、服装を変えたりして行く。あそこに5人いる」と言った。

テムルジャンという人が言った。戦闘して南側から進入していると、ある黒い服装の者が白馬に乗り、後ろに婦人を乗らせて逃げ出したそうだ。逃げた黒服の者を銃撃すると、婦人に的中した。その婦人は倒れて死んでしまった。来て見ると、美しい女性だった。テムルジャンは言う。「ええ、仏さま、何ってこった！美人なのに。何てこった。彼女に当たってどうする」と言ったものだ。逃げたのはオスマンだった。そうして〔オスマンは〕逃げきり、後ろから追いかけてもそこに入れなかった。

向こう側にオスマンは居座った。そうしてオスマンは人を追い出し家畜を奪った。さらに、ソ連からのたくさんのものがあったのもオスマンが奪っていった。何頭かの馬を追って行き、荷駄用の駱駝を追って行き、略奪したもので山盛りになったそうだ。キーリン¹⁹⁾、マイグ²⁰⁾、食べものなど。わがほうからもそこに入り、それらのものから取っ

て行った。それらが誰だったかという、ロシア、カザフのグループだったそうだ。そうして取っていくと空になってしまう。兄はあちこちから家畜を追って来てくれる。ある者は「3晩の食糧をくれないか」と言って馬のむながいと尻帯を持ってきた。ひそかに。カザフ人から取ったそうだ。兄は少量の麦粉ともう1つの何かを与えてそれをもらった。そうしていると、朝、ある者が瘦せた、死にそうな雌馬を引き連れて来たそうだ。「これを受け取って3日分の食べものをください」と言う。こうして持っていた食糧をすべてあげて雌馬を受け取った。後に〔その雌馬は〕みごとな馬になり、バトの馬群にいたが、カザフ人に取りられて行ってしまった。

カザフに銃を与えた〔チョイバルサンがオスマンに協力したこと〕。その銃でこうして〔略奪して〕いるのだ。そうしてチョイバルサンは言ったそうだ。〔カザフが〕反乱してもわが子たち〔モンゴル人〕の相手になれません。私たちは負けません。

DM300142(3) バイタグにある千本の木でつくった砦を占領した話²¹⁾

マージュンイン²²⁾という人は仏の居るところよりこちら側にいた。あのホイホイ（馬仲英の軍）がいつも攻撃するのがそこ〔バイタグ〕だ。中国が「モンゴルを攻めてくれ」と彼を寄こしたのか？彼が自らモンゴルを支配するために来たのか？とにかく、このバイタグに来て、敗れて去った！

オスマンが去ったのち、ホイホイも去ったのち、バイタグに千本の木を使って造った砦があったのだよ！つねに人が住んでいた。交戦するとき、そこにそれぞれ孔を開けここから来ても、そこから来ても銃撃できるようにしておいたのだ。それにしても〔ホイホイは〕敗れてしまったね。

緑の飛行機が来て上から爆弾を落としてもだめだった。これはどうしたのだろうと騒いでいるとあの機械〔飛行機〕が壊れ、このウルーギン・アマ（地名、アマは谷口を指す）に持って来た。今もその跡が残っている。あれ〔機械〕を放棄し、再びここから緑の飛行機でバイタグに行き、戦っていてまた飛行機も壊れ、そこにうち捨てられた。もう一度、飛行機が来て傾斜し、やっと衝撃できたそうだ。隙間ができるこちら側からモンゴル兵が突撃したのだ。

バトが言っている。ある朝会議をしていると、12人のロシア兵（ソ連軍）が来たそうだ。銃なんか持たないで。1人ずつ剣を持っている。ああ、なんてこった、破竹の勢いだ。できないことなんてない！と言って12人のロシア兵（ソ連軍）は2人ずつ1組になって剣を持って行ったそうだ。場所を教えてもらって走って行ったそうだ。彼らはあれ〔砦〕に入り、あちこちから剣でさし、そして不運な奴、殺される奴を殺し、追われる奴を追い出したそうな。そうして追い払ったそうな。〔木造の砦を〕空にした。

ふたたび、あの人〔チョイバルサン〕が言ったそうだ、「新ブルガン（地名）のカザフ人がやったことはこれだ。カザフ人がいるところに平和はない。後ろに1つの爆弾、前

に1つの爆弾を投入して始末しろ」と。そうして、〔この地域の〕人びとが頼んだから、止められたのだそうだ。

Ⅲ ノースタイの生活

DM300080(5) ヨンゴの家への逃走

私が7歳のとき、トブという人は私をそばに置いて文字を勉強させた。母の親戚のトブという人がホシュド集団のフレーにいた。そうして、チョンジを出てこのバイタグに来た。バイタグにいるとき、「私は死にかけている。この子が異郷で苦勞するから」と言っていて、私をバトジャブの家に連れてきた。バトジャブという人は私の実父の兄だ。その家において、殴られたり、野外で寝たり、薪や水を運んだりした。語るに足らぬ。山羊の皮を裏返してツァリグという靴を作ってくれる。毛皮のまま2、3日履けるが、そのうちに破れて足の5本の指が露出する。今のような靴下もなかった。さまざまなもので包んで野外に寝ようか、火打石を枕にしようか〔というぐらい〕、3、4年辛かった。

あのヤンゴという人もわが母の親戚だ。あの〔バトジャブの〕家では、殴られて働かされ、やらせない仕事はない。水を運ばされた。野原（ここからエルパランまでの距離、約2kmのところ）から薪を背負った。1回で終わらない。1日に3回背負う。1日の食事は水だ。茶葉の滓をわかした〔ものだ〕。茶をわかしてから、さらに滓に水を入れてわかした〔あとのものだ〕。あの婆さんは炒った麦粉をこれ〔3本指でつかんだ量〕ぐらいくれる。そのようなものを食事していた。腹は空かない。あの黒い茶を飲んでそれ〔麦粉〕をなめると、体から汗が出て疲れがとれる。1日に3回薪を背負う。1回行って背負ってちょっと茶を飲んでまた行って背負って来る。そのとき、7歳だった。

日が沈むと私は野宿した。雪の中で逃走した。これ〔足の指〕が出た。今思うと、人が〔あんな状況で〕よく死ななかつたものだね！不思議に狼にも食べられなかつた！とにかく、死ななかつた。そうして、私はある朝、バイタグから逃げ出してウリヤスタイのナリン・ゴル（中国との国境付近）に来た。夜そこから逃げて走っていた。あノヤンゴはアーブ・ノヤンの息子じゃないか！あの人の家に行くつもりで夜走って、細い道に入った。走っていて真っ黒になると横になった。2本のハラガナの根元に身体を丸めて横になると手と足が冷えてたまらない。こうして包んで横になると眠ってしまった。目が覚めると足は少し暖かくなった。こうして過ごして、翌朝、その道を走り続けた。そうしてヨンゴの家に行った。ヨンゴの家に来ると、〔ヨンゴは〕私にあらためて着るものをくれた。

DM300080(6) チョンジへの逃走

あのバトジャブという人はバイタグから移動してチョンジの手前のとある場所に宿泊

した。「私が」そこに住んでいると、あの人は「お前、毎日3回薪を集めていないじゃないか。何をしているのか」と言って殴った。そして、両手を縛ってテレム（格子壁）に結んだ。彼には私と同じぐらい息子がいる。そうしているうちに、オチルという人が入って来て「この子はどうしたのか」と聞いた。彼は「薪を拾いに行かせるといなくなってしまう。言うことを聞かないのだ」と言う。そんなふうに言われた。そして殴られた。あの家にはバトジャブの母である婆さんがいた。いつも穀物を炒っていた。穀物を炒ると白い袋にこれ〔こぶし〕ぐらいの穀物を入れて、ひそかに私に分けてくれる。私はそれを懐に入れて野外で食べながら薪を背負う。そうして暮らしていると、〔ある日〕私を殴って殺しそうになった。鞭で打つのだ。薪を拾いに行き遅かったからと殴るのだ！ そのとき、オチルという人、あの老人が私を引き離してくれた。彼は怒って、「どうしたって言うのか。1尺ぐらいの子どもを、あなたはどのようにしてこんなにひどく殴るのか。この子はあなたの息子と同じぐらいじゃないか。それなのに、こうして縛ったときに心が痛まなかったのか。この子を殺すつもりか」と、彼〔バトジャブ〕を叱る。こうして翌日を過ごした。明後日を過ごした。婆さん、つまり彼の母親は、穀物を炒って麦粉を作った。このくらい白い袋に穀物を入れてひそかに私にくれた。いつもくれるのだ。それを懐に入れていくとき、「この子はかわいそうだね。あの女に捨てられた」と私のことを悲しんでいた。

あそこの砂の多いところに宿営地を置いていた。向こう側のチョンジは遠くない。木が見えている。トゥング²³⁾（ハネガヤ草）が見えている。薪を拾って歩くときそれを観察していた。手前のあそこに少し木がある。あの木々を目標に逃げ出す。死んでもかまわない。こんなに苦しんでいるよりいっそ死んでしまおう〔と思った〕。ある日、帰ってくると、午後、あの婆さんが小便に行く際に、これ〔こぶし〕ぐらいの穀物を私の懐に入れてくれた。このような炒った穀物だ。これを懐に入れてあそこで薪を拾ったりして1回背負って届けた。再び拾いに行った。あそこにこのような禿げた枯れ木があった。とても大きな胡楊だ。芯が空になった。枯れたのだ。この木はどのようなものか見てみようと思った。そこで（紛らわしい）足跡を残していた。今思えばそのとき賢かったね。あちこち薪を置いて足跡が分からないようにしていた。歩いていた。あの中〔枯れ木〕をのぞいてみると私が入って座れるほどの空間がある。住まいは遠くない。あの中に入って座り込んだ。夕方になってきた。ずっと座っていた。そうしていると、なんてこった、あの人たちは「あいつが逃げ出した。どこにもいない」と騒いで探しだした。オチルのシリグとジャラツァがいなかった。そうしていると〔誰かが〕「今日、あいつは逃げてしまった。何もないよ。バイタグへ折り返して逃げたかどうかもわからない」と言う。私はこの話声を聞いていたよ。

そして、夜になってしまって、私は身体を伸ばして立ち上がり、驚いてこうして看視した。彼らはかがり火を焚いていて、ジュルマ²⁴⁾がある。かがり火はピカピカしている。

さて、どうしようか。畜生め。死んだほうがいいか、こんなふう生きてるよりも、と思ひながら座っていた。ずっと座っていた。〔人びとは〕騒いで北の方へ探しに出ている。「北の方なら足跡はない。砂ばかりだから。パイタグの方へ行ってしまった」と話し合っていた。オチルのシリグという老人はこう言う。「あんまり殴ったからこうなるのだ。どうしてあんなに殴ったのか。あの子は逃げて、今夜にでも狼に食われてしまうよ」と。こうして探していた。私は座っていた。そうしていると、2人の男がやって来た。2人とも馬に乗っている。チメドのジャラツァが来た。月光は明るい。「どこにもいない。やりすぎたか」とジャラツァが言う。〔バトジャブの〕息子だ。彼らはみんな話すうち、かがり火が消えて寝た。

おお、あの木の中から出て、まるで狼に追われているかのように走り去った。ずっと走った。砂のところを出て走った。チョンジ（地名）のトゥング（植物名）の中に入った。すると、そこに溝があって水が流れている。そこに座って水をたっぷり飲んで、流れに沿って上流へ走り続けた。走っていると、上のほうで犬が吠えて騒いだ。ここにホルジャン²⁵⁾があったのだ。犬が多いのだ。どうやってこれらの犬のところを通り抜けようかと思ひながら走った。近づいてこちら側にしばらく座った。座りながら見ていると、こちら側に草が見えている。穀物の長い茎がある。藁屑だ。走って行ってみると、囲いの中にそのようなものが積んであった。なんとか壁をのぼって入り、そこを走れば、犬は来ない。そうしてその中に入った。その中で藁を両手で引っ張った。引っ張って穴を作り、後ろから突っ込んで引っ張ったり押ししたりしてそこで寝た。しばらく寝てから目が覚めた。夜が明けた。夜中じゅうよく眠って、夜が明けたから目が覚めたのかもしれない。起きてみると、前方が黄色くなってまさに明けているときだ。出発の時間になった。そうして起きて走り続けた。そこを降りて走った。走っていると、この前の溝の流れに出くわした。座って、あの〔懐に入れてもらった〕穀物をしっかり食べてから走り続けた。ずっと走り続けた。昼ごろ、今の時間で言うと、12時過ぎて3時になるころ、1束の大きなハラガナのそばで疲れきって力が抜けた。そこに横になって眠ってしまった。よく眠って目が覚めてからまた走り続けた。走っていると、また、溝の支流に出くわした。水をたっぷり飲み、穀物を食べて走り続けた。あそこに木が黒く見えている。それをめざして走る。ずっと走り続けた。走っていると、中国の南北方向へ向かう馬車・牛車の道に出くわした。そこ（道）に沿って南に向けて走った。午後になってきた。走っていた。走っていると、黒い木のこちら側に白いテントが張ってあった。おやおや、大勢だ。そこに入ろうと思って走って近づくと鈴のつけられた3匹の犬が出てきた。犬が走ってくると、ある人が出てきて叫んでいる。私はぼろぼろの長い服を着ていた。1匹の犬はここ〔腿〕、1匹の犬はここ〔右肘〕、もう1匹はここ〔脇〕を咬んだ。肌は咬まれていない。泣いた。〔上着は〕1枚の革のチョッキだ。短い。ズボンには山羊の皮製だ。中に何も着ていない。なめし革のものだ。犬が来ると、ある人が手に棒を持って叫

んで急いでいる。その人が近づくと3匹の犬は逃げ去った。後からもう2人が来た。私は泣いて立っている。走って来た。手足を触ってみて、1人は棒を持って犬のほうへ急いだ。3匹の犬は逃げた。2人は〔私のことを〕「アヤヤ」と言い合っている。そのとき、私は漢語がわからない。太腿などをすべて見てくれて大丈夫だった。「アヤヤ」と言っている。しらみだらけになっていたからだ。そして髪の毛はこのように伸びていた。しらみだらけだ。全身にしらみがついている。そして、1人の年配の人が来て私の胸のところを叩きながら「ホホ」と言い、今で言うところ「大丈夫、大丈夫」と慰めているようだ。そうしている。そして彼はやめて、「行こう」と言って、盲人を案内するように〔私の〕手をつかんで連れて行った。3人は大きなテントに入ると、1人の禿頭の人が横になっている。テントは平原いっぱいになくさん張ってあった。荷物を降ろしてあった。ホブドに売りに来た人たちなのだ。向こうから商品を運んできてここで売り、また、ここから何かを運んで行っていた。当時、ホブドに来るのに通行許可証を使った。何百頭の駱駝を連れて通っていたかはわからないが、たくさんテントがあった。

さあ、それで1つのテントに入った。あちこちから人びとが入ってきて「アヤヤ」と言っている。「アヤヤ」というのがどういう意味かという、しらみをみてそう言っていたのだ。そうして、禿頭の人が何か言っている。1人に何かを言うと出て行った。もう1人に何かを言うと出て行った。また、違う人が入って来た。何かを言うと出て行った。そしてあの人には上に引っ張って白い袋から何かを探した。1人は髪の毛を切るナイフを持って来た。もう1人は私を裸にして洗うことにした。まったく、生まれ変わるようになった。あの服はしらみまみれだ。あの人はこのように置いている。そうして〔私の〕頭を見て「アヤヤ」と言う。騒いで話し合っている。私には何もわからない。見ているだけだ。ポットに湯を入れて〔私を〕裸にして外で石鹸を使って洗った。そのうち1人の年配の、少しモンゴル語ができる漢人が来た。「どうしたか。どこに行くか」と訊いてくれた。「分からない。両親がいない。逃げている」と答えると、「なんてこった」と言う。私の身体を洗って〔テントに〕入れた。1枚のズボンをくれた。1枚のシャツをくれた。〔私の〕服を脱いでそこに重ねておいた。そして「アヤヤ」と騒いでいる。1人は長い帯を持って来て〔私の〕足に巻いている。もう1人は靴を持って来た。あれ〔帯〕を巻いて足に靴を履かせた。1人はズボン、もう1人はチョッキを持って来てくれた。そして私に頭まで着替えさせた。私の着ていた服を何かの上に置いてそこに出して燃やした。よかったと思った。しばらくいると、腹が減った。これぐらいの菓子をくれた。3口ぐらいの茶をくれた。茶に砂糖が入った。「座りなさい」と言われて座っていた。しらみを追い払って身体が楽になり眠り込んだ。寝ていて夜中に目覚めると、駱駝などの当番であるらしい人がいる。彼らは起きていた。彼はこのような碗に茶を入れて、これぐらいの菓子をくれた。それを食べて寝た。翌日を過ごした。そのうち、モンゴル語ができる例の人が来た。「私はあなたたちについて行きたい。私は駱駝を

放牧します。私を連れて行ってください」と言った。そうして横になっている禿頭に伝えると「それはできない。いけない」と。彼らは何か言っている。その後、「だめだと言われた」と〔私に〕伝えた。私は「行きたい。私を連れて行ってください」と言う。「いけない」と。

そして翌朝、私は別れることになった。彼らは移動することになっているにちがいない。駱駝たちを集めた。〔私のことを〕ある漢人に任せて連れてもらって行った。私のめざしていた黒い木は遠くない。〔私を〕連れて行った。黒い木のところに入っていくと3匹の犬を連れて、漢人の羊飼いがいた。あの人と2人で漢語で何かを話し合っている。「アヤヤ」と話し合っている。そして、「ね、この人について行きなさい」と〔私に〕言った。「あのね、あそこにモンゴル人が住んでいる。あのモンゴル人の住まいに行く」と彼はモンゴル語で言った。どのような人に会わせるのだろうかと思っていた。漢人の男の家に泊まって彼につきしたがって羊を放牧した。羊を囲いに入れるのが早い。冬の時期だった。羊に餌を与えていた。そこにホルジャンがあった。ホルジャンに入って来た。ほら、回族の婦人、若い男女たちが出て来た。出て来た人びとは「アヤヤ」と騒いでいる。その中から1人の年配の女性が出て来て「ああ、かわいそう」と言っているらしく、こうして私の頭をなでている。そうして「行こう」と言って私の手をつかんで連れて家に入った。あの〔漢人の〕テント〔の人〕はたくさんのお魚や菓子を私の荷物に入れてくれた。〔私は〕それを背負っている。その女性は〔私の荷物を〕あそこに掛けた。そうして相談している。そこに泊まった。翌日を過ごした。次の日の朝、「あなたをあそこに行かせるのだ」とあの人言った。あそこのモンゴル人の家に届けると言った。あの女性が連れて行ってモンゴル人の住まいのところに来た。来てみると、2つの黒いジュルマが見えた。その前に1本の大きな木と1本の小さな木がある。犬をこわがりながら近づいた。「ね、あのモンゴル人の家に行きなさい」とあの羊飼いが私に言った。〔私はジュルマの〕こっち側まで行き、犬がこわくて小さな木の下に立った。荷物を背負っている。木に身体を寄せて立っていた。そうしていると、1人の女性が〔ジュルマから〕出て来た。そこで、私は見えるところに出て立った。あの女性は「お父さん、この後ろに荷物を背負った人が立っている」と言った。「どのような人かを見て来なさい」とある年配の人が言った。ブセムという人の祖父の声だ。すると、婦人が近づいて来た。婦人は遠くから私を判別し、近づきながら「かわいそうだ。かわいそうなノースタイが迷子になっている」と言って泣きそうになってきた。わが母を知っている人だ。〔彼女が来て〕私を引き寄せてキスして連れて行きながら「どうして黙って立っていたの？呼べばよかったのに」と。「犬がこわいからだ」と〔私は〕言った。「こっちに来なさい、わが子よ」と言って、婦人や老人のみんながテントに入ってわいわい言い合った。その後、あの老人は「この子をここに置いてはいけない。明日、トル老人のところに届けてあげる。今日泊まるのもだめだ。後ろから追いかけてくるかもしれない。ジャラツァとオチルのシリ

グは昨日ここを発った。あの2人はよくここに来ている。今日はまだ早いのでトル老人の家に届けなさい。トル老人〔ホルジャンの家畜の世話をしている〕の家に行けば、ホルジャンに入るから」と言った。1バグ（最小行政区）に属する世帯群がホルジャンになる。親戚が集まっている。わがモンゴルは散らばっている。中国の方は輪になるように家を建てて兄弟親族がみんなそこに住んでいる。

そしてあの老人の家に来て冬を過ごした。そこで冬を過しているとき、ある日、老人は「昨日便りが来た。お母さんが移動してくるようになっていた。あなたの継父が亡くなった。弟はハミの兵隊の隊長だ。彼は向こうに行って10数戸を移動させて来るそうだ。子よ、頑張るのだ。婆さんは毎日この子を世話しよう。バトジャブが来なければよいが。彼の息子が来なければよいが。このホルジャンの中に隠して絶対言わないことだ」と言った。そこで私は冬の3ヶ月を過ごした。

そして春になって羊が出産し、緑の芽が出た。ある日の朝寝していると、ジャラツァという子が突然入ってきて私を捕まえた。以前に2回来たことがある。「[あの子は] 来ていない。家には住んでなかった」と言い張って帰らせた。こうして少しばかり放浪した。

バトジャブは自分の宿营地から移動して来てホルジャンの疥癬病の羊を引き受けた。家畜は痩せている。草が出ていた。私を連れてきてあの〔疥癬病の〕羊の世話をさせることになったじゃないか！私の着ていた良い服を自分の息子に着させた。あの子のぼろぼろの服を私に着させた。また、暴力を振舞いはじめた。畜生め、こいつを殺せる方法があれば、勝てるならば、こいつを殺してやると思いながら暮らしていた。

このような満々たる水がある。そこに羊が溺れそうだ。狼はたくさんいる。チョンジの狼はおそろしいほど多い。そうしてあの羊の世話をしていた。大体20日間ほど放牧し、その水を羊に与えていた。そうしてある日、水のところに沿って進んでいるとき、かわうそ模様、地の色に比べて足元が薄い色の馬に乗った女性があの家〔バトジャブの宿营地〕に来た。〔馬の鞍に〕荷物を掛けている。母が来ているのだ。まったく思いがけない。来ていた。そうして、〔その女性は〕1碗の茶を飲んだか否か、馬に乗って私に向かって駆けてきた。来ると、母だ。私は逃げ回った。母は泣いて後ろから名前を呼んで「あなたのアブジ²⁶⁾だ」と叫んでいて止めた。そうして母は私を抱いてキスしたりした。人の母というはやはり違うね。「アブジ、これらの羊は水に入ると溺れそうだ」と言った。〔すると母は〕「死ね、すべて死ね。わが息子にどんな生活をさせているのか。トルの家に住ませていたのに（連れ去ったな）。畜生め。死ね」と言った。そこで私の服をすべて脱がせて捨てた。長靴、服などすべて用意して持って来ていた。そのような悪い状況だと人びとは告げていたのだ。それを聞いてすべての服を用意してきたのだ。〔母は〕ハミから幾つかの世帯を移動させ「あなたたちは泊まったりして移動してきなさい。私は息子を見つけます。状況が悪いそうです。トル老人のところから再びバトジャブに連れられて行ったそうです」と〔同行の人びとに〕言った〔そうだ〕。私の服を脱がせてトゥン

グの上に投げた。そこにあった水に入れて身体を洗った。母はナイフを持って来た。ナイフで私の髪の毛を切り、持って来た服を着せてくれた。そのトゥングに火をつけて燃やした。「ね、アブジ、漢人も私の服を燃やしたよ」と言った。「それは聞いた。だから、イジンマジンから出発したんだ。後から15戸が移動してくる。〔彼らは〕5、6日後にここに入って来るだろう」と話した。そこからバトジャブの家に来て「わが子をよく扱ってくれたわね。どうしてくれよう。〔トル〕老人の家では別の服を着ていたが、そこを発つとき漢人からもらった服を改めて着せたそうさ。〔それなのに〕ここに来たら、その服を〔あんたは〕自分の息子に着せたとこの子が言っている」と言った。そこに泊まって翌朝「サントイに行く」と言って私を前に乗せようとするので、「私は前には乗らない。後ろに乗りた²⁷⁾、アブジ」と言って〔母の〕後ろに乗って〔馬に2人乗りして〕サントイに行った。サントイの街であれやこれと見て「何が好きか」と訊いてくれる。人の顔の模様の銀貨を持った。また、銭があった。紐で繋いである。そのようなシュブルというものがあつた。油っぽい銀だ。それを使って品物を買う。私は「何が好きか、何をしたいか」と訊かれたから答えると、飴、干し葡萄、ブゲレグズ²⁸⁾というものを買ってくれる。こうして泊まって、翌朝、連れて行った。1泊した。〔母は〕「畜生め、もうここに泊まらない。息子を連れて去る」と。あのトル老人の家に来て3日過ごした。4日目、トンベという若い人が兵隊から逃げてきた。「移動している数戸は明日到着する」という伝令があつた。こうして3日間滞在して4日目に彼らと合流して、〔人びとのもとに〕帰って来た。

DM300116(1) 逃走

私はフレーに行って小僧になった。そこに2年いた。そして、パイタグに出て2年経ち、そうこうするうち、継父は母を強制的に連れてイジンマジンに行ってしまった。当時、私は8歳だった。あのフレーに来たとき7歳だった。パイタグに来て8歳、9歳になった。あれはホシュドのフレーだね。パイタグでは叔父が僧侶だった。トゥブという人だった。彼のそばにいたが、彼は病気になった。「この子は中途半端の放浪してしまうから」と言って、私をパイタグにいたバトジャブの家に届けた。〔バトジャブは〕私の本当の父の兄だ。「私はもうすぐ死ぬようだ。おまえは放浪する。小僧と僧侶の2人がいる。おまえを頼んで連れて行かせる」と言い、着替えさせた。駱駝を引き連れて来て「駱駝で送ってあげよう」と言って、バトジャブのうちに届けた。

そこに1ヶ月、2ヶ月ほどいた。あの人〔バトジャブ〕は私をよく働かせ、身にまとった服がボロボロになり、私の服を自分の息子に着させた。私を丸裸にしてしまったじゃないか！薪を背負う。こうして行った。バトジャブの家で8歳のときに行った。ずっといた。パイタグの向こう側にウリヤスタイン・ゴル、ナリン・ゴルというところがある。私たちの本当のフレーはウリヤスタイン・ゴルにあつた。バンギン・トルグードの

フレーだ。こちら側のナリン・ゴルに人が住んでいた。ナリン・ゴルに私がいた。彼〔バトジャブ〕が殴ったりして、大変だった。やがて、しらみだらけになったじゃないか！〔私は〕泣いて帰って来た。茶の残りを飲み、少量の煎り麦粉を食べてそこで使われていた。ある日、彼〔バトジャブ〕の妻は、私を仕事していないと言って殴った。バトジャブの母という婆さんがいた。あの婆さんは「おまえはなぜ孤児を殴るのか」と〔バトジャブの妻を〕非難したよ。〔バトジャブの妻は〕「仕事をしないで、どうやって生活するか」と。〔バトジャブの母は〕「この子はまだ仕事ができる年ではない。9歳の息子だ。正月が過ぎたら10歳になる」とその婆さんは私のことをかばってくれるじゃないか！その婆さん〔バトジャブの母〕は穀物を煎る。麦粉を作る。このような白い袋に麦粉を入れてある。〔私は〕薪を拾う。「薪を持って来なさい」と言われる。「水を汲んで来なさい」と言われる。家畜を屠ったら、内臓や肉切れなど良くない物をくれる。そのとき、腹や胃袋は小さかったよ。少し食べたら腹がいっぱいなる。1碗の汁を飲む。それで十分だ。そこでこうして暮らしていた。そうして、バトジャブは「このうすのろめ。さっさとできないやつ。鍋を失った²⁹⁾」と言って棒で打った。そのため、私はどうなっても逃げ出してから考えようと思ってウリヤスタイの方へ逃げた。

羊を追いながら道を探り、「この道はどこまでいけますか」と人びとに訊いておき、ある日の夕方に逃げ出した。走り続けた。ずっと走った。この足の5本の指は白くなり、冷えている。そのとき、エネルギーが多かったのか、足が凍らなかったのがなぜかはわからない。そうして、眠ってしまった。随分眠って目が覚めると、南から夜が明けている。ただちに起きて走ったじゃないか！走り続けた。あのウリヤスタイのこちら側に窪地がある。その窪地に入って走った。午後の3、4時になっているとき、ウリヤスタイの北側の窪地に入る。入ると黒いテントがあった。背の高い、黒い婆さんがいた。〔婆さんは〕「ムジンダイは最低のやつだ。お母さんを連れて逃げたよ。かわいそうだね！おまえの手足は、この様子、ほら。なんてこった！どこに泊まったのか」。〔私は〕「野宿しました」。「足は冷えたか。腹は減ったか」。「腹減った。寒かった」。

〔このアイルは〕フレーの畑を作って穀物の倉を見張る世帯だった。ガシャという人はこの家の息子だ。母親と息子がいた。彼女は茶を入れて煎り麦粉（麦焦がし）をくれた。「あのヨンゴという人はあなたの親戚です。あなたは彼のところに行きなさい」と言った。だから、そこ〔ヨンゴの家〕に住むことになった。そこに行った。行くと、20数歳の男が手伝いに使われていた。ハイマグという人だ。若い男だ。彼1人がいた。〔彼が〕「この冬、おまえは手足を凍らせずにいれるのか」〔と訊くと〕。「野宿し、腹が減り、身体が冷えました」と〔私は〕言った。〔あの人は煎り〕麦粉をくれた。茶を飲んだ。「兄さん、あの黒い丸いのは何ですか」と私は訊いた。「あれはフレーの鉱産を守るものだ。奥さんがそろそろ帰ってくる」と言った。「どこに行ったのですか」と私は追って訊いた。「朝、フレーへ行き、夕方、帰ってくる。夜、ヨンゴが帰ってくる」と言った。その

とき、ヨンゴの妻が帰って来た。なんてこった、肩に鈴をかけている。肩甲骨のところに鈴がある。両肩に小さな皮の箱があり、丸い鏡も付いている。ここ（耳あたりの髪の毛）は編まれている。〔イヤリングに〕付けられて、ここ〔足首〕まで繋がり、ジャラジャラと音を出し、彼女はそうやって帰ってきた。彼女はザハチン族の婦人だ。トジャという。〔ヨンゴの妻は〕「これは誰の子か」と訊いた。その後、「よかった。私の相手になってくれる」と〔ヨンゴの妻は〕言った。こうして、午後、ヨンゴが走って入って来た。「おお、かわいそうに。わが姉の息子だ。これで大丈夫だ。よく見つけて来たね。おまえをここに住ませる。その服を脱いで捨てさせなさい。このブーツを履かせなさい。このズボンを履かせなさい。これからは私のそばに居させる」と妻に〔命じて〕言った。こうして彼の家に行った。〔彼らには〕子どもがいない。朝起きる。日が差して暖かくなってくると、〔ヨンゴの妻は〕フレーに行く。私を連れて行く。ついて行っていた。フレーに行く。歩いて行く。そのフレーはここからわが冬営地までの距離（約2Km）だ。川に沿ってポプラがたくさん生えたところだ。こうして私はあの婦人について行った。鮎、干し葡萄などを買ってきて、私をある場所に連れて行き、「あなたはここに居なさい」と言って、フレーに入っていない。私の母を知っている僧侶はご飯をくれる。私はそこで1ヶ月を過ごした。一方、ヨンゴは夕方連れて行く。彼はよく遊ぶ人だ。サイコロで遊ぶ。3つサイコロを持っている。私を連れていって鮎などの品物を買って裾に入れてくれて「それを食べて横になりなさい」と言う。私はそれを食べて横になる。僧侶らは遊んで夢中になる。僧侶だから遊ぶ！普通の人が遊べるだろうか！僧侶たちが遊ぶばかりだ。私は見ながらそれらを食べているうちに寝ようか！眠って夜明け前に目が覚めるとヨンゴが来て起こす。呼んで「じゃ、行こう。帰ろう」と言う。夜、ヨンゴについてそこに行き、こうして1ヶ月が経った。〔ヨンゴの家に〕2ヶ月ほどいた。私に服を着させ、薪やごみに使わない。水も汲まない。あの手伝いが薪を運ぶ。ご飯を作る。私は見て座っていて、服を脱いで寝る。

ある日、〔ヨンゴの妻が〕ここ〔肩〕にぶら下げている鈴のうち3個が落ちてしまった。私は後ろについて歩くのに、全然見なかった。「おまえはあの3個を注視しなかったのか。後ろを歩いていくせに」と言って私の頭を殴るので血が出た。たくさんの血が出て私は泣いた。手伝いの男は〔傷を〕拭いて包んでくれた。〔ヨンゴの〕妻は白いものを持ってきて洗って包んで、綿を燃やして〔傷を〕押さえ〔血が〕止まった！この頭がズキズキ痛む。「こんなやつ生きているより、死んでしまった方がまし」とあの婦人が罵っていると、ヨンゴが帰って来た。ヨンゴは見てから「この子の髪の毛はどうしたのか。頭はどうしたのか」と手伝いから訊いた！〔手伝いは〕「矯正した」と言う。「矯正」とは「殴った」という意味だ。「おまえはこの子をなぜ殴ったのか。ザハチンの女め！」と言って、夫人を引っ張って来て殴って喧嘩になったじゃないか！彼女を殴ってからこれ〔包んだ傷〕を解いてみて、「ほら、斬り裂けているじゃないか！」。あの〔手伝い〕男は

「その鉄で打った」と言った。〔ヨンゴは〕「この子の頭にあらためて包帯を巻いてやれ」と手伝いに命じた。

そして殴られて過ごした。それから夜ヨンゴが連れて出ることもなくなった。どうやって連れて行くかね。頭が腫れてるというのに。こうしてまた1日を過ごした。あの婦人〔ヨンゴの妻〕は1人で行った。その後、ヨンゴは、随分、寝て目が覚めると走って行った。ヨンゴは「傷をお湯で洗い、塩水で濡らして新しく巻け」と言って白い布を持って来てくれた。「おまえをこんな目に合わせて、仕返しするぞ」と。そうして2日経った。

ある朝、あの手伝いの男は「彼女はおまえを殺そうとしている。この婦人はおまえを殺す。命を守ろう。どうするかは自分で決めろ」と〔忠告してくれた〕。数日が経った。頭〔の傷〕は良くなってきた。「あの人に殺されるぞ。よそ者のザハチン婦人だ」と〔手伝いの男は言う〕。「兄さん、私はどうすればいいでしょうか」と〔私が言う〕、「子よ。逃げたほうがいいよ」と言った。こうして逃げ去り、あの〔背の高い、黒い肌の〕婆さんのところに行こうか！〔手伝いの男は〕袋に煎り麦粉を入れて私にくれた。それを懐に入れて、日が沈むとき、道がわかり、北へ走り続けた。走り続けた。ずっと走った。走っていると、「ギシギシ、ガダガダ」と、ある人が車を走らせている。〔私は〕犬みたいに、その車の後ろについて行った。でこぼこのあるところに入った。窪地に下って谷沿いに上っていった。私が〔そこで〕見ていると、1張の黒いテントの中から婆さんの声が聞こえる。「山羊を持って来た。引き止めさえぎろう、引き止めさえぎろう」と言う。私は、こちら側の小高い所に立っている。この家に入る。〔娘の方が〕「母さん、この小高いところに何か立っている。人が立っている」と言う。〔もう1人は〕「あれは誰か」と言っている。その女性は「あなたは誰」と声を出した。「私はノースタイ」と言った。「ノースタイとは誰か。ラムスレンのノースタイか」と言った。「そうだ」と言った。「なんてこった！放浪しているのか！さあ、さあ、こっちへ来い」と呼んでゲルに入れてくれた。男の子が座っている。あの〔背の高い、黒い肌の〕婆さんがいた。ツォノという人はイジンマジンへ逃げて行こうとしていた。また、逆らう者（反革命者）が逃げ出すのだ！あの手伝いは〔私に〕ツァリグ³⁰とブーツを作ってくれた。ブーツをもらわず、ツァリグを履いて出て来た。あの女性は私のツァリグを脱がせて、足を触ってみてから「凍ってない。凍ってない。おまえはどこに泊まったか」と。〔ヨンゴの妻に殴られて逃げ出し、昨日、野宿した〕と。〔私に〕肉汁をくれた。肉を食べて汁を飲んで、腹がいっぱいになった。彼女は靴下をつぎはぎして、ツァリグをつぎはぎした。そうしているうち、ゲルの前に騎馬した人が来た。女性と彼女の母親〔婆さん〕が「誰か」と〔言う〕。婆さんの息子が来た。母親は「〔ノースタイを〕連れて行こう」と言った。息子は「連れて行ってもいいが、明日、起きたらみんな探すだろう！向こうに着くか、途中で殺されるかもわからない。何かに遭って死んでしまうかもしれない。死ぬなら私たち4人で死の

う。向こうに着いたら、[この子の] 父母に会える。ムジンダイに言おう。そのように生きて着くか？死ぬか？誰が知るか！（どうなるかわからない。）衣服の穴を縫い合わせ、道を教えてバトジャブの家へ行け」と言った。トスギルチンという人がいた。トスギルチンの妻はわが母の妹だ。彼女の家を教えて行かせよと言われた。私を連れて行くことを願っているうち眠ってしまった。朝、起きると彼らはもういない。起きて走り、道を走ると、上のほうにトスギルチンの家があった。道を教えてもらって走り続けた。ヨンゴの家畜を放牧している世帯に着いた。「かわいそうに。まだ、死なずに生きているね。バトジャブは[おまえを] 逃してしまったと探していたよ」と言った。よく見つけて来たと話合っている。そこにいるうちに、3月に羊が出産し始めた。羊たちの出産を手伝って、そうこうしていると、バトジャブが移動して来た。[ノースタイを] 連れて行くと言ったそうだ。彼はそうするのが、彼は雄の羊と山羊を集めたので、私に歩いてその家畜を追わせるつもりだ。群れを1人で見張って追っていく。[彼には] 私と同じ年の息子がいる。あの息子は雄牛に載せた荷物の上に座っていく。歩いているとツァリグは破れて、足がむきだしになった。向う側にオジャカ、ジャラツァという2人の男がいる。こうして、私は薪を背負うのだ！

そうこうするうち、ある朝、バトジャブは「行って、カザフの家畜の群から雄羊を盗んで来い」と言う。「いや、私は雄羊に勝てません」と言った。「立っていると、雄羊が来る。そして、左側の足をつかんで引っ張ると倒れる」と彼は言う。4本の紐をくれた。私はあのカザフ人とどまらせる。ガシユン・ウスン（地名、苦い水という意味）の南側にハラガナがたくさんある。私はその中に横になっている。私はそこに行き、横になったり座ったりしていた。老人[バトジャブ]が3人のカザフ人に会っていると、羊、山羊が音を立てて来た。尻尾の大きな、2～300頭の雄羊がいた。その中に入って捕まえて引っ張って上げると、その上に座って2本の前足を縛り、また、上に座り、2本の紐で真ん中を結び4本の足をゆわえる。起きて見ると、1人のカザフ人が私の上のほうを通っている。そうすると、来て自分の羊を取るなら取れと思った。彼は羊に水を飲ませ通りすぎて行った。[バトジャブは] 2頭の雄羊をつかまえて来いと言ったので、もう1頭をどうやって取ろうかと思って、なかなか勇気が出なかった。そうこうしていると、バトジャブがやって来た。「役立たずめ、つかまえることできない」と言った。

あそこで1本のハラガナが動いている。「あそこにハラガナが動いています。見てください。あそこの高いハラガナが動いています」と。[バトジャブは] 走って行った。私は羊をつかまえて座っている。先ほど、1人のカザフ人が羊を追って来た。あそこに1頭の羊がからまって残った。お！白い雄羊だ。それを老人[バトジャブ]は屠り「子よ、行こう」と。ついて行った。老人[バトジャブ]は肉が欲しがりに死にそうだ。私がつかまえて来た雄羊を屠った。私に、せめてほんの少しでも脂肉をくれたらどうだろうね。私たちがみたいに胃袋を引き裂いている（困窮している）わけではないね。待っていると、

少し汁をくれる。腹が減っている。あそこの高いところに上ると、チョンジのトゥングが見える。なんとも、はるか遠いところだ。やはり薪を背負っていく。

そしてある日〔バトジャブは〕薪を背負ってさっさと帰って来なかったと言って、私を殴った。自分のズボンで（両手を）後ろに結わえゲルの壁に縛り付けた。小さなゲルを持っている。こうしているうち、彼の母親が「何をしているのか」と〔訊いた〕。「この子は言うことを聞かなくなった。偉そうだ。こいつをとっめないと」と。〔バトオチルは〕「この女め、なぜこの子を虐待するのか。おまえに何か悪いことでもしたのか」と言って、ブーツに挟んだナイフを出して、縛った紐を切って私を放った。「今度この子に手を出してみろ、殺してやる。青い女め」と。あの人は身体が大きい。バトオチルという。こうして、その日、彼〔バトオチル〕はそこ〔バトジャブの家〕にいた。バトジャブの母親は穀物を煎った。〔私は〕薪を背負いに行った。そうすると、婆さん〔バトジャブの母〕が出てきて、1握りぐらい煎り穀物を私の懐に入れてくれた。薪を拾ってあちこちに行っていた。あそこに1本の太い胡楊の枯れた洞がある。あちこち薪を探して歩くと、砂の上に足跡ができる。〔洞に〕入って座ると、隠れて見えないほどの空間だ。これをよく見てから行こう。1度は背負った薪を届けようと思った。再びこの木の洞に入ってみた。そしてずっとそこにいた。あいつがいなくなったと〔人びとは〕騒ぎ出して、探した。私はそこに座り続けていた。座っていた。「北のほうに足跡がない。折り返してバイタグに行った。狼に食われてしまう。惜しい息子だ。あなたは1人息子がかわいくないのか、バトジャブ」と言う。私は起き出しはいけない。じっと座っていた。身体が腫れた。頭のここ〔額〕まで入って隠れている（穴の深さは少年が立つと額に届く）。あの老人〔バトジャブ〕の息子が帰って来ているようだ。〔バトジャブ〕「あいつが逃げていなくなった」。〔バトジャブの息子〕「どうしたのか」。〔バトジャブの母〕「一昨日、父さんが殴った」。〔バトジャブの息子〕「どうして殴ったのか」というと、〔バトジャブ〕「言うことをきかず、偉そうだから」と言う。「どうしようか」と言って2人の馬に乗った人が走っていき、なにも見つけられずに帰った。私は座っていた。何もわからない。私は首を伸ばして、彼がいるかどうかを月の光で見っていた。何もいない。どこにいったかはわからない。夜どこで探そうかと言いつつ合っている。こうして、ぐっすり眠ってしまった。

そしてだね、私は木の洞から出て、砂地を走り、白いトゥングを通り、途中で走っていて溝に出くわした。その溝の水を飲んで上のほうへ走った。走っていると、1匹の犬が吠えた。たくさん犬がいる。犬に咬まれるかもしれないとこわくなった。あるホルジャンがあった。ホルジャンの壁の上から覗くと、積みあがった草があった。ただちに壁を上って入り、草の塚に入った。堆積の裏側から、少しずつ引っ張り、出した分を入り口のほうへ押しして空間を作り、寝てしまった。どれぐらい長く寝たかはわからない。その夜中じゅう寝た。目が覚めてみると、夜が明けてきた。出て南へ行くと、あの溝に

出くわした。溝の水を2口飲んで走った。あそこの黒い木をめざして走った。行った。昼になると、力が抜けた。そこに1、2本のハラガナがあった。その根元で寝てしまった。目が覚めて、溝の水を飲み、穀物を食べて進んでいると、サントイとジムセルのあいだの馬車の道に入った。そこから見ると、チョンジが近い。走っていると、途中で多数の荷物が降ろされてあった。走って入ると、鈴のついた3匹の犬が来た。漢人たちは叫んで騒いでいる。1匹の犬は私の袖を、もう1匹は裾を、また1匹はここ（左の脇）を咬んで引っ張っていた。1人の漢人がこちらへ急いでいる。すると、3匹の犬は向こうへ走って行った。〔その漢人は〕3匹の犬を叱り、石を投げて追ってから来た。そのほかに2人が来た。私は泣いていた。あの人たちは「アヤヤ」と。1人は私の涙を拭き、もう1人は私の身体をくまなく見て「大丈夫だ」と言った。〔犬が咬んだが〕肌には届かなかった。こうして、私を連れて〔テントに〕入った。私はツァリグを履いている。山羊皮のズボンを履いている。大きな青いテントだった。禿頭の大きな人がリーダーのようだ。彼はテントの中にいた。ほかのテントの人びとも集まり、7、8人になった。彼らは「アヤヤ」と言い合っている。あのリーダーはひとりひとりに、何かを言いつけて行かせている。そうしておいて、「ほら」と呼んで私に砂糖入りの1口の湯をくれた。茶だ。これ〔親指の半分〕ぐらいの菓子をくれた。そして、〔私を〕連れて外に出て服を脱いだ。しらみがいっぱいだった。髪の毛は大変だった。あの方は石鹸で洗ってくれた。ある漢人が走って来た。髪を切る平らなナイフを持ってきて、私の髪の毛を剃った。しらみはたくさんだ。また、水で頭と身体を洗った。ある男が走って入った。シャツとズボンを持って来た。もう1人は布を持ってきて脚を巻いた。1足の靴を持って来た。もう1人はズボンを持って来た。また1人はコートを持って来た。私の服をまとめて置いた。私の髪の毛などを上に載せている。火をつけて燃やした。

やっとしらみを駆除して気持ちよく寝た。夕方、駱駝が帰って来た。夜明けまで駱駝を見張る2人がいる。雌駱駝たちを連れてきて荷物につないでおいて夜を過ごすのだった。小さなやかんでいっぱいの茶とこれぐらい菓子をくれた。「アハ」と声を出して騒々しく動き、犬たちが走って行った。そして、「ジュア、モングア」と呼んでいる。家があると言う。その家に入って何をするのかと思う。若い男女が合流してきた。「ダワズィ、ダワズィ」と言い合っている。「ダワズィ」³¹⁾とは「モンゴル」という意味だ。ホルジャンの人びとは「アヤヤ」と言っている。ある女性は「アヤ」と首を左右に振った。1人の漢人が羊を放牧して歩いている。ある漢人の男は「ジュア、ダワズィ」と言って私を連れて行くのだ。私を連れて来た男は、別の男のところに行った。大きな木と小さな木の前で2人の男は会った。「ナ、ゲ、ダ、ズィ、ジュ、ワ」と言っている。「ダ、ズィ」と言うね。「モンゴル人」と言っているみたいだった。（私は漢語が）わからないから。私は2人の男の後ろに立った。犬がこわかった。

木にもたれて長いあいだ立っていると、あの人が出て来た。「父さん、この後ろに荷物

を背負った人がいる」と言う。「何者かね」と訊く。「知らない」と。「ね、会って来なさい。どうしてずっと立っているのか。かわいそうに」と言う。あの女性が走って来た。遠くから私を確認した。「おまえはノースタイか」と言った。「そう」と〔答える〕。「かわいそうに。こちらに来なさい」と彼女は言った。「この飴、菓子は何か」と。〔ノースタイ〕「商人テントの漢人がくれた。この服も。しらみを退治した。私の服は2人の漢人が燃やして捨てた」。「そうか。冬は頑張っただけで済ませよう。頑張れば、おまえの母が来るかもしれない。これでいいか」。「私は」「いいです」。「お父さん」「これからホルジャンの羊を放牧しているトル老人のところに〔おまえを〕送り届ける。ここにいと、ジャラツァ、オチルの息子たちが来て連れて行ってしまふから。〔おまえを〕連れて行ってトル老人のところで越冬させよう。そばに置いてやってくれとトル老人に言おう。この子の母は6月に来るか、5月上旬に来ることになっているらしい。ハミにいた参事が手伝って、イジンマジンから、彼女のいるところから、何世帯かをこちらへ移動させるだろう」と。

トル老人は馬に乗って羊を放牧して来た。この人は〔私を〕抱き寄せてキスし、「わが父、ジャラツァ、マリガル老人が来ても渡さない。殴って追い出す。5月上旬か6月上旬に来るだろう。おまえの母さんの弟は軍隊の隊長だ。一緒に避難した15戸がいる。こちらへ移動させる準備をしている。この冬、おまえを無事に暮らせよう」。井戸から水を運んであげていた。あそこで4月に羊が出産した。〔私は〕羊を放牧し、羊の出産の仕事を手伝っていた。そこへバトジャブ老人が来た。〔トル老人〕はたいそう怒った。「死んだにきまってる。どうやって生きていられるもんか。あの子の母親が来たら、おまえを〔罪人として〕差し出す」と立腹して、今にも殴りそうだった。彼の妻が止めた。

そうこうするうち、ジャラツァという息子が来て、〔私が〕朝寝しているところを捕まえて連れて行った！そばに住ませると言う。そうして、私を連れて行き、移動して、漢人の疥癬だらけの羊を放牧させたじゃないか！こうして、疥癬だらけの羊を放牧し、疥癬を洗ったりして平野を歩いていると、緑のモンゴル服をまとった女性が、かわうそ色の馬に乗って〔バトジャブの家に〕やって来た。入って1碗の茶を飲むや否や出て来て、私に向かって馬を走らせて来た。私は逃げ回ると、後ろから泣いて呼んで追いかけて、やっと追いついた。〔私は〕しらみだらけになっていた。服、ブーツなどを脱いで台地に投げた。衣装を作って馬の鞍にかけて来た。それを着させ、ナイフで髪の毛を剃った。馬に乗って私を自分の前に乗せようとしたが、私は後ろに乗りたいたいと言って後ろに乗った。そのとき、私は11歳になっていた。〔母は〕「わが子の世話をしてくれたね。あの老人のうちにいて服装も良かったそうだ。しらみだらけになっているね。着ていた服をジャガ（バトジャブの息子）に着させたとこの子が言う」と随分怒った。こうして、私を連れてあの家を去った。

DM300153 兄の結婚

ムンヘバートル：〔母は〕あなたを出迎えましたね！それから中国で2、3年暮らしましたか。

ノースタイ：私たちか？

ムンヘバートル：そうです。

ノースタイ：何を言ってるのか！10数年、20年暮らしたのだ。

ムンヘバートル：そのとき、農作物を栽培したりして暮らしていましたか？

ノースタイ：いいえ、漢人に雇われていた。

ムンヘバートル：誰に雇われていましたか？

ノースタイ：ターハイというチャントー³²⁾に3年間雇われた。兄は漢人の長期契約労働者になり、私は彼らの羊を放牧して5年になった。5年間賃金をもらった。母は兄と私の給料をもらってチョンジに行き、〔兄に嫁を取るため〕婚資を用意してきた。

〔母は〕バトジャルガル老人と会って「縁がある。息子を結婚させる。このままでいるわけにはいかない。結婚させて生計を立てよう」と言った。こうして漢人に金をもらって、チョンジに行った。私たちの住んでいたところは、サントイという。母はチョンジに行き、婚資を用意してきた。1瓶の酒と荷をもってあの漢人の家に着いた。当時は婚資をあげるものだったよね！双方の父母4人が相談してやり取りしていた。

そうして、〔母は〕自分の家に泊まった。「ビンバが来るはずだ」と母が言う。「ビンバとは誰か？」と訊くと、「ビンバはうちの親戚だ。来てくれることになっている」と。待っていると、白まじり模様の馬に乗ったビンバが来た。〔ビンバは〕「義理の姉さんは帰って来たのか！」と。〔母は〕「帰って来た」と。「これからどうするか」と言うと、「私は穀物を栽培してあげるその人に…、その人の父母に頼んでゲルの天窗と屋根の棒を作ってくれることになった。ゲルのジュルマは用意できた」という話になった。私たちはゲルに入って話を続けた。そのとき、うちに1頭の2歳羊と2頭の羊がいた。子山羊をつれた3頭の〔母〕山羊がいた。子山羊たちはすべてもう2歳だ。「ジュルマを覆うフェルトがない。どうするか」と私は訊いた。「わが子よ、私はフェルトを準備した。ターハイというチャントーとその妻がフェルトをくれた。ハスミの妻は1枚のフェルトをくれる。今そのフェルトを取りに行く。フェルトについては心配要らない。3枚のフェルトのジュラマではだめかね」と言う。「もちろん、いいよ」。「それに加えてもう1枚のフェルトは家にしまっただけ」ということになった。

こうして過ごし、翌朝、「3歳羊を屠っておけ」と言った。兄は夕方来て、3歳羊を屠ってくれた。屠って胴体だけにすると、「もう解体しない。このまま持って行く」と言って、朝、漢人の家に持って行った。あの漢人の名前を忘れた。わが母は〔あの漢人に〕「わが息子の結婚に婚資を用意するため、ある家に行く。乗る馬がない」と言うと、「よし、私が馬を出そう。息子さんが結婚するのはとてもいいことだ」と彼は喜ぶ。「息子さ

んの〔仕事の日数〕は1ヶ月20日間が残っている。それが終われば〔賃金を〕あげる。12日間、病気で休んだから、その12日間を差し引いて渡そう。下の息子は、羊を放牧した日数は満ちている。息子連れて行け。いつ行くか」と。「これから行く。翌朝、婚資を届ける。その後行く。戻って来てから結婚式の準備をする」と言った。こうして、朝、白い馬を用意してくれた。白色のを与えているよ。朝、ビンバと2人がロバに婚資を載せた。1つの長持ち（タンス）、黒に白まじりの長持ち（タンス）があったじゃないか！あれを載せた。

あの2人が行ってから1日経った。2日経った。婚資を届けて順調だった。老人はジュラマなどを用意しておいた。ホンブジャブという背の高い黒肌の老人がいた。こうして作っておいた。準備できた。仕事はうまく進んでいる。黒いロバに乗ってあの2つの家〔馬を貸してくれる家と嫁資をあげる家〕に行ってくると言っていたのだ。自分のゲルを留守にして行った。1張のジュルマだ。ジュルマを閉じた。

わが母はロバにたくさん荷を積んで来た。息子に敷かせなさいと、フェルトの敷物をくれた。4枚のフェルトをくれた。ああ、そうだ、数年雇用されていたから、仕方なく、仲良くなったんだね。「あげる、あげる」と言うと、男も女もみんな「あげる、あなたにはあげる。息子に家庭をつくってもらいなさい」と言ってくれた。「ゲル用の材はあるか」と訊いた。「ある。ある。ジュルマの木はある」と言った。「行くとき、ロバに乗って行きなさい。私は雄牛に荷を載せてあげる」と言って用意してくれた。家に着くと、カザフ人がついて来て雄牛を連れ戻した。こうしてそこにおいて、漢人が馬車を貸してくれた。

DM300154 結婚後

ムンヘバートル：バトジャラガルという家の前に下馬してから結婚式はどんなふうにおこないましたか？

ノースタイ：結婚式を3日間おこなった。3頭の山羊、2頭の羊、1個の磚茶、1幅のダーリンボー（粗布）、そして、母乳の恩返し（新郎から新婦の母への贈りもの）として1幅の粗布、このような8種類のを贈って結婚式をおこなった。数頭の家畜を屠り、3頭しか残っていない。自分の家畜から2頭を屠った。10数頭を屠っていると、なくなりそうだった！相手の家から羊や山羊を5頭もらった。くれた。9種類のものだから、1個の磚茶と1幅の粗布はそれぞれ1頭の家畜の代わりになる。さらに1つか2つかをあげて9種類を満たした。「9つの家畜をあげた」と話し合っって帰ってきた。ビンバ老人が入って「あなたはどれほど裕福な家に嫁がせたっていうんだ。それほどもらうかね」と〔言った〕。後に、ホゴと彼の妻は7、8頭の家畜を出して結婚式をおこなった。バトジャラガルの家に20数日間いた。結婚式をしてから去った。このセチンホーにヤン・ジンジャという漢人がいるそうだ。〔彼は〕「家畜を放牧してくれる手伝いを探している」

と、ある漢人が言う。「セチンホーに行け。セチンホーは豊かだ。あの人は裕福だ。家畜が多い。ハルージェというところで1人の老人が彼の羊を放牧している。1人の男が牛を放牧している」と言うのではないか。それで、わが母はロバに乗って行った。行ってそこに泊まり、彼に会って「1人の息子が結婚した。もう1人の息子がいる。私と息子はあなたの羊を、もう1人の息子と嫁はあなたの牛と馬を放牧しよう」と言った。〔相手は〕「ああ、なら、そうしろ」と。月々しかじかの報酬をあげると〔言った〕。

そして、あの老人〔バトジャラガル〕が何と言うかと家に来たじゃないか！〔母は〕帰って来た。〔母は〕ロバを置いて、5頭立ての馬車で帰って来た。すぐ移動する。〔バトジャラガルの〕娘と婿が行かなければ、私を連れてゲルを運んでいくつもりだ。あの人〔漢人〕のところに行って生計を立てるしかない。3頭の山羊で生活するわけにはいかない。唯一のロバを屠るわけにはいかない。

馬車が着いて止った。夕方、わが母は〔バトジャラガルのところに〕相談に行った。あの老人は「私は娘を行かせない。この冬、ここで過ごさせる」と。「私はあなたの娘に3頭の山羊を残す。それ以外にあげられるものはない。この黄色の息子と一緒に行ってあの家畜を放牧する。私は羊を放牧する。黄色の息子は馬と牛を放牧する。夜はじっとしている馬群なのだ」と。バンダイの母は「父さん、あなたは何と愚かなことを言うんですか。あなたには、屠って食べろと言っても人にあげる牛もない。1袋の小麦粉もあげられない。ぎりぎりの生活をしている。この空っぽの人は行って漢人に使われなさいよ。腹を満たして生活を向上させるのはいいことだ」と。そのころ、バンダイは生まれていた。〔バトジャラガルの〕息子は「行かせろ」と言い、〔バトジャラガルの〕妻は「〔娘を〕あげなさい。行かせなさい」と。〔バトジャラガルは〕「あなたたち3人が決めろ。私にはわからない」と。人の馬車を長く止めるわけにいけない。車に3頭の山羊を載せ、2つのジュルマを載せて、その上に寝て行った。結構、空間のある車だった。5頭の馬を入れた。あの馬たちは太った、みごとなものだ。前の方に4頭、真ん中に1頭、合わせて5頭の馬を入れていく。夜着いた。外に大門がある。中にもう1つの大門がある。外の大門を開けて入れてくれた。婦人と娘の2人、もう1人の男の子が出て来て、馬車について行った。彼らはゲル、山羊を載せて行った。私はロバに乗って後ろから行った。そのロバはときどき走りながら行った。

DM300155(1) 母が狼に追われそうになった話

ノースタイ：漢人の家に来て、羊を受け取り、母と私が放牧する。昼に放牧し、夜に囲いに入れる。家は多くない。ジュルマを立てなかった。1軒のかわいい家があった。オンドルがついている。その家に母と私が住んだ。2つのジュルマを二重にして立てて兄が住み、牛を放牧した。牛も囲う。羊も囲う。馬も囲う。朝になったら、馬と牛を早く〔囲いから〕出す。

セチェン：囲いはどのようなもので造りますか？

ノースタイ：囲いはまったくレンガで立てられた。羊は入れて中から錠前鍵をかける。その中に私と母の住む家がある。こうして羊を放牧し、冬を過ごした。

セチェン：報酬はどれぐらいですか？

ノースタイ：報酬は充分だ。1ヶ月の報酬として、小麦粉のほかたくさんのものをくれていた。

セチェン：お金はいくらでしたか？

ノースタイ：多くくれていたと思う。私は10数歳の子どもだから分からない。羊はなくさない。

セチェン：放牧するとき、歩いて行きますか？馬に乗って行きますか？

ノースタイ：歩いて行くよ。どんな馬に乗るといのか！（馬はいなかった）そばにもう1人の漢人がある。彼に頼んで（毎朝羊を）早く出すようにとっておいた。

セチェン：漢人とどうやって交流していましたか？

ノースタイ：わが母は漢語がよくわかる。〔ある日、母は〕「あなたは羊を放牧し、夕方、兄のところで食事しなさい。3人でいなさい。私はあそこの家に用事がある。行ってくる」と言ってロバに乗って出た。2日経って、3日目に帰って来た。料理を作ってあった。食事をしていて急に母は泣き出した。「どうしたのか」と言うと、「夜、狼に食われそうになった。この3人の子には運がついている。私は来る途中、サントイの北側のあの家を出て暗くなった。夜、進んでいると、突然、ロバが足を速める。見ると、こちら側に1匹の狼、そちら側に1匹の狼がついてきた。それで、マッチをすって投げていると〔狼たちは〕少し離れた。それから、スカーフを燃やしながら進んでサントイに入ってきた。両側から襲ってくるようだった。サントイの北側に来て〔狼から〕離れられた。そして、仏さまに祈って泣いて泣いて『このものをちゃんと遠ざけてください』と祈って願って行きました。これからは、夜、こんなふうに行くものじゃない。私は夜出かけない。昼間なら狼に教われないよ！」と言った。

DM300155(2) 中国で商売をした話

そして羊を放牧して冬を越した。冬は羊の世話をして過ごした。3月に車が来て、セチンホーというところに移動させた。あの漢人の羊を6年間放牧した。羊を放牧していると、1頭の馬が疥癬病になったという噂があった。あの漢人は馬を見て「これを屠って処分しろ。殺して埋めて捨てろ」と言った。疥癬ではない。別のものだった。母は昔ここで暮らし、知っている家がある。屋根がない。壁だけのものだ。それで、「私は殺さない。あそこ〔の家〕で世話をすると」言った。わが母は殺させなかった。「それなら馬群に入れてはいけない。どうやって世話をするか任せる。家畜にして自分のものにしろ」と言った。そうして疥癬の子馬を飼って冬を越した。春、毛が抜けて治った。あれは疥

癖ではなかった。何の病気にかかったかわからない。その馬が5歳馬になった。その馬が4歳になる年、ビンバが来て、去勢してくれた。ビンバという人は1人であそこでムンデイという人の羊を放牧していた。私の牛は10数頭、羊は20数頭、山羊は10数頭いた。乗用の馬を1頭もらった。もう1頭雌馬も持っている。こうして自分の足で立つようになってきた。2頭の雄牛を持つ。足に怪我した黒い牛は漢人からもらった。足に怪我した黒い牛は2頭の雄子牛を産んだ。1頭は4歳牛になった。1頭は3歳牛になった。こうして、さらに自分の家畜を持った。また、たくさんの毛を売った。3人の漢人を連れてきてフェルトを作ってもらった。そして4枚の壁をもつゲルを立てた。

そしてだんだん自分の足で立つようになってきた。ある昼、ヤン・ジンジンが来た。茶を飲んで座っていて「なあ、ニマ（ノースタイの兄）よ。これから商売しろ。銭から銭がうまれる。分から分がうまれる（元から利を得る）。今持っている家畜、2頭の雄牛、あの1頭の馬を売り、この1頭の牛を欲しい人がいれば金にしてもらえ。そうやって商売をしろ。人に使われては出世できない。わが家畜を長いあいだ放牧したなあ。私は羊を回収して別の人に頼もう。おまえの弟はこの牛と馬を放牧してくれ。おまえの弟は良い子だ。賢い子だ」と。何日か経つと、1人が来て羊を受け取った。羊を返した。馬と牛は残った。あのホルジャンで馬と牛を集め、300頭ほどの馬、300頭ほどの牛を3ヶ月放牧する。穀物を取獲するまでだ。

そしてわが兄は「私は商売をして来よう。上のほうに穀物を取獲するチャントーたちが来ている。あるチャントーは栗毛の馬がほしいと言ってる」と。大きな身体のすばらしい栗毛の馬だ。だから、売りたいくない。義理の姉も母もそうだ。「たった1頭の馬がこうしてるうちに死んでしまう。あとで、乗るものがなくなる」と〔母は言う〕。「いや、自分の力でやっていきたい。なぜそんなに惜しむのか。私は商売をして来る」と彼〔兄〕は言って行こうとした。〔母は〕「どこに行くのか？おまえは」。〔兄は〕「ゴクに行きます。ゴクという裕福なホルジャンを回ります」。〔母は〕「そうして命を落とすかもしれない！わかっているのかい！」

〔兄〕「行くよ」と言って行った。あのチャントーに会って栗毛の馬を売った。高く売った。また、2頭の雄牛を追っていった。2頭の雄牛を2人の漢人に売った。1頭の不妊の牛がいたね。あれをも追って行って売った。そうして金をもってゴクに行った。ゴクに5つのホルジャンがある。そこに泊まった。泊まって60頭の雄羊を購入した。すべて借金（1頭雄羊を幾らで売るかという予算）だ。1日経った。2日経った。3日経った。帰って来ない。4日経った。いない。母は「もう漢人に殺された。生きてるかどうかを見て来い」と、眠れない。母は〔心配で〕死にそうだ。ヤン・ジンジンの馬群に馬車に使う栗毛の雌馬がいた。私はそれを捕まえて来た。行こうとすると、興奮する雌馬だ。一年中、子馬と分離して農場で使った。それに乗って走らせた。ゴクに来た。そのホルジャンに来た。「わが兄は来たか」と訊くと、「うちに泊まって60頭の雄羊を追

って北へ行った。昨日、昼間ここのグーウーシェンという裕福なホルジャンに行った」と言った。さらに下ってヤンハンシュという裕福なホルジャンに行った。「一昨日あのウシンという裕福なホルジャンのところに行ったそうだと」言われた。ただちに、そのホルジャンに来た。「家に宿泊して60頭の雄羊を購入し、100頭あまりの雄羊を追って北へ行った。北の方のヤンハンシュから羊を受け取って北へ行くそうだと。家々に寄って雄羊を求め、少なくとも3,400頭の雄羊を集めたはずだ」と言う。ただちに走らせた。家々を訪ねて行った。ヤンハンシュの家に行くと「今朝、わが家から40頭の雄羊を買ってウログチンの家に行った」と言う。走らせてその家の外に着くと、なんてこった、たくさんの犬が騒々しい。私は犬がこわいじゃないか。追い払っていると、婦人が出てきた。「あなたの弟が来た」と呼んだ。兄は食事中だった。食事を置いて走って来た。〔私は〕「どうしたの。母は死にそうだと。行ったきりで便りもなく、なんて人なんだ！」と言った。「そうだね。これらの雄羊を集めていた。これは309頭の雄羊だ。今、この人から40頭の雄羊をもらう。朝、あそこの雄羊をもらえば400頭以上になる」と。〔私〕「これからどうするのか」。〔兄〕「ほかに1頭の立派な白馬を持っている。購入した」と、兄は馬に餌を与えておいた。〔兄が〕「明日の朝、おまえはこれらの羊を数えて、そのうち40頭をわが弟〔おまえ〕に与えよう。私は先に行かなければならない。母が死んでしまう。下の息子も出かけて2人とも死んだと心配するからだ」と言う、「そうだと。そうしよう。早く行け」と返答した。私はそこに泊まることになった。朝起きて食事をとって、雄羊をすべて数え、その群から40頭の雄羊をもらって追って行った。記録帳がある。記録帳を見る。その記録帳が私にわかるか。あのホルジャンに丸1日泊まり、あの雄牛の代金、また、牛の代価、馬の代金などを帳簿につけた。そのほかまだ数件ある。合わせて10件のやり取りがある。羊は安い。こうして上って、放牧しながら追って行った。昼頃、暑くてたまらない。これらの大きな雄羊はこんな〔手のひらを開き5本指を最大伸ばした状態の大きさ〕尻尾をもつ。大きな雄羊ばかりだ。〔その時期は〕7月ごろだと思ふ。暑かった。雄羊たちは騒々しく進まない。そうしているうち、水場に来て雄羊たちは集まって横になった。私はそばで裸になり、手足や身体を洗い、馬の鞍などを固定した。しばらく寝て少し涼しくなった。〔雄羊を〕起こして追って行った。なんてこった。ゴンジャの家の上のほうから兄が馬に乗って走って来た。迎えに来た。「あのひよっこのわが息子はきつと死にました。あの〔畜〕糞³³をもらいなさい。あの息子は放浪してしまう。命を落とすよ、おまえ」と言っ、母は怒っている。「もう、母さんは何もわからない人ですな」と言っ〔兄が〕迎えに来た。2人で追って行こうとすると、〔兄は〕「おまえは先に行け。母さんはおまえを心配して死にそうだと」。

ふたたび〔母は〕私を見るなり抱き寄せてキスをし、「生きて帰って来ましたね」と言っ泣いた。朝起きて「あの息子は死ぬかもしれない。行きなさい」と私を行かせるのだ。義理の姉は馬に鞍をつけて馬と牛たちを放牧する。彼女たちにはそれなりの数の羊

がいる。100頭あまりの羊がある。彼女たちの家畜はうちの囲いで一緒にいる。家畜の群れを合わせて、交替で放牧している。

〔兄は〕私に先に行けと言う。「今夜は月の光で私が家畜を追って帰る。おまえは安心して帰れ」と言う。〔私は〕「もう少し進もう」と。〔兄は〕「おまえは自分の葦毛の雌馬を交換しろ」と。そうして走らせて帰って来た。暗くなってくるころ、着いた。〔母は〕「兄さんはどうしたか」と言う。〔私は〕「母さん、彼はたくさんの雄羊を追って来る。あんなにたくさんどうするのか、わからない」と。〔母は〕「そうなるんだよ。そうしているうちに漢人に自分の首を絞められるのだ」と言う。わが義理の姉〔兄嫁〕は「漢人に首を絞められないような頭を持っているでしょう」と言う。こうしてその日を過ごした。〔兄は〕サラタイ老人と一緒に夜、雄羊を追って着いた。あの羊たちは昼の暑さのもとでもよく草を食べた。1日中追って行ったね。散って行かないのは不思議なことだ。あれは散ってしまうからと言って、母は〔羊群を見張るために羊のそばに〕敷き布団を敷いて横になった。その日を過ごした。翌日も過ごした。その次の日も過ごした。〔兄は〕サラタイのテムルと相談していた。チョンジに追って行くことになった。また、途中で入手した100頭あまりの雄羊がいる。盗んで手に入れたかどうかはわからない。商売で儲けたのかどうかはわからない。その中から、150頭の雄羊を残してそのほかを追ってチョンジに行った。追ってチョンジに行き、12、3日して帰って来た。子牛を連れた6頭の雌牛、2頭の雄馬、3頭の雄牛を追っていた。1頭の褐色の牛と1頭の黒色の牛、もう1頭の角のない牛を追って来た。1歳子牛の身体は大きい。3歳〔牛〕のようだ。それほど大きい。そして、泣かせながら、縛り付けた。1枚の白い袋に銀を入れてあった。大きな袋だ。わが母は言った。「これから牛が届いて、家畜が来ると何か起こるよ」と。〔兄は〕「何も起こらない。母さん、あの150頭の雄羊はあまつてる！冗談みたいにあまつてる。何を言うんですか。こうするんですよ。子牛を連れたこの6頭の母牛はつないでおけ。あの3頭の雄牛は、明日、私が漢人の家に届けよう。注文された。あの3頭の雄馬は追って売ろう。この牛は残る。自分の家畜にする。袋の銀は支払いに使わない。この雄牛らをあの雄羊の代わりに精算して渡す。こうして向こうにこの銀を出してまた残る。みんな見てろ」と。あそこでは紙幣がなかった。銀を持って行った。1泊して、2日目、3頭の子牛を追って、馬を連れて行った。「ある漢人は去勢牛を注文した。代わりに雌馬をあげようか」と言って去った。白い袋の底に、余分のもうけがある。この150頭の雄羊の利益だ。〔兄は〕「私はこれをサントイにもって行って売る」と言っていた。サントイにいる漢人に会って来た。「50頭の雄羊から10頭が残る。40頭の雄羊をジムセルに届けて売る。これを自分の家畜にする」と。牛と馬を持って来た。100頭の雄羊を売って羊と山羊を含めて300頭の小型家畜を追って来た。

DM300085(1) 漢人に雇われたり、商売したりした生活

漢人に雇われたとき、兄弟2人だった。わが母がいた。1人の姉がいた。1張のジュルマを持っていた。1頭の黒いロバを持っていた。貧しかった。2、3頭の山羊を持っていた。私は16歳だった。わが兄は17、8歳だった。セチンホーというところで、漢人に雇われていた。そこで雇われていて、わが兄は嫁をもらった。わが母はそこに行って話し合った。月々どれほどもらえるのか、どれほどの家畜を放牧するのか、どれほどの牛、どれほどの馬を放牧するのか、よく話し合った！そしてわが母は食を得て私たちを育てたのだ。その人がいなければ、私たちはみんな散ってしまっただろう。死んでしまっただろう。

漢人に雇われて、自分には結構な給料をもらう。月に数枚の紙幣と食糧をくれる。小麦粉をくれる。足りないものをくれる。これらは話し合っていた。給料は毎月もらう。そうやって暮らしてくると、漢人に頼らずに、自分で食を見つけるようになるではないか。

私は母と2人で漢人の羊を放牧していた。わが兄は嫁と2人で漢人の馬群を放牧していた。わが姉は人と結婚し、ここに来て亡くなった。重病だった。手術なんてものがなく病んで亡くなった。そうして生活していて、わが兄は長期の雇用人になり、漢人に数年使われて暮らした。私は19歳で、わが兄は20代だ。漢人の畜群の委託をやめてから、わが家はウルゲン・シリゲというところにいた。2、3頭の馬を売り、兄が商売をし、450頭の雄羊を追って帰って来た。「彼はどこに行ったか」と母は求め泣き、私は探しに行かせられた。私には1頭のすばらしい馬がいる。それに乗って漢人の馬を放牧していた。そうして探しにホルジャンを訪ね、北へオルゲチンという人の家に来た。3日泊まった。馬に餌を与え、食事をしていた。[私は]「どうしたか」と言った。[兄は]「ここに泊まり、朝のうちに帰る」と言った。[私は]「母は眠れなく、食べられなく、死にそうだ。帰らないといけない」というと、[兄]「そうしよう」と言い、あの漢人から90頭の雄羊をもらった。あの漢人からもらえば、450頭の雄羊になる。帳簿に記録しておいた。「帳簿に記録して弟に〔放牧を〕任せてくれ。私は行かなければならない」と言って行った。その雄羊群は、ここに来て150頭を残し、300頭をチョンジというところに連れて行った。サラトのテムルという人と2人が、10数日泊まった。それらの雄羊を売り、不足金を漢人用の白い布の入れものに入れ、20頭ほどの牛、10数頭の馬を自分のものにしてもらった。あの150頭の雄羊は余分のものだ。この6頭の牛はあまっている。1頭の去勢された牛、数頭の馬はそれらの羊の代金として出される。すべて払い切った。わが母は「息子よ、どうしたのか。やっと終わりにしましたか」というと、[兄は]「終わった、母さん」と。外に儲けた牛がある。また、250頭の雄を追ってきてある。250頭の去勢された羊の中から100頭をサントイ、ジムセルに追って行き、2頭の去勢牛の代金に出すことになる。明日休んで明後日追って行く。50頭の去勢された羊の中の10頭を残し

て40頭をジムセルに追って行って売る。こうして自分の家畜を集める。私たちはこうして富を得た。たった3年間のうちに裕福になった。豊かになって70頭ほどの牛、400頭の羊、40頭あまりの馬を持った。ウイグル人から3頭の駱駝を購入した。こうして漢人、カザフ人のあいだで商売していると、ヌトックがブルガンへ移動することになった。年寄りたち、ヌトックのみんな、フレーを移してブルガンに帰る。自らのダシワンジル山に帰るため移動したのだ。私たちに何がわかるか！年寄りたちのおかげで移動して来た。

DM300156(2) ブルガン川地域に移動するときの話

ここからグループが派遣され、ショロンクーの向こう側の山にバトをリーダーとする15人が行ったのだ。私たちはそこにいて後にセチンホーに行った。そのとき、わが母はわかったのかな、どうしたのかわからない。「息子よ、遠いところにしても、近いところにしても、移動するのに駱駝は最適の家畜だ。雄牛のように荷を運ぶ。チョフと言うとすぐひざまずく。7日間何も食べず行っても平気だ。駱駝という動物だ」と。ある昼、茶を飲んでいると、〔母は〕兄に言った。「上のほうのチャントーはこの夏じゅう3頭の雄駱駝をつないでいた。おまえが行ってあの駱駝を買うよう交渉して来い」と言う。「荷を運ぶのに楽か」と言う、「空腹で7日、10日行っても大丈夫だ。チョフというとすぐひざまずいてくれる。つなぐと、そこにじっとしてくれる」と。わが兄はあそこへ行って、おどろくような高値で3頭の駱駝を買った。1頭の雌馬、10頭の3歳牛、子羊を連れた10頭の羊、10頭の雄山羊、子山羊を連れた10頭の山羊と交換した。〔これらの家畜を〕南から2人のチャントーが来て追って行った。こうして駱駝を連れて来て「〔雇い主の〕モージャ（毛家）、ヤン・ジワンインの馬と牛を分けて届けてやれ。彼らの家に入らないで帰って来い」と。「あの黒肌の漢人に言おう。明日、彼の羊を追って届ける」と。〔翌日、彼は羊を〕受け取らない。届けてすぐに移動して去ったじゃないか！その夜が過ぎた。次の夜、バト隊長は15人の兵士を連れて来た。ここから70戸の私たちをセチンホーから移動させた。朝、騒いで戦いになり、ドゥグルという人は死んだ。大きな洞窟があった。大きな洞窟に入って爆発弾をなげようとした。1人の新人が後ろについて入ると、また、撃たれて殺された。2人とも死んだ。ボロ、シリグは驚いて叫んだ。どうしたかという、なんてこった、後ろで銃撃の音が恐ろしいじゃないか！そのうち、みんなが入った。包囲していた。兄が私を連れて「早くこっちに乘れ」と。銃での狙っている人ばかり立っている。後ろから、殺そうとしている。向こうに立っているのを何と言おうか。なんてこった、銃弾で撃たれたら、馬の片側に身を下げる。1頭の茸毛の馬に乗っていた。〔あの馬は〕もう死んだ。こうして逃げ出すと、ホルジャン（村）がある。なぜかわからないが、薪を抱えて歩いていた老人を殺した！こうして、その夜、ヌトックは移動して行った。暗黒の中で霧がかかり、日中に移動した。翌日、ゴンボ・ノヤンは妻子を置いておいて、自分だけ折り返して逃げ帰った。

DM300081(2) ブルガン川地域で申年の雪害の中での移動

このバイタグを通過してここに入ってきたとき、70頭あまりの牛、400頭あまりの羊、40頭あまりの馬を連れ、3頭の駱駝に荷物を積んでブルガン〔川地域〕に来た。ここに着いた日の夜、乗ってきた馬は凍死した。3頭のまだ去勢していない雄の子馬が残った。そのほかの馬は当日の夜、泥棒に盗まれた。オスマンのカザフ人が盗んで行った。オスマンのカザフ人がこの下のほうにいた。とても太った馬が走っていた。牛の半分が餓死し、30頭あまりの牛が残った。殺して食糧にした。そうして30頭あまりの牛が餓死した。バイタグに400頭の羊を放置した。そのうち170頭の羊や山羊を連れて来た。それらの家畜で何とか生活をしてきた。

DM300155(3) ブルガン川地域に移動してきたときの話

セチェン：西〔チョンジ〕から来たとき、どれぐらい家畜をもっていましたか？

ノースタイ：西から来て、バイタグで400頭の家畜を放置した。ポンスグの家に預かって放牧してもらった。雄山羊を20頭追い立てて来た。バーランの口というところを通って来るとき、70数頭の牛、40数頭の馬がいた。ブルガンに来たとき、これ（1尺）ぐらい、雪が積もっていた。ここのツァガン・トロガイに来て泊まった。そこを出るとき5頭の馬に乗って行った。ほかのものは手をつけられない〔暴れものだ〕。1頭の葦毛の種馬はチョンブルのボロと言うが、母が乗った。葦毛の種馬にうちの姉が乗った。老練なまだら馬にわが兄が乗った。1頭の5歳の馬に私が乗った。この5頭の馬に乗ってやっとブルガンに着いた。

来るとき、4枚壁のゲルを運んで来た。私は牛、羊、山羊、馬を追い立てて、後続した。〔兄は〕3頭の駱駝に荷を載せて、先に行き、宿営する場所を見つけることになった。向こうから来るとき暖かくて、水の音が聞こえるかのように、草が匂うかのように、馬はいななき、牛は鳴きしていたが、バーランの口（地名）を出て来ると、家畜が展開してしまった。〔私は〕「馬と牛が行っちゃった。私が止めてくる。羊を追って後ろから来てください」と言った。〔家畜は〕とっくに展開してしまった。流れるように走って行った。私は馬を走らせてバーランの口のこちら側の平地で群れの先頭を止めていると、牛と馬たちが合流した。すると、母が来なかった。牛と馬を放っておいて馬を走らせ、母のところへ行くと、数頭の雄羊を追いながら馬を引き連れ「ボボ、ボボボ」と声を出して歩いている。「どうしたの」と言うと、寒くて凍りそうだ。寒くて大変だ。脂肪の糞のようだ。〔私は〕「ね、オヘンバースン（脂肪の糞）³⁴⁾、馬を引き連れて後ろからついて来てください。下のほうのあそこにはハラガナがあるから火をつけてあげる」と〔言った〕。母はマッチを持っている。私はマッチを持っている。〔私は〕馬を走らせていった。大きなハラガナの根元は乾いている。それを足で踏み付け細かくした。〔そこには〕雪がない。マッチを擦って火をつけた。そうしていると、凍って死にそうだった人〔母〕は、

羊、山羊を追い立て、馬を引き連れて「オオオ」と声を出して来た。赤くて大きな火になった。かなり大きなハラガナだ。私は馬を走らせて近づいた。どうするかというと、〔母は〕「オオオ」という声を出すしかない。どうしようか。死んでしまうのか。気の毒だ。こんな気の毒なことに遭うかと思いつながら〔燃やした〕ハラガナのところに〔母を〕連れてくると「火から離れて座る」と〔母は〕言うので、雪をどけて座らせた。当時、私はこのようだ。手は丸出しじゃないか！何もはめてなかった。寒かったら降りて雪で洗う。そうして暖める。私は1枚のボロボロの服を着ている。私は「服を脱いで〔母さんに〕あげましょう。これをかけてください」と言うと、〔母は〕「いやいや。おまえが凍って死んでしまう。要らない。オブ…」と言う。こうして火から離れて座りながら、火にあたって暖かくなった。私は馬を走らせて羊と山羊を追って来た。追って来て下のほうに止めておいた。牛と馬がどうなったのかはわからない。しばらくすると、人の声が聞こえ、馬に乗って走って来ている。すると、兄は大きな毛皮外套を馬に載せて来た。やかに茶を入れ、毛皮外套を持って出て来た。

茶を3椀飲んだ。〔兄は〕「ここにずっと座っているわけには行かない。行こう。私は雄羊と雄山羊を追って帰ろう。馬と牛は営地のそばに来ていた。集まって一緒に来ていた。この2人はどうしたのかと思って迎えに来た」と〔言った〕。〔母を〕馬に乗せて〔外套を〕かぶせているうちによくなった。〔さっきまで縮んでいた〕母の舌が伸びた（話ができるようになった）。こうして数頭の羊と山羊を追っていった。うちの義理の姉はハネガヤ草に火をつけた。ここに1つの白い高地がある。私は遠くに見える火を目標に家畜を追って来た。5頭の雄羊と5頭の雄山羊は、ハネガヤ草のところに入って雪に埋まってしまった。〔私は〕ハネガヤ草の中に入って横になった。馬は北の方へ行った。そのとき、ハネガヤ草はこれ〔人の身長〕ぐらいの高さだ。私みたいな背の低い人は入って横になれる。雪はこれ〔膝まで〕ぐらいだ。雪に埋もれた家畜を馬に載せて運び、1夜よく睡眠をとるつもりだ。馬たちを外につなぐと、夜じっとして横になる。連れて来て入り口のところにつなぐように言うと、〔義理の姉は〕「移動を開始してからよく休んでいないのだから、おまえ自身が中に入って暖かくして寝て」と言った。今夜、北からか南からか天気が崩れる。寝てどうする。このブルガンのプト（ゴビ地帯に生える灌木類）、そして、薪は恐ろしく多い。なんてこった。乾くと、このようにカラカラして落ちている。ジュルマの中では燃やさない。野外に2本の棒を交差して立てた。食事を作って食べたり飲んだりして、母は元気になってきた。「母に〔おおうものを〕かけた。私は大丈夫だ。〔私は〕「あの人を元気にしてください」と言った。こうして過ごした。

朝、私は外にどうなったかと心配して起きてすぐ走った。注視しながら行く。牛はいる。4頭の3歳馬を見つけたので、そちらを見に走った。走ってここの渡口に着くと、黒毛の白まじりの馬が死んでいた。また、探してみるとチョンブルのボロという、すばらしい茸毛の馬も死んでいた。さらにそうして走って行って見たら、茸毛の種馬が死ん

でいた。私の乗った栗毛の馬と、兄の乗った白い馬はいる。その2頭を引いて連れ帰って来た。〔兄は〕「どうしたのか」と。〔私は〕「ほかの3頭の馬は死んだ。まいったね。あの馬たちはいない。どこに行ったんだろう。私はこわい。これは恐ろしいことだね。これから馬を集めて、乗用を捕まえよう。だけど、おとなしいものはいない。彼女たちが乗れるかな。馬を捕まえよう。そうして、どこかに着いて宿営したいね。そうするほかない」と〔言った〕。兄は急いで茶を1杯飲み、白い馬に乗って上のほうへ行った。馬を走らせてシャラ・トロガイに行き、バライダイという人の宿営地にテントを張ることになった。目を凝らして見ても、あの馴らしていない3頭の雄馬でどうなるものか！私は歩く。姉は歩く。義理の姉が歩く。牛を追って歩いてやっとそこに着いた。

2日泊まって、バラダイの弟のムンへに訊いて2歳の駱駝を私に貸してくれた。2歳の駱駝に乗って自分の馬たちを探し出した。〔あの夜〕泊まったところのそばに白い小高い所が見える。そこに上った。上から見下ろすと、細い道が見えた。降りていくと、先の小高地に上がっていた。人間はね、探し回っていると、迷ってしまう。さらに随分行った。茂った木ばかりで、あの夜、泊まった場所が見つからない。ずっと回ってやっと細い道を見つけて進んだ。しばらく行くとまた、あの小高い所の上が上がった。こうして夕方になったじゃないか！このままだと冷えて死ぬ。道を迷わず帰らないと。あのときは道に迷ってやっと家に着いたよ。兄はダシワンジル山の上のほうに行っていたが、馬は見つからなかった。オスマン〔一味〕のカザフが追って行ったのだ。肥えたみごとな馬たちだった。

DM300082(2) グループに300人を集めた話

ここ〔ブルガン川地域〕に入って来たその冬に混乱が起こった。カザフと中国が戦った。ここのバイタグというところで戦い、モンゴル軍も参戦した。来たばかりの私たちも30人が徴兵された。そして、バイタグの向こう側のドトラ・ハラーというところに駐屯した。中国の兵隊はアラタンガダスンというところの北側に来ていた。そこで3回戦い、中国側は3敗し、最後の戦いで惨敗し、4月に降伏して去った。そして、フフ・トフイというところにいた中国の兵隊も降伏して去った。それにつれて、4月に私たちは移動し、このブルガンに入ってきた。6月に遊牧民たちは夏営地に出た。そこに行き、食べるものはない。そのとき、ホボグ（ホボグサイルのトルグード人）がここに入って来た。私たちのパンガハンが入って来た。このストックは大きい。その冬に雪害になった。雪害のせいで家畜の半分が減った。だから困ったなんてもんじゃない。食糧がなく、肉ばかりで暮らした。それから、夏営地に出ていると、ハラー・バラチンギン・サラーというところで、グループが人を集めていた。その谷に人びとを寄せ集め、徴兵し、10数日間で300人を集めた。ケメニグという隊長が率いて300人がついて行った。そうして行き、中国の兵隊がいたフフ・トフイというところを通り、向こう側の湖を過ぎ、ある

谷に入って1ヶ月ほどそこにいた。指示があるだろうと待っていると、中国の兵隊が投降し、ここからカザフ人が行って占領した。そうして、戦争が終わった。そうすると、300人の兵士が帰って来るではないか。帰って来て川のところにいた。私たちの方は、中国側から150戸が来ていた。ホボグも先に60、70戸ほどがここに移動して来た。〔中国側の〕ハラ・シャラ（地名）から入って来た。私たちはチョンジから入って来た。

ここに来て冬を過ごす。このあたりはびっしり葦でおおわれていた。ここには2筋の道しかなく、歩み易い場所なんてない。この木なんてほんとにびっしり。囲いになったような木だった。中に入って住める囲いのような木だった。今は、運んで燃料にしているうちにもうなくなろうとしている。この上のほうにウラン・ウジュル（地名、赤い先という意味）というところに、歩けないほど木が生えていた。取って燃料にしたり、囲いを造ったりしているうちに使い果たした。

DM300085(2) 参戦

このブルガンで戦争が起こった。私は24歳だった。銃は撃っていた。ホイホイを殺していただろう。〔敵が撃った〕銃弾は身の回りに落ちている。私たちのリーダーはジャムリンという人だった。最後の銃はちょうどあの高いところにある。中国軍は夜明けごろ来た。まったく封鎖した状態になった。あそこ〔上司〕からの「銃を撃て」という指示を待っていると、敵が入ってきたのがほんやり見えた。敵が出て来てそこを占領しようとする。私たちはそこに待ち伏せしている。私たちの先頭には15人が待ち伏せしていた。わがバンガハン（バンギン・トルグード）から参戦したホンゴルというメルゲン（射撃の名人）がいた。彼が見ていると、ある漢人が「殺せ」と叫んで出て来た。すると、彼〔メルゲン〕が撃って倒した。それで銃声が一齐に響いた。重機関銃が発射され、銃声が鳴り渡る様子は恐ろしい。私は銃を持っている。ロシアのセセルメンドという銃だ。ひたすら撃っていた。私はそのとき、殺していない。私は西のチョンジにいたとき、漢人の羊を放牧して銃撃を学んだ。ヤンホライという銃があった。それを背負って羊を放牧し、狼が見えると射って、狩りをしたりしていた。

DM300141(3) 読み書きの勉強

私たちを集めて、南の木の下で授業していた。授業をしていたのだ。ゲルの中に大勢いた。その後、一部の人は〔勉強を〕やめた。私をはじめとして参加し、成果無くやめて、変われるか？こうしてそれは解散したのだ。一部は勉強した。一部は放棄して逃げ去った。ある者は自分の名前を書けるぐらい。よくものごとを知る者はあれ〔先生の書いたもの〕を見て書いたりしたが、私は逃げた。だから、私は自分の名前が書けない人間だ。私は本のことはまったくわからない人だ。「暗い孔（文盲）」だ。

当時、赤い鉛筆があった。この指〔人差し指〕ぐらい〔の長さ〕だ。鉛筆を3つに分

ける。1本の鉛筆を2, 3人の子どもが使う。〔1本の鉛筆を3つに〕折って尖らす。食べものがない。何もない。それに加入するより、羊を放牧し、黒い茶葉の残りでわかしたお茶を飲むほうがましだと思い、勉強を捨てて逃げ出してしまった。また、呼びに来る、行かない。1回呼ぶ。2回呼ぶ。行かない。そのうち放っておく。呼ぶと、少年たちは行くね。ある者は身につけたね、女性。一緒に勉強した人は覚えていない。忘れた。

ガンガン・ダミリンが教えていた。彼は投獄された。彼は牢屋から帰って来て、妻の家に行った。長持ち（タンズ）の上に1本の酒、1塊の茶葉、1切れの絹を置き、「妻を連れていきたい」と言い、カンパニーから妻を連れ出して逃げたようだ。

ヌトックが〔ここに〕来た翌年（1943年）からガンガン・ダミリンは教えていた。私は25歳だった。30歳の人もいた。40歳の人もいた。少年もいた。少女もいた。読み書きを身につけるためだ。放棄するばかりなので、後に学校を作ったね。少年少女は残った。大人はやめて去った。そのため、少年と少女を集めて学校に入れ、勉強させた。だから、彼らは勉強ができた。この少年たちは読み書きができる。彼〔自分の甥に当たる男のムンヘバートルを指している〕をはじめとして。

1人ずつ、これ〔両手の平を合わせた〕ぐらいの紙を与えていた。先生は黒板みたいな木の板を置いた。それを煤で塗る。薪の灰だね。薪の消えさしじゃないか！〔先生は〕その煤で書いて教えていた。木の板をぶら下げてつるつるとした。黒い煤で書いて吹き落とし、また煤で書く。布巾を水につけて拭く。この人に教える。あなたに教える。また、あの人に教える。その次、私に教える。それは何という文字ですかって1つ1つ教える。こうして、それを書いて、書いて、また、繋ぎあわせて「このような語」でしたねと教える。それ以降、どうしたかという、私は出てから〔あの少年たちに〕訊くと「今では紙に書くことになった」と。私は紙に書いたことがない。やがて、子どもたちは1本ずつ、鉛筆をもらった。

DM300085(3) ブルガン川地域で結婚して暮らした話

そしてブルガンに入って来て穀類を栽培し、あそこのフフ・ウジュルというところで26歳で嫁をもらった。わが兄は残りの財産を私に分けてくれた。2頭の駱駝、1頭の馬、3頭の山羊と3頭の子山羊、1頭の羊と1頭の子羊をくれた。そうすると、わが母は〔兄に〕「おまえがわが息子にあげたのは少ない」と。「私は若いし、2人だけです。私は人の羊を放牧したり、他人の仕事をして上げたりして腹を満たすことができます。あなたたちは4人家族です。私はもうもらいません。これでいいです」と言って出て来た。このヌトックの家畜、12、3戸の1000頭あまりの羊、家畜を放牧し、山の中で冬を過ごし、正月ごろ家畜を返し、こうして何年間か暮らした。アルタイの獣を狩って来て暮らした。当時、狩りは禁止されてなかった。貧しいとき、獣を狩った男の勝ちだ。妻と2人はあの山で冬を過ごし、生活した。17、8年、民の家畜（共同化前の私有家畜）を放

牧した。そうしていると、ネグデル³⁵⁾ というものができた。ネグデルとはどうするものかということ、富人たちが家畜の面倒を見きれず、ネグデルに任せるというのだ。貧しい民衆を助け、平等にするというのだ。そのため、あるリーダーが宣伝して行った。こうして、ここに来て暮らして定年になった。今、私は81,000トゥグリグの年金をもらっている。

DM300142(4) カザフ人のオスマンが馬群を強盗した話

その後、オスマンが蜂起してどうしたとか？家畜を奪った！夏营地から馬を追っていった！群れの羊を取ったりした。いや、生活させずにはおかない。私はこのグンゾーハ、マンナイ（地名）にいた。その後ろにホルシヤ³⁶⁾ のドゥグルの羊の群れがいた。ニマが放牧していた。その上のほうでブルガスタイ〔という人がヒツジを放牧し〕、ザハ・タリン・アマンで、その下のほうで、父子2人が羊を放牧し、それより下のほうで私が羊を放牧していた。突然、僧侶のチョーマが駱駝を引き連れて来た。どうしたのかと言うと、おまえを移動させてハラ・ウーラン・アマンに行かせると言う。おまえの移動を手伝いに来たと言う。冬だった。こうしてそこに着いた。その地にゲルを立て、翌日1日過ごした。その次の日、私は羊を放牧した。すると、後ろの岩に数頭の山羊がいた。野生だ。2頭の野生山羊を狩った。それをもって帰り、翌朝、解体して、また、放牧に行った。朝、ドゥグルの羊が山へ移動していた。また、ブルガスタイは移動して行った。ポンスグ老人は移動して行った。すると、私は1人で残ってしまったではないか！こわくなり、どうしたのだろうと思い、急いで帰ったが、妻に言わなかった。妻は2束のハラガナを捨てて来ておいてある。今、行かなければならないようだ。羊を追って行こう。ゲルを片付けよう。2人の住まいは小さなゲルだ。2頭の駱駝にすべて積んだ。ものを広げ、荷造りし、夜明けごろ、2人は羊を追って行った。ブルガンに行った。そののヌトックはみんな向こうへ移動して行った。どうしよう。何があっても、来る者が来て燃やすなら燃やせ。2人は生き抜く。ゲルに荷物を置きっぱなしにした。駱駝をもっていないからだ。2人は、荷を用意したまま〔運ぶことができずに〕捨て置き、行った。ずっと行き、ビジューハイの入り口に着いてみると、母が3頭の駱駝を引き連れて来ていた。どうしたのかと訊くと、おまえたちをこのグンゾーハに移動させると言う。こちらへ移動させ、このグンゾーハに来て宿営させると、兄が言ったそうだ。わが兄はそこにいたのだ！

寒いよ。日が暮れた。寒くて雪がすごい。母は「私がこの羊たちを追って畜糞を積んであるところにいよう。おまえたち2人はゲルを運んで来い」と私たちを戻して行かせた。ずっと走って行った。寒いよ。着いたとたん、1束のハラガナに火をつけ茶をわかして飲んだ。こうして、駱駝を用意し、荷物を積み、太陽が沈むころに出発した。走り続けてやっと着くと、〔母は〕火を焚いて迎えた。羊の群れは来ていた。すぐにゲルを立て

てた。そして、それがストックの羊になるのだ。

翌日、バトが来た。〔バトは〕「おまえが来たね」と、〔私は〕「ええ、来ました」と答えた。〔バトは〕「今、川のそばに行くと寒い。移動してきた羊の群れはほとんど、この南のハラあたりに止まっている。この畜糞のところに数日泊まってみなさい。今夜、おまえの兄さんが来て泊まる。兄さんはグループに行って、一昨日帰って来た」と言った。こうして、そこに泊まった。わが母は自分の駱駝を引き連れて川のそばに行ってしまった。

翌日、羊たちを放牧し、日が沈むころ羊たちを〔囲いに〕入れて茶を飲んでいると、うちにいた黒い犬が吠えて走った。犬は走って行ってしまった。いや、あれは狼が来ているのか、何だろうか。月が明るかった。「ヘルビス山に登って見て来い、おまえ。これが何か」と言ったのだった。「ヘルビス山に登てみると、20人あまりの馬に乗った、ほぼ30人がこの北側を通り、グループに向かって走っている」という話が返ってきた。「それは何のことか」と言うと、「バヤンゴールの情報をここに伝えに来たのだろう。」と言う。「伝令なら2、3人しか来ないだろう。大勢が来るもんか。カザフ人が来ているのではないか、それは」と言うと、「そんなことがあるわけない。伝令にちがいない。兵隊が来ているのかもしれない！誰が知ってるか（わからない）」と言うばかりだ。

さあ、それだった。それ〔犬が吠えた理由〕がそれ〔カザフ人の襲来〕だったので、慌てたのなんの、私たちは。「軍服を着ろ、きちんとしろ。私たち2人が帰るのはとりやめよう。この高地を登ろう」と。羊たちを寝場所に放っておかないのか！（放っておいた。）バトが来ると言ったが、来なかった。今来る、今来ると待ち望んでも来なかった。バト、ズンバン、ケルネイ、ドルジの4人がバトの家に来て、その夜、ダーロー³⁷⁾で遊んだ。〔バトが〕寝ようとしていると、あの3人〔ズンバン、ケルネイ、ドルジ〕が来て、「今夜、ダーローで遊んで寂しさを払って過ごそう。グループに参加して死んでしまったら、どんな幸せがあるか！（幸せはない）」と言った。ゴンブ老人がいた。だから、〔彼は〕バトの2頭の馬に草を与え囲いに入れてダーローで遊んだ。1頭の栗毛の馬がいた。合わせて2頭の馬がいた。これらの馬に草を与えて〔囲いを〕閉じたが、囲いの上を飛び越え逃げってしまった。「葦毛の馬が飛び出した。酷い目に遭いたいか」と騒ぐと、「放っておけ」と。だから、ゴンブ老人は放っておいた。そして、ダーローに夢になってしまった。私の1頭の種馬がいた。バトが乗って行き、その種馬は痩せていた。1頭の栗毛の種馬だ。私の唯一の種馬だった。乗用になるかね。バトの馬群の管理を任されたので、この種馬を慣らしていると、バトが「この種馬を〔自分のものとして〕取れ」と言ってくれたので、兄が川のそばで放っていたのだった。そちらに泊まり、そちらで遊ぶ。わが妻はゲルで、わが兄嫁はゲルで、わが母はゲルで。ニカ³⁸⁾はその種馬を引き連れて行ったきり帰って来ない。

そして横になって寝ようとする、母は嫁を「ねえ、シリグ」と呼ぶのだ。「この悪い

時期に、2人の息子がここで折り返して、鐙をぶつからせて（肩を並べて）、ふつうでない時に出かけている。今これは何か起きているのではないか」と言う。「いや、何もありませんよ。下のほうでうろうろしてそのうち帰って来るのではありませんか」と言うことだった。すると、母は「私がバトの家に行って来よう」と言った。〔兄嫁は〕「私は1人でどうする。2人で行きましょう。2人捕まって殺されたらどうしますか。バトの家に行ってどうしようっていうんですか」と言う。そのとき、私の栗毛の種馬が戻って来た。例の草を与えた種馬だ。走って戻って来たので母は草の囲いに入れた。兄はまたダーローで遊んでそこに泊まった。そうしていると、何があったのかはわからなかった。あの人たちはダーローで遊んで、早朝少し眠った。彼らは家畜を見に行くため夜明けにならないうちに起きて出た。雪が降った。彼らは来て見て、馬の足跡を見たところ、馬群は下のほうに追われて行ったのだった。ホロスン・ウジュル（地名、葦の先という意味）の馬をすべて追って行ってしまったのではないか。バトの6頭の馬をハラ（地名）まで追い出して盗んで行った。すべての馬を集めて追って行ったのだ。

私たち2人〔ノースタイと妻〕は交代で出たり入ったりして、うっかり居眠りした。わが家のこちら側に1つの尖った岩がある。〔妻に〕「ねえ、あなた、何かが来たら、この岩の根元のところに入って横になって。私はこの上にいる。何かあったら、私は〔敵を〕殺して死ぬ」と〔言った〕。私は銃を持っている。そうして私は座っている。妻が突然走って入って来た。「この後ろに鈴の音、シュロの音³⁹⁾が聞こえる、黒いものが移動している」と言う。「カザフ人ではないか」と言いながら、彼女を連れて尖った岩に行き、上に登った、私は。上に登って見ると、夜明けが近づいていた。〔黒い影は〕あそこを通り、後ろから向こうへ行き、鈴の音もなくなった。すべてマンナイのほうへ出て行った。そこに入って来てないね。マンナイに入った。このカザフ人は大勢来た。大軍はこのグループに向かって来た。だから、私は「小銃弾で撃つ」と言った。そのとき、彼らの軍隊はこのガグツン・ウジュル（地名、たった1つの先という意味）にいた。こちら側で兵隊が防御している。私は小銃弾で撃つ。銃を上に向けて撃つと、その弾の光は信号になる。妻は私に殺しをさせたくない。妻は「あの人が殺しが来ると、あなたを殺してしまう。遠ざかりなさい」と、銃を奪うのだ。私は撃ちたくてたまらない。こうして追い立てて出た。ちょうど夜が明けたところ、下のほうから3人の馬に乗った男たちが上のほうへ走っている。バトの葦毛の馬に乗った人が随分先行してわが家に着き、ずっとそこで待っていた。もし私が銃を撃ったら、〔逆に〕殺されるだろう。どうしよう。恐かった。ずっと走って向こうに行き、上に登った。羊は放置した。そうして、暗くなってから戻ってきてみると、バトが「おまえはノースタイか」と叫んだ。私は「おお、ここにいる」と叫んだ。バトは「生きていて良かった。あそこで馬を奪って行ってしまった、カザフ人は」と言った。〔私は〕「ああ、マンナイを通り、このウラン・トロガイから先ほど過ぎた。大勢が走って去った」と言った。あの人たちはずっと行き、シナガ・

ツァハトのこちら側の口にある、尖った赤い山に3人を残したそうだ。日が射すまで馬を追ってきたと言う。馬を集めてそこ〔シナガ・ツァハトのこちら側の口〕に入れた。そこを出ると、広い平野でカザフ人が銃で撃って殺している。堰き止められてまったく入れず、たくさんの人がそうになって、馬群は追われてバインモドンに行き、広い平野に出てハラ・トロガイに着く途中、3人のカザフ人が走ってハラ・トロガイに登った。その3人はハラ・トロガイに登り、馬群を通らせて追って去った。また、バインモドの後ろに行き、そこに座り込んだ。こうして馬群を奪って行った。私が軍隊で3歳牛と交換して入手した栗毛の馬もその中に一緒に奪われて行った。兄の種馬は〔草の囲いに入れておいたので〕残った。兄は帰ってくると種馬に乗ってグループに行った。見つかるわけがない。追われて行ってしまった。あの栗毛の馬は何と不幸なのだろう。飛び越えたこと。ついてなかった。損失は意外に出るものだ。こうしてあの栗毛の馬を失った。「カザフの栗毛」というばかな馬がいた。白まじり模様の馬がいた。たくさんの馬だった。7、8頭の馬を持っていた。グループのメンバーだ。グループに行くたびに持って来たものだ。あの栗毛の馬はいつも狩りに行くとき乗っていたものだ。こうしてカザフ人がすべて追って行ってしまった。このハラ・トロガイから下のほうの馬を集めて奪って行ったのだ。

〔あのカザフ人たちは〕私に近づかなかった。羊を追う暇がない。オスマンが山に入るつもりで馬を集めたので、良いものを手に入れるためカザフ人たちが夢中になっていたね。その後、訴えてオスマンに知らせ、ようやく3、4歳の馬や雌馬を返してくれた。オスマンが彼らを派して良い馬を集めて来いと奪わせたにちがいない。オスマンが集めた馬は何百頭もいるのだよ。

DM300085(5) ブルガン川地域の建設

ここにいてから私は嫁をもらってストックたちの家畜を預かって山に出た。また戻ってきて2年経つうち、バヤンソダルで耕作した。穀物で1頭の雌馬を手に入れた。冬に屠って食べるヤクを買った。ブルガン川では、すべての人が耕作していた。そうして、みんな暮らしてきた。そうしていると、ソ連からの食糧が届いたと〔騒ぎになり〕、ソ連の小麦粉がソムの中心地に積み上げてあった。すると、みんな耕作をやめて町に入り、以来、農地を耕していない。穀物を栽培しない。もらいもの小麦粉を食べている。役所に小麦粉が運び入れられ、積みあげられている。それどころか、小麦粉〔の袋〕で〔洪水で溢れ出た〕川の堤をつくった。ブルガン川に堤をつくって水をこちらへ引いた。ソ連からたくさんの小麦粉を輸入して来たが、「悪質のものだ」と嘘をついて堤防用に使った。だから、幸運をつかめないね。わが地元ではしばしば起きたことだ。

このバイタグでガサランという者が来て戦争を起こした。ガサランという人だ。ホイホイだ。わがモンゴルを襲った。わがモンゴルはガサランを徹底的に敗って追い出した。

ガサラン〔をリーダーとする集団〕は死んだり逃げたりして去った。ホイホイはしょっちゅう戦争を起こす。わがモンゴルを攻撃して支配下にできなかったが、実現できなかった。かえって撃破されて逃げた。彼らがパイタグで造った砦を崩してブルガンに運んで来て建物を造った。

そして数年経つと、また、そこにステーションなるものをつくった。ヌナという人がリーダーだった。シャダブルという人は管理係だった。ブルガンの民を集めて自らの手で国境の関所をつくった。そのうちにモリン・マシン⁴⁰⁾が導入された。わが地元（アラグ・トロゴイ）に12個、ソムの中心地に7、8個のモリン・マシンが届いた。ヌナというリーダーは人びとを集めてブルガン川の草を刈った。今、この下のほうに石でつくった囲いがある。この上のほうにも石でつくった囲いがある。また、あそこの中に囲いをつくってある。これらの囲いは草を入れる場所だ。冬、草を束ねてそこにしまっておく。数年間そうした。私はネグデルの羊を引き受けていなかった。あちこちで雇ってもらっていて、冬、草刈の仕事に行った。5人が手で〔草を〕詰める。馬に挽かせて回す。このゲルの基盤ぐらい空間がある。その車に2頭の馬を入れ、4頭の馬を交替で走らせる。両側に2人が座っている。1人は（草を）詰める。1人は草を束ねる。1人は草を下へ降ろす。こうして3年間暮らした。こうして2、3頭の馬を持った。やっと馬を持つようになった。その後、ネグデルに加入した。

人びとが躊躇してネグデルになかなか加入しなかったかどうかはわからないが、（私は）ネグデルに加入して驚くほど給料をもらった。ネグデルに加入した年、740頭の雄羊を引き受けて放牧した。春になると、それらをフフ・ウジュルというところに届けて肉用として提出した。その群れの中に250頭の羊を入れて出産させた。こうしてネグデルの家畜を引き受けて、私は700頭の家畜を得た。出産する400頭の羊と一緒にもらった。こうしてハサギン・ヤスンというところでネグデルの家畜を18年間放牧した。1頭の羊も失わなかった。ある人は苦勞していた。狼や野犬などに捕らえられたらしい。

DM300115 脚の治療・農作の収穫・交換

脚の傷

私の脚は最初痛みがあり、突然、傷ができて注射をして、〔ブルガン〕川で（ソムの中心地で）1ヶ月ほど暮らした。この膝はこのように腫れ、脚は踏みこめない。〔膿疱が〕これぐらいになって開いた。膿と血が出てここにこんなできものが残った。そこにいて注射をしてもらい、ここが治った。夏営地に出た。夏営地にはやりかけの畑が2つあった。それを人に頼んでおいて、〔治療のために〕馬に乗って走らせた。そうこうするうちに、この下のほうが冷たく感じられる。見ると、〔畑に〕芽が出た。

ここに3人のホシユドの僧侶がいた。そこに行き、病気を診てもらった。イェンデルトの温泉に入れと言われた。だから、イェンデルトの温泉に入った。ヤクがいた。そう

していると、ヌトックが下って移動した。私と妻の2人は1頭の馬をもつ。1頭の牛と1頭の子牛をもつ。1頭の雌山羊と1頭の子山羊、もう1頭の不妊の山羊をもつ。2頭の山羊と1頭の子山羊が残った。温泉に着き、その山羊を屠って干し肉をつくった。当時の家畜と言えば、これほど〔2本指を合わせたぐらい〕(の脂肉がついて)すごい。

温泉を飲んで、温泉に入って、ずっといた。そうしていると、ソランバという人が移動して来た。彼も温泉に入った。ソランバの兄が来た。たくさんのヤクを追って来た。彼は温泉に入った。この前、ベーリン(集団名)の何人かが温泉に入った。当時、建物がない。みんなゲルをもつ。こうしてしばらく温泉に入り徐々に移動して行った。ヌトックが下へ移動すると、私が残ってしまった。私はどうすればいいだろうか。私はそこから下へ移動しよう。バインソダルで少々穀類を栽培してもらった。そこに行こう。今、移動しよう。2人が交代で馬に乗り、駱駝に乗り、牛を追って行こう。

ずっと行った。私たちの正面からホシユド人の大荷駄隊が進んできた。私たちの前のものは5頭の駱駝に荷を載せた。白い駱駝に荷を載せた裕福な人だ。ものすごく裕福だ。なんてこった、驚くほどだ。5頭の駱駝に荷を載せた。ホシユドの2人の婦人と1人の男が一緒だった。この川を渡る場所がいくつかある。川の下へ移動していくと、しばらく行って1回渡り、進んでいてまた渡る。そうしていくと、このような山がある。そこに渡る場所がある。愚か者だね、川に入っている。川に入って途中までいくと先頭の荷を載せた白い駱駝が川に倒れた。婦人が降りて叫んでいた。男は裸で川に入り荷物を解き、駱駝を放した。私はそばで見ているだけというわけにはいかない。上のほうになら渡りやすい場所がある。ここはすぐ道にはならないようだ。上のほうに行ってみるからと言って、馬を走らせていくと上のほうは石がなく大丈夫だった。ほらここはいけそうだと思って戻り、駱駝を引き連れて行き、川を渡った。後ろから牛を追いたてた。子牛を連れた牛が渡って来た。もう一度向こうに渡り、妻を後ろに乗せて渡った。渡って行くと、「ほら、あの人はそこから渡って行った」と。「どうしてこの渡る場所を見なかったかい」と〔私は言った〕。〔彼らは〕どうしたかという、そこを渡ったとき1つの大きな石があった。それで荷物を載せた駱駝が躓いて倒れたじゃないか。彼らは遅れた。〔私たちは〕荷物を載せて進んだ。

下ってしばらく行くと、「死にそうだ、体が痛くて」と彼女〔妻〕は叫んだ。「どうしたのだ」と訊くと、「体が痛くて死にそうだ。どうしようか」と言う。「もう、こんな不幸な人もいるからね」と。さらに進み、1つの湾曲部を曲がり、もう1つの湾曲部を曲がり、また1つの広い湾曲部があった。そこに着き、荷物を解いた。さて、どうしたか(という)。荷駄を解いて置き、牛乳を取り出した。牛乳でヘメル⁴¹⁾を作り、干し肉でスープを作って〔妻に〕与えた。彼女はすでに布団に入り深刻だ。この様子はどうすればいいだろう。今、下のほう(川下)に来ている。〔家族に〕知らせるなら、ヌトックが下のほうへ移動している〔から頼んでもいい〕。彼女は横になって苦しくてたまらない。

「どうしたのか」というと、「温泉に入っていた」と言う。「誰に許されて温泉に入ったのか」〔と問うた〕。あそこで治療しているとき、私が駱駝を探しに行ったあと、温泉に入って身体を洗った。そのせいで、身体が痛いのだ。〔私は〕不幸な者だと思う。〔彼女は〕ずっと寝ていた。ヘメレグを作って与えた。羊の干し肉でスープを作り2碗飲ませた。〔妻は〕スープを飲んで横になった。夕方になった。駱駝と山羊を縛った。ストックの牛について行ってしまおうかと思って、子牛と母牛を縛った。私の脚はそのまま治った。夜、寝ていて起きてみると妻がいない。見ると、〔妻は〕そこに歩いていた牛を見張っていた。「どうしたか」と問うと、(妻は)「治った」と言う。「移動しようか」〔と訊くと、妻は〕「移動しよう、移動しよう」と言う。さあ、移動しよう。2人で移動し、バインゴルン・アマンに着いた。ウリヤスン・アマンに入ってきた。

すると、ウリヤス(ポプラの一種)があった。そこに着き、正午になっていると、上のほう〔川上〕からたくさんの馬を追い立てた人が来た。私は遠くから見ている。目が利く。バラダンが来ている。1頭の馬を借りて乗って行こうか。1頭の馬しかもっていないからだ。「おまえは牛を搾って茶をわかせ。バラダンとゾンデイのどちらかが来ている」と。〔私が〕迎えに出た。おお、100頭あまりの馬がいる。追い立てて来ている。来て見ると、ゾンデイだった。挨拶した。〔私は〕「どうした?」と訊くと、〔ゾンデイは〕「子馬が暴れるかと思ひ、昨日夕方、出発した。バインゴルに1泊して来た。子馬が暴れるので、馬たちの様子に応じてゆっくり進んで来た。ともかく」と言う。「あそこのウリヤスの下に私たちはいる。あそこに行こう。暑いね。ウリヤスの〔林の〕中に馬たちを入れて見張る」と言う。〔ゾンデイは〕「助かった」と。川を渡り、馬たちを集めておくと、馬たちはそこに落ち着いていた。ゾンデイは来て馬をつないだ。私は〔ゾンデイの〕機嫌をとるため、彼の馬の鞍をはずし、木にむすんだ。濃い茶をわかしている。食べものはない。これぐらいの〔2本指ほどの厚い脂肪のついた〕干し肉を茶に入れてあげた。太っている。こうして、老人〔ゾンデイ〕は食べて飲んでいる。〔ゾンデイは〕茶を飲んで疲れがとれ「よし、眠りたいね」と言う。〔私は〕「いいですよ。眠ってください。私が馬群を見ていきましょう。あなたは寝てください。そこで昼を過ごし、午後、移動します。下へ進んで泊まります」と言った。そうしていた。彼を寝かせて馬群を見張っていた。かなり涼しくなった。そうしていると、〔ゾンデイは〕目が覚めた。〔私は〕「どうしましたか」と。〔ゾンデイは〕「眠って疲れが取れた」と。〔ゾンデイは〕起きて茶を飲んだ後、〔私は〕「乗ってバインダルに行けるような馬を貸してもらえませんか。バインダルに着いてから、シャラ・モドンに届けて返します」と言う。〔はあ、西から来たやつらが乗れるものをすべて奪って行った。今、暴れ馬ばかりが残って〔乗れるものがない〕と。実際、私が見るかぎり、まだらの雌馬が歩いている。葦毛の雌馬が歩いている。あし毛の雌馬が歩いている。まあ、おとなしいものがたくさんいるのに。〕「いや、できません。おまえは暴れ馬を借りたってどうにもならない」と彼はこう言っ

た。はてさて、馬に鞍をつけてあげようと思ったが、やめた。

〔私は妻に〕「急げ！駱駝を連れて来い。荷をつけろ。先に進んで泊まろう」と。彼〔ゾンデイ〕は馬に鞍をつけて乗って行った。〔私は〕「あなたはつねに100頭の馬を追って行って下さい。私はつねに乞食になって、ものを乞い求めて行こう。わかってますよね、あなた。あなたは私の叔父になるんですよ。叔父でなければ放っておく。私はかまない。私の脚には膿疱ができたが、この温泉に入って治った。だから、私も死ななければあなたと同じくらいにはなれるだろう」と。そうすると、〔彼は〕「おとなしい馬がないんだ」と〔言い訳を〕言う。〔私は〕「あの中におとなしい馬はたくさんいるよ」と〔言い返して〕言った。そして〔ゾンデイは〕馬たちを追って行った。すぐ追って行った。その後から荷物を載せて〔私たち〕2人が行った。「おまえは病人だから馬に乗って1頭の牛を追って行け。私は荷の上に座り、駱駝に乗って行こう。2頭の大きな雄駱駝がいる。ほかに方法はない」と言った。こうして2人が下っていくと、前方から葦毛の馬に乗った人が、一方に輪がありそれに棒が付いているものを持って進んで来た。ヘシグタイという人がいたではないか！〔あの人は〕ヘシグタイだ。〔ヘシグタイ〕「おう、わが子よ、元気か」。〔私〕「元気です」。〔ヘシグタイ〕「脚はどうか」。〔私〕「脚は治りました。幸運なことでした」。〔ヘシグタイ〕「今、どこに向かっているのか」。〔私〕「春、このパインゴルで注射してもらったとき、ゴンジャ老人に馬をあげて彼に3つの鍋⁴²⁾の穀物を栽培してもらうことになりました。彼が灌漑してくれるので、私はそこで穀物をもらいパインソダルにゲルを立てるつもりで移動しています」。〔ヘシグタイ〕「あ、そうか。歩いてどうやって行くのかね。鞍はあるかい」。〔私〕「妻の鞍が荷物の中にあります」。〔ヘシグタイ〕「行こう。私について行って1頭の馬をもらって乗って行け。何日経ってもかまわない。ゲルを立ててから、馬が泥棒に盗まれないように気をつけろ。今、泥棒が大勢いるから」と言って行った。〔私〕「はい、知っています」と。私は、彼の宿営地に行って馬に乗ったままでいた。〔ヘシグタイの妻〕「ヘシグタイ、あなたはどこに行くのか」と。〔ヘシグタイ〕「どこに行こうと、おまえには関係ない」と言った。彼は行き、足かせをした、葦毛の馬を引き連れて来た。〔ヘシグタイ〕「この男にあげる。歩いているから」と。〔ヘシグタイの妻〕「まあ、この雌馬で何をするのか、あなたは。乗って逃げたしまったらどうしますか」。〔ヘシグタイ〕「〔心の〕汚い人だな。口を裂いてしまおうか。何を言うか」私に「これ〔葦毛の雌馬〕を綱でしばって行きなさい」と言った。私は雌馬をもらって、その手綱をはずしてゆるめた。当時、逃げ出す人は多かった。私のことをもそのように逃げるかと思われたのだ。

〔もらった馬に〕妻の鞍をつけて、2人で馬に乗って、ハラ・ウジュール（地名、黒い先という意味）というたくさんの木のあるところで泊まった。パインソダルにゲルを立てたが、食べものは干し肉しかないよ。穀物や小麦粉といったものはない。あの少しの干し肉を食べて生活していくのだ。山羊、羊の干し肉で。脚は注射しているうちに治った。

そこ〔バインスタル〕に宿営すると、畑だらけだった。溝に沿って宿営するとね。だから牛の足をつなぎ、子牛の足をつなぎ、馬たちをつなぎ、駱駝をつないだ（農作物を食べないようにした）。1頭の牛には子牛がいる。もう1頭の3歳牛がいる。それが財産だ。そうしていると、妻は「後ろのあそこで、去年作付けされた穀類がこれ〔1抱え〕ぐらいの束になって自生してたくさん見えている。黄色ぼっく見えている。私は行こう」と。私は「おまえはどうするのか」と。〔妻は〕「行ってみる。実っていたら抜いて来る」と。ただちに出かけた。まもなくこれ〔1束〕ぐらい抱えて走って来た。それを脱穀すると、それほど乾いていない。すぐに火を起こした。私はそれを持って来て3、4粒を火であぶった。あぶると良く乾いた。かまどに乗せてあぶる。炒って食べるのだ。私は焼いて食べてみた。おいしい。やわらかい。「バンタン⁴³⁾を作って飲もう。コツ⁴⁴⁾を作って飲もう」と言った。「小麦粉がない。何を入れようか」と。「私は片付けてこれ〔穀物の粒〕を平らな石の上に乗せて粉碎し、粉にし、コツを作って飲みましょう」と。

そうこうするうち、ゴンジャが馬に乗って1本の木を前に載せて来た。挨拶を交わした。〔ゴンジャ〕「ゲルを立てたか、おまえは。おまえの穀物はよく育った。フイス⁴⁵⁾を据える方法をおまえはわからないだろう。おまえに、ある場所を教えてフイスを据えてやろう。そこにある自身の穀物を刈り取れ。おまえの穀物は熟した。3回灌漑してあげた」と。〔私は〕「ああ仏さま。助かった。この木で何をするか」と言うと、〔ゴンジャは〕「フイスを据えてそれを中心に回って、脱穀する。そして馬に踏ませる。私が教えるから」と言った。私が自生した穀物を取ったのを見て〔ゴンジャは〕「それをどうするか」と聞いたので、〔私は〕「コツを作って飲もうとしている」と。〔ゴンジャは〕「どうやって作るのか」と。〔私は〕「この平らな石の上で粉に挽いていく。できるか。仕方ない」と。〔ゴンジャは〕「ええい、かわいそうに、午後、私が少し小麦粉を持って来てやろう」と言って去った。こうして畑の後ろ側に連れて行き、その場所を見た。「この地が硬くて良さそうだ」と言い、掘ってみて線を引いて「こうして回して脱穀して、こうして磨きをかけるように回せ。こうすると、早く脱穀できる」と教えてもらった。

あちらの畑の穀物はこんなに良く育っている。南側の窪地にかなり育った。翌日、2人は長い服を脱いで広げ〔穀物を〕刈ったじゃないか！。あの年寄り〔ゴンジャ〕はとても良い人だった。このような鎌をくれた。「太い茎のを取ってどうする。ごみが多い。だから、このような茎のを刈り取れ」と教えた。妻はナイフで切った。私は鎌で刈った。こうして、2日、3日、4日かかってやっと終わった。かなりの量の穀類になった。それ〔脱穀機〕を回して脱穀し、70kg容りの袋で1袋の穀類ができた。当時、70kgの専用袋はなかった。パタイは葦毛の雌馬を貸してくれた。あの老人〔ゴンジャ〕は自分の雌馬をくれた。私は馬を入れた。「馬を真ん中に入れ、回して追ってやるのだ。おまえは鞭をもち、穀物の穂を入れろ。こうして踏んでできあがる」と彼〔ゴンジャ老人〕は教えて去った。1つの角にこれぐらいの空間がある。3頭の馬を入れる余地がある。〔尻帯

を]馬の腿の付け根から入れて尻を縛った。そのそばに牛を入れる。4頭の家畜を入れて穀物の穂を踏ませたね。ずっと踏ませた。そうしているうちに、強い風が立ち上がった。風が立つと、出たものを吹き飛ばし、ごみがなくなった。穀物がそこに赤くなって残った。穀物を引っくり返し、また、鍬で引っくり返して、牛をはずした。3頭の馬で踏ませて、どんどん穂を入れていく。綺麗な赤い穀物になった。翌日、脱穀した。へべセグ⁴⁶⁾をもらう人が大勢いた。なんてこった。へべセグをあげないと離れないようだ。4, 5本の「ボハ⁴⁷⁾」に大勢寝ている。だから、みんなに犁の角で少しずつ穀物を与えた。泥棒が多い。あの穀物を下にして、上に寝るのだね。夜、馬を持ってきてこのあたり〔ゲルの外〕に、杭を打ちつないだ。そして足かせをした。私は銃を持っている。妻は3歳の子牛と母牛を見張る。穀物も注視する。なんてこった大変だ。その苦労は言い表せない。誰に言おうというのか!

〔私の〕その膝は、穀物を刈っているうちに、また痛んだ。痛くて大変だった。2日間眠れなかった。夜明けまで叫んで過ごした。「こんなふうにいるより死んだほうがましだ」と私が言った。そう言うと、妻は猟銃の弾をすべて隠した。〔私は〕自分を撃とうと思った。2日間叫んで3日間の夜明けまで大声をあげ「私はもう死ぬ。こんなふうにいる意味がない」と泣いている。このような病気に痛めつけられるのだね。こうして、これ〔膝の肌〕が裂けた。血と膿が出た。ここ〔膝〕にこんな出っばりができた。こうして生きて何の意味があるか。そして、それを放っておいた〔傷はそのままだ〕。茶を入れてくれた。茶を飲んだ。あの穀物で粉を作った。牛の乳を持っている。当時の牛はたくさん乳が出るね。搾ると3リットルの乳が出る。私がこうして座っていると、傷にはポルポルと膿が出て来た。見ていると、チクチクと刺されているように身体が痛くて死にそうだ。そうしていると、〔傷の中から〕虫が出ている。〔私は〕「おやおや、死体に虫がわくものだが、これだと生きたまま虫がわいている。太い針をくれ。なんとかしてこれを針で取る。」少し待っていると、〔虫が〕なくなった。もう少し待っていると、膿が出て来た。そうしているうちに、あれ(虫)が出て来ている。搾って出そうもない。ここ〔太ももから膝の方へ〕から出ているようだ。こうして針で刺した。指していると、針が入らなくなった。そして、引っ張るとこのような黒い頭の虫が出て来た。その虫が出てからこれ〔傷〕を搾ると、膿が出ていた。膿が出て何も出なくなった。こうして、痛みが止まった。そのまま眠った。ずっと寝ていた。2日、3日間経ってその病気は癒えた。この膝の出っばりに虫がいたのだ。これ(膝の皮)をナイフで切ってしまった。その傷が今もあるよ。そのまま治った。その虫に刺されていたんだね。

穀物で家畜を購入した話

わが兄、ジャラツァ、オジャカの3人が粟(bor tariy-a)を栽培した。何も出なかった(収穫がなかった)。私の黒いゲルをシャラ・モドン(黄色い木という地名)に届けてお

いた。1頭の雄駱駝を用意した。〔兄は〕「脚はどうか」。〔私は〕「治った」。〔兄は〕「おまえの雄駱駝に鞍を置いて引き連れて来た。駱駝を引き連れて商売して歩いている。おまえの家ではかなり穀物を取獲したそうだね。おまえの家計を助けようか。何がほしいか」。〔私は〕「何がほしいかな。1頭の雌馬を手に入れて来て。できるかな。それ以上あるなら殺して食べられるような牛1頭を手に入れて来て」と言った。1つのシュダイ⁴⁸⁾と3つのウート（袋）の穀物を持って行かせた。2シュダイ以上の穀物が残った。その後、南の方へ行き、ウマネズミの穴を掘った。ウマネズミは尻尾が長い。あいつはバインスタルの穀物を運んでしまうのだね。運んでいってこんなに〔ほぼ1mの穴が埋まるほど〕積む。これ〔1m〕ぐらい穴を掘り、一番良い穀物を運んで穴の中に詰める。私は足跡を追っていた。〔ウマネズミ〕が行った小さな道がある。あいつは持って行って穴に積んでいるのだね。1つの穴を掘ると、あ！穀物がぶつぶつ見える。掘り出して取る。お、ふう、かなりの量の穀物があった。また、こちらへ見ると、もう1つの穴がある。それを掘って手に入れた。2つの杓子⁴⁹⁾分ぐらいの穀物が出ている。それを掘り出して手に入れた。さらに行くと、また、穴があった。私と同じように運んだのだね。それを取ると、かわいそうなので、手をつけなかった。そのほかに穴があるかどうかは分からない。放っておいた。1つの穴を放っておき、2つの穴の穀物を取って行った。そして、下って走り下のほうを探してみると、また、このような細い道があった。そこを進むと、1つの穴があった。そこで2つの穴の穀物を取った。1袋の穀物を手に入れた。それを持って帰り、整理した。翌日、また、プリンハイラハン山の麓に行った。そこにたくさんの畑があった。そのあたりで2つの穴を掘って1袋の穀物を手に入れた。持って来て妻に整理してもらった。米のような穀物だ。2つのシュダイの穀物を得た。

そうこうするうちに、山の南麓が黒くなり、たくさんの世帯が移動して来たようだ。私は妻に「人びとが移動して来ている」と言った。（妻は）「最近では商人が来る。ハルハ人（モンゴル国の主要集団）たちが来て商売をする。彼らが来ているのだろう。それ以外にどんな世帯が来るものですか」。「私が出迎えて会って来よう」。「あなたが何をするといいか」。「心配いらない。脚は治った。アルタイ山には獲物がある。私たちは人の家畜を放牧して腹が空かない（生計が立つ）。身にまとえる」と。〔私は〕手元の穀物をなくそうとしていたじゃないか！〔ところが妻は〕その中から少しでも残したい。〔私は〕木の桶に穀物を入れて馬に乗って現在の空港へ行く開けた道を走らせて行った。反対側から最初に1人の老人が来た。鞍をつけた駱駝2頭を連れている。後ろに1頭の駱駝を引き連れていた。その後ろに1人の男が1頭の駱駝を引き連れている。2頭の鞍をつけた駱駝を持つ老人に「お元気ですか」と挨拶すると、彼は「はい」と言って、ここを歩いて行った。「どんな良いものがあるか」と言うと、〔後ろの男は〕「たいしたものはありません」と言って、ここを歩いて行った。その後ろに黄色い老人が来ている。〔今の2人は機嫌が悪かったので〕この人はどうだろうかと思って「こんにちは」と言った。

〔黄色い老人は〕「はい。息子よ、元気ですか。どこの人か」と言った。〔私は〕「あその下のほうに見える黒いゲルが私の家です」と〔言った〕。〔黄色い老人は〕「いつもここに商売に来ている。バインスタルの南側にテントを張る。私たちには小麦粉、駱駝、馬、羊、山羊、磚茶、布がある。このようなものを売って回っています」と言う。私はついて行く！バインスタルの南側にかつての宿营地があるのだ。1つずつテントを持つ。荷を降ろしてテントを張った。

〔黄色い老人は〕「ええ、疲れた。わが息子よ。とても疲れた。今、お茶が飲みたい。〔疲れは〕遠くへ」と言った。手伝ってテントを張った。水を汲む場所から遠いところにテントを張っていた。〔私は〕「桶をください。水を汲んできましょう。お父さん」と。〔黄色い老人は〕「そうしてくれ。わが息子よ」と言った。〔私は〕木の桶をもっていき、水を汲んで来る途中、薪を拾って片脇に抱えて来た。「水を汲んで薪も持って来てくれたか。助かった。茶を飲んで一服しよう」と〔黄色い老人は〕言った。湯がわいた。これ〔3本指でつかんだ〕ぐらい茶葉を入れた。小さな鍋だ。濁った黄色いものになった。何か1袋のものをもって来た。それは煎った小麦粉だった。このような注射液のガラス容器にバターが詰めてあった。それを持って来て、置いた。私は見て座っている。黒い碗を1つ出した。〔黄色い老人は〕「茶を飲んでくれ」と言った。〔私は〕「お父さん、私は少し飲みましょう。私は家でもうお茶を飲んで来ました」と。すると突然、「さあさあ、商売はまだ始まっていないよ。2、3日経ってから始まるよ」と1人〔先に来た人〕が言った。すると、「おまえと私は別々だ。おまえに教えてもらわない。商売をしようか何をしようか、おまえに何の関係があるかい」と彼〔黄色い老人〕は怒った。あの人たちは黙ってしまった。そうしていると、向こうから2人の男が数頭の馬、数頭の羊と山羊を追って移動してきた。あの老人は茶を飲んでこれ（3本指をつかんだ）ぐらいの煎り麦粉とこれ（人差し指の第1関節の半分）ぐらいのバターを入れて揉んで、碗の片面に固めてつけた。そうして乳の入っていない茶を飲んでいたじゃないか！茶を飲んでいるうちに家畜を追ってきた男の1人が来た。〔黄色い老人は〕「茶を飲みなさい、わが息子よ」と。私は少し茶を飲んで「もういいです」と言って置いた。〔黄色い老人は〕あれ〔碗の片面に固めてつけた煎り麦粉〕をなめて、茶を飲んでいた。菓子などあるもんか！これで食事の代わりになるものかと私は思った。彼〔黄色い老人〕は茶を飲んで、汗をかき、あの煎り麦粉をなめている。そうこうしているうちに、羊たちが追われて来た。すばらしい羊だった。私は「お父さん、羊はいくらですか」と訊いた。〔黄色い老人は〕「1鍋の穀物になる」と言った。山羊は2つの杓子⁵⁰⁾の穀物だと言う。〔黄色い老人は〕「磚茶は買わないのか」と。私は「6頭の羊と1頭の太っている山羊がほしい」と言った。〔黄色い老人は〕「いいよ。私は羊を見せよう。おまえの穀物はどんなだ」と〔応じた〕。〔私は〕「私の穀物はこうして口で空気を入れて、土が出るようなら受け取らないでください。私はそのような〔不純物を入れて量をふやすような〕ことをしません」と。

〔黄色い老人は〕「ベəri⁵¹⁾の人は穀物を風撰してちりを私たちにくれて、きれいな部分を自分たちが取るのだ。私たちは毎年来ている。ベəriの人たちはこうなのだ」と彼は言った。〔私は〕「私の穀物には文句のつけようがありません」と。その鍋は木でできた7kg容りのものだ。外見すると小さな鍋だ。〔私は〕「では、6頭の羊と1頭の山羊をもらいます。穀物を見てください。穀物が気に入らなければ、6頭の羊と1頭の山羊を返します。あそこに見えているのが私のゲルです」と。〔黄色い老人は〕「よし、よし。行こう」と言って、1人の男に「羊を捕まえてやれ」と言いつけた。みごとな羊を捕まえてくれた。そして、1人の男は1頭の羊を捕まえて来た。こうして置いた。〔黄色い老人は〕「あの頭の白い淡黄色の羊を捕まえてやれ」と。そうして、6頭の羊と1頭の山羊の合計7頭を追って去った。この1頭の山羊を屠ろうと思う。肉が尽きた。あの干し肉が終わった。あの4人〔兄、オジャカ、ガンサナ、ジャラツァ〕が来て泊まったとき干し肉でコツを作ってあげた。だから、〔食べ〕尽きたじゃないか！これ〔2本指ほど〕ぐらいのものを、2本ずつ茶に入れてあげたね。ゾンデイにもあげた。

黄色い老人は羊をくれた。妻は茶をわかった。乳茶を作って飲んだ。「骨に染みるほど汗をかいた。骨に染みるほど疲れが取れた。それじゃ、そろそろ、おまえの穀物を見よう」と。ウマネズミ〔の穴〕から取ってきた穀物を見せた。私が〔袋の〕口を開けて見せると、自分の手で触ってみて「見る必要がありません。私はこれまでこんな穀物ももらったことがない。これは良いものだ」と彼は言った。もう1つのシュダイ〔袋〕を引っ張ってきて「それで足りなかったらこれも上げます」と私は言った。〔黄色い老人は〕「いいよ。いいよ。(要らない)。きれいな粒だね。おまえと私の取引はつりあう。鉄は熱いうちに打てというとおりに」と。その老人はわが妻に頼んで袋を縫ってもらった。その中に2つのシュダイの穀物を入れた。私にはさらに2つの杓子ぐらいの穀物が残った。あの老人は良い穀物だと言った。〔私は〕「お父さん、ほしいならもって行ってください」と言って袋に入れて上げた。そうすると、間もなく1つの磚茶と1幅の粗布を持って走って来た。磚茶と粗布をくれた。〔私は〕豊かになった。マイグ(1種のズボン)を作る布がなかった。当時は安かった。1.5トグリグ(モンゴル貨幣)だったっけ。粗布は2トグリグだったっけ。

私は嬉しかった。「お父さん、夕方、私は乳を持って来てあげましょう。私は馬で走って届けます。乳茶を飲んでください」と。「わが息子よ、ありがとう。今、私には1頭の駱駝と2頭の馬がいる。20数頭の羊と山羊がいる。それを買ってこのような穀物を手に入ればそれでいい」と言って彼は去った。夕方、妻に「乳を搾って老人に届けよ」と言いつけて行かせた。届けた。すると、感謝して、また、1幅の粗布をくれた。そして、〔老人は〕そばの男に「見よ、こんな〔良質の〕穀物が私たちの手に入るか」と言ったそうさ。

彼女が行った後、持って来た山羊を屠った。〔妻は〕「下に着いてから屠りましょう」

と。〔私は〕「遠くへ行行って吠えろ。刃ものに当たって死ぬな。おまえは小麦粉を挽いて食べるではないか。ケチるな。」と言った。〔妻は〕「この穀物は少ない。この冬はどうしようか」と。「家畜をケチっている。私の脚が治った以上、何の心配もない」と。こうして、山羊の皮を剥いでいると、太陽が沈もうとしていた。そのとき、ソランパンが乗馬して走って来た。そして挨拶を交わした。〔私は〕「何をしているか」と訊くと、〔ソランパンは〕「この南のほうに穀物を栽培したベリーの人がいる。私は彼らに会わなければならない。家畜をあげて穀物を手に入れなければならない」と彼は言った。そうして〔ソランパンは〕「この羊はどうしたのか」と。〔私は〕「私は今日、穀物と交換してこれらの羊を得た」と。〔ソランパンは〕「どうやって買ったのか」と。〔私は〕「1頭の羊を1鍋の穀物で得た。6頭の羊を6鍋の穀物で得た。1頭の山羊を2つのシャモジ分の穀物で得た」と。〔ソランパンは〕「これらを泥棒にとられてしまう。うちの羊群が下へ移動している。妻が放牧している。彼女のもとに届けて羊群に合流させろ。私がシャラ・モドンに行き、バトの家に届けてあげよう」と。〔私は〕「はい」と言って夢中で急いだ。彼はそうして行った。

あの屠った山羊（の脂肪）はこれ〔2本指〕ぐらいだった。皮を剥いで1本の前脚を包んで馬の鞍につけて走らせ、ソランパンの後から行った。彼の妻は羊たちを追って自宅へ帰っている。こうして着いた。

〔私は〕「この6頭の羊を買った。兄〔ソランパン〕はバトのところに届けてくれると言った」と〔言った〕。〔彼の妻は〕「明朝、移動する。ここにははいけない。ここは泥棒が多い」と〔言った〕。ゴンガのプルベは、わが上のほうに宿营地を置いた。プルベはどこかに行った。盗んで行ったにちがいない。その後、長持ち（タンス）を持って行かれた。夜、彼の妻が泣いて走って来た。「どうしたのか」と言う、「うちの長持ち（タンス）が運ばれてしまった」と。月の光の下で谷に沿って探して回った。谷の上のほうにたくさんの木があった。〔泥棒は〕そこに行って〔長持ちを〕壊し、中のものを取って行ってしまった。トールツグ⁵²⁾の上に銀がある。それを取って行った。

私は羊たちを預けた。印をつけてもらった。〔ソランパンは〕「明朝、来て荷を載せるのを手伝ってくれ」と〔頼んだ〕。ソランパンと2人がいた。〔私は〕「明朝、私は早く来て荷作りを手伝いましょう」と〔答えた〕。

帰って泊まり、肉を一塊一塊切って野生の葱を入れて料理を作って食べた。腹いっぱい食べて休んだ。この肉をどうしようか。外に出して冷やし、何かで覆っておいて荷に入れて持って行こうか。今は移動しようがない。駱駝がいない。駱駝を持って来ないと、私たちは1頭の馬と1頭の牛では、移動できない。あの駱駝が来るまで待っている。翌日朝、彼らがまだ起きないうちに私は着いた。彼の妻は起きたばかりで火を起こしていた。「いや！この子が来たね」と。脚を結わえた馬たちは遠くへ行ってしまった。〔ソランパンは〕それらを連れ戻して来た。〔ソランパンは〕「ゲルの帯を解け。解体せよ。私

はこの雄牛を放牧して来る」と。ソランパンと妻はゲルを解体した。私は手伝った。解体し終わった。

〔ソランパン〕「この子はよく早く来てくれたね。妻よ、あの6頭の羊はいるか」。〔妻〕「いる。いる。見た」と。〔ソランパン〕「それだけは失くしちゃいけない」。こう〔やり取り〕して荷物を積んで縛った。〔ソランパン〕「おまえはここにいて、3歳牛が盗まれないよう、牛と馬を泥棒に取られないように」と。〔私〕「荷を載せるものがありません。1頭の雄駱駝がいましたが、今どこにいるかわかりません。もう1頭は南へ連れて行きました。穀物を運んで行きました。乗れるものはありません。2人が歩いています。人に馬を借りると、2、3日、草を刈ってくれと言われます。ですから、乗りものを手に入れるよう〔わが兄に〕頼んで穀物を持って行かせました」。〔ソランパン〕「これからそんなことはやめなさい。川を渡って私たちをシャラ・モドンに降ろし、そこから1頭の馬と2頭の駱駝を持って来て移動しなさい。そのままではいけない」。こうして、1本の前脚〔の肉〕を持って行き、彼のゲルを解体して載せ、乗りものをもらって速く帰って来た。後のことを急ぎ、穀物が略奪されてしまうことを心配して帰って来た。朝暗いうちに起きて駱駝に荷を載せ、馬に乗って牛を追って去った。バトの宿営地で降りた。バトのところに着くと、あの婆さんは6頭の羊を追って届けていた。バトのところに子を連れた、2頭の山羊を置いてある。1頭の3歳羊がいる。子を連れた1頭の羊を不妊の羊と交換し、屠って食べた。そこに行ってバトの羊を放牧し始めた。バトは200頭あまりの羊を持っていた。でも大変だったね。そのとき、脚の傷は完全に治り、膿はなくなった。

こうして羊を放牧しながらどうやってゾンデイに対する恨みを晴らそうかと考えていた。ヤマントの上のほうに1つの山裾の台地がある。そこに馬どもがいた。だから、黒い剛毛のできた縄を持って行き、1頭の3歳の馬を捕まえ、首を搾り窒息させて殺した。1頭の雌馬を殺して恨みを晴らした。その後、バラダンと言った。「1頭のまだらの雌馬がその木の下で殺されたね。病気で死んだかという、〔病気に〕罹っていなかった。なぜ死んだかなと不思議に思われていた」と言う。

手作りの靴下でカザフ人から家畜を得た話

そしてバトの家畜を放牧していた。その後、民の家畜を放牧した。6年間、放牧した。3ヶ月ずつ放牧していた。ゴンダイは70頭の家畜を預けて、1杓子分の穀物をくれる。ジグダライ老人は80頭の山羊を追って来た。〔それを放牧して報酬として〕1頭の老いた山羊をくれた。パンタライは〔報酬として〕1杓子の穀物で10頭の山羊を預けた。バトの羊を放牧しているので1頭の羊をくれた。ムンヘナスン老人は10数頭の家畜を預けた。〔報酬として〕これ〔手のひらを開いてその半分、1枚の磚茶の8分の1〕ぐらいの磚茶を持って来てくれた。シリグは40数頭の家畜を預けた。〔報酬として〕3歳の山

羊をくれた。集めていると、バトの羊と合わせて1000頭を越えたじゃないか！岳父の10数頭の山羊と私の数頭の羊と駱駝を合わせて10数頭の家畜、わが兄の20数頭の家畜のほか、ゴダイ老人の6、7頭の山羊を預かった。なぜかわからないが、ゴダイ老人の家畜の中には1頭の黒い種牡山羊がいた。こうしてこれらを連れ、夏営地に向かい、野生動物を狩りながら進んだ。マンナイン・ウスンに出て宿営した。

そうこうするうち、そこから移動し、マンナイの源流部を乗り越えてオンホに入り、そこでテントを張っていると雪が降った。そうこうしているうちに、大勢のカザフ人が移動して来る。辺境のオスマン（一味）のカザフ人だった。オンホでカザフ人の中にどうして居れるだろうか（居るわけにはいかない！）彼ら避けて移動した。その下のほうに畜糞のたまった場所があった。そこに降りた。2頭の淡黄色の馬を持つ1人のカザフ人の男が1000頭の羊を放牧して来た。私は歩いて羊を放牧していた。彼は上手にいる。私は下手にいる。私は2重の靴下のあるツァリグという靴を履いた。その男はこれに興味をもった。「このような靴下があったら私にくれ。私の足は冬冷え込む。私は2人の裕福な人の羊を放牧している。私は1000頭あまりの羊を持っている」。「私」「あなたは何をくれるのか」。「カザフ人」「あなたは何がほしいのか」。「私」「私は羊がほしい。」こうして、私はこのような2枚の新しい靴下を持って来て与えた。「私」「あなたは羊をどういう方法でくれますか」。「カザフ人」「明日、私はこの辺で放牧します。あそこに深い溝があります。羊をしばって溝に置いておきます（人に見られないよう羊の4脚を縛ってポプラの中に寝かせて置く）。そうして、私は羊を向こう側へ放牧して行くとき、タオルであなたに知らせる。わかったか」。「私」「そうしてください」。2枚の靴下を中に入れて帯をした。そして羊を放牧して下のほうを歩いていた。そのうち、羊たちは窪地に入って見えなくなった。そうこうしていると、「カザフの男は」羊たちを向こうへ出し、後ろから馬に乗って行きながら、タオルで「ここに縛って置いた」という意味のような知らせをした。その通り、私は羊を放牧してその辺で探していくと2頭の大きな羊が縛ってあった。2頭の羊を放ち、羊たちを放牧し、日が沈んでいるころ帰って来た。すると、妻は遅生まれの、白まじりの頭の子羊を連れて来た。それをゲルの中に入れて結わえた。「私は」「移動しよう。今夜中に移動しよう」と「言って」、2頭の駱駝を寝かせて荷を載せ、馬に鞍をつけて、朝焼けの中を去った。雪が積もった。雪はこれ〔1尺〕ぐらいだった。そこから移動してグンゾーハに入った。そこにバトナスン老人がいた。ネレベ老人が彼の羊を放牧していた。そこに着き、上のほうに宿営した。その夜、夜明けまで狼を追いかけた。狼はたくさんいる。そこで宿泊して出発した。バトナスン老人は「ここから出なさい。出ると、向こう側のすぐ下のほうに開けた平野があります。開けた平野のこちら側に畜糞がたまった場所があります。その場所に営地を置きなさい」と「忠告した」。そうして畜糞のたまった場所を探していくと、あった。ハラ・ウーリン（黒山の）・ウトグというところだった。そこにテントを張って数日泊まっていると、バトはグ

ループに行ってから来た。

わが家のあたりに1つの丘があった。その夜、あそこに何か突き出て見えて、犬が吠えている。1匹の黒い犬が行ったり来たり往来する。夜見ると、人が来て座っているようだ。そのとき、〔私には〕マワヅル（マウザー）銃があった。この戸を入れてこようものなら、私は銃撃する。そうこうしているうちに、また、犬が吠え始めた。走り出てみると、人のようなものはいない。月光の下でその足跡を辿ってみると狼だった。〔妻は〕「何の因果か」と悔しがる。朝日が差したばかりのころ、バトが馬に乗ってやって来た。〔バト〕「おまえは移動して来たのか」。〔私〕「そうです。あそこのカザフ人の中には居られません」。〔バト〕「そうだが。おまえを手伝って移動しようとやって来た。おまえがマンナイン・ウスを乗り越えて行ったと聞いた。1頭の山猫がこのあたりに来て岩穴に入った。山猫を狩る」。こうして、バトは去った。バトは山猫を狩って行った。昨夜の動物は山猫だったようだ。

銃弾で家畜を得た話

私たちはそこに住んでいた。ある朝、銃を持った1人のカザフ人が馬に乗ってやって来た。まだ若い男だ。茶を飲んでから、「わが父と兄はあそこにいる。兄は狩をして歩く。私たちはオスマンのカザフ人だ。あなたにサンサル⁵³⁾の弾があったら売ってくれ」と〔言った〕。わが兄はグループに行ったとき、2袋の弾を持って帰って来た。1袋はドイツのもの、もう1袋はサンサルのものだ。〔私は〕「よし。あなたは何をくれるか」と〔答えた〕。〔カザフ人は〕「1頭の山羊と1頭の羊をあげよう」と〔応じた〕。こうして「羊1頭に30発の銃弾、山羊1頭に20発の銃弾をあげよう」と、失うなら失え、儲かるなら儲かれと思って、50発の弾を数えてあげた。そのうえ5発多めに与えた。「この5個の銃弾を余分に持って行け。よい羊とよい山羊の2頭をくれ」と。カザフ人の男は「私は帰って父に言う。わが兄は狩人だ」と〔立ち去った〕。

1日、2日、3日、4日過ぎた。ある朝、銃を背負って「羊を追って丘を越えて来い。私はあそこに行く」と。〔妻は〕「カザフ人に殺されるのではないかと」。〔私は〕「どうして殺されるのか。大丈夫だ。行ける」と思い、銃を背負ってずっと走った。走り続けた。日がよく射して来たときに着くと、2つのゲルがある。2匹の犬がいる。すると、1人の若い男が犬を押さえて私を招き入れた。1人の年寄りが上座にいる。肉を細く切って上にかけて干してある。彼の妻は肉を細かく切って炒めている。〔私〕「あなたの息子の1人は私から銃弾を得た。羊と山羊をくれる約束だ」。〔上座の年寄り〕「本当だ。本当だ。告げた。与えよ、与えよ。出ろ。2頭の立派な羊と山羊を捕まえて与えよ。羊を早く野に出しなさい。より早く野に出すからね」。そうこうしているうちに、ここの兄さん〔銃弾を入手した狩人〕が入ってきた。「あなたはわが弟に銃弾をくれた人か」と〔訊いた〕。私は、この人にやられるかもしれないとこわかった。そうして、羊と山羊をつな

いで出ると、彼も馬に乗って出た。私は家畜を追って谷に入り、また、山に入ってその前でこぼこしたところを通って放牧してゲン・スハイの南の谷に着くと、わが家畜が来ていた。こうして私はカザフ人から数頭の家畜を手に入れた。

DM300121(1) 穀物の値段

ムンヘバートル：昔、あなたは穀物で家畜を購入していたでしょう！どのような秤を使っていましたか？木の鍋というものがありましたか？

ノースタイ：木の鍋だ。7kgの容量だ。

ムンヘバートル：どのような鍋ですか？

ノースタイ：木の鍋だ。これ〔両手を丸くして抱えるほどの鍋〕ぐらいだ。

ムンヘバートル：これと比べると深さはどうですか？ちょうどこれぐらいの鍋でしょうか！

ノースタイ：これと比べると、少し大き目だ。これより少し深い〔ほぼひと指尺〕。1頭の羊は1鍋の穀物で、1頭の山羊は2杯の杓子の穀物で、交換する。

ムンヘバートル：杓子はどのようなものでしたか？

ノースタイ：カザフ人の杓子だ。

ムンヘバートル：カザフ人の杓子とはどのようなものでしたか？鉄のものですか？

ノースタイ：鉄製の杓子だ。カザフ人はこのような杓子を持っている。ちょうど1.5kgの容量だ。

ムンヘバートル：このような平らな板でならしてから売りますか？平らな板をもっていましたか？

ノースタイ：もちろん、削り取らないでどうする！あれには一定の量がある。平らな板で削り取る（すりきりいっぱいにする）。当時、穀物はなんて高かったのだろう！1頭の黒っぽい牝馬を鍋9つの穀物で買ったのだよ。1頭のヤクは3鍋半の穀物で購入する。1つの胃袋に入ったバターは1鍋の穀物で交換する。そのバターにはウルム（乳の脂肪膜）がたくさん入っている。その冬、私は羊を放牧し、ほとんど穀物とバターを食べた。そのウルムとてもおいしかった。

DM300087(2) カザフ人と牧草地を競争したことと吹雪に遭遇したこと

ネグデルの家畜を17年間放牧した。当時の結婚というのはたいしたことはない。2、3人が行って花嫁を迎え、ゲルに入れる。小さなゲルだ。

嫁をもらい、5年間、民の家畜を放牧したと言っただろう。ほかのさまざまな人の家畜を合わせると60頭の山羊と70頭の羊がいた。パトという人の羊は250頭いた。当時、給料はない。3ヶ月放牧すると、これ〔掌の半分〕ぐらいの磚茶をくれる。ある者は1杓子分の穀物をくれる。ある者は煎った麦粉を少しくれる。ええ！まあ貧しい人間という

のは家畜をそれなりに放牧し、アルタイ山地の獲物に頼って生活していたのだ。家畜を多く持っている人の中で、ある者は1頭の3歳山羊を、ある者は1頭の子山羊をくれる。3ヶ月放牧し、正月になると家畜を〔持ち主に〕返す。

ジグダライという老人は80頭の子山羊を預け、給料として1頭の老いた山羊をくれた。私にとってこの1頭の子山羊は大物だ。これらを放牧して山で狩りをし、若い夫婦が生活した。私は狩りする。毎日行くわけではない。ある日、獲物の多いところに行き、狩りをする。嫁が羊を放牧する。今度は私が羊を放牧する。人びとが預けた家畜は1頭も失わず、1頭も食べない。羊を放牧しているうちに、獲物に遭遇したら狩る。死なない。

またある年の冬、バトという人の羊を放牧した。3ヶ月放牧すると、1頭の羊と1頭の子山羊をくれる。彼の羊を長く放牧していた。彼は私の叔父にあたる人だ。私の継父の弟だ。だから、彼にこき使われていたのではないか。

そうこうしてネグデルに入り、楽になった。獲物には山羊、雄の鹿、雌の鹿がいる。私は2、3頭の雌の鹿を狩って食べた。雄の鹿を狩っていなかった。雄の鹿は貴いものなのだ。鹿に近づかない。狼をたくさん狩った。5、6頭を狩った。当時、1頭の狼の毛皮は25枚紙幣（トゥグリグ）の賞金を与えていた。民の羊を連れて山に行き、フンデギン・バガ・デベセグというところで、あるカザフ人の男と牧草地を奪い合った。

ある日、わが家のこちら側に場所があったのでカザフ人の男が家畜を入れて放牧した。「彼のゲルのそばで放牧する」と言って、夜が明けないうち、日が昇らないうちに羊を集めた。愚か者だね、嫁を後ろから追い立てさせ、自分が先頭で山羊を追い立てて、脇道を走り、フンデギン・バガ・デベセグに着いた。天気は曇っていた。そうしていると、あのカザフ人の男が来た。「なぜうちのゲルのそばに家畜を連れてきたのか」といって2人で大いに喧嘩をしていると、彼の嫁が走ってきた。「この人は病人だ。馬鹿だ。私が移動したところに、昨日家畜を入れた」と言った。〔カザフ人の男は〕「家畜が言う事を聞かず勝手に入った」と言う。〔私は〕「こんな大きな土地があるのに、なぜそこで放牧するか」と言うと、〔カザフ人の男は〕「あなたがなぜ〔家畜を放牧し草を〕食べさせたか。あなたはなぜ行ったか」と言った。

すると、彼の嫁は自分の夫の性格をよく知っているのだ。彼のゲルはそこに見えている。「では、今、話し合った。仲直りをしよう。土地を分け合おう」と言った。「最初にその広い谷から向こう側に入らず、私はこちら側に来ないと話し合ったが、この人は私のゲルのそばに家畜を放牧した。だからいやになり、フンデギン・バガにきた。今日ここに放牧する。今後、おまえが〔家畜を〕入れて放牧してみろ、私も〔家畜を牧草地に〕入れるからな」と〔私は〕言った。〔彼は〕「私はそこに入らないから、ここに入らないでくれ」と言った。

そうこうするうち日が暮れた。曇ってしまった。突然、嵐が起き、雪が降った。まったく帰りようがない。この丘を越えようとすると、羊が登ろうとしない。今夜、嵐と雪

の中で死ぬのではないか [と思った]。そこに、エメゲレジという枯れた木があった。エメゲレジという木は頂が密閉されていて根元が乾燥している。[エメゲレジの根元は] このゲル (5枚の壁をもつ) の基盤ぐらい。私はいつもマッチとナイフを持って歩いている。だから、そこに行き、根元の乾燥している [エメゲレジ] のを踏みつけ、マッチで火をつけた。羊の群れを監視している。日が暮れた。どうしようもない。羊の群はこの雪 [1尺の深さ] の上に [とどまっている]。そして雪が降り続く。吹雪が吹き続く。私は羊を監視している。この足にトーク⁵⁴⁾ (靴下) を履いている。[なのに、足は濡れて] ぐちゃぐちゃになっている。背中の中のシャツも濡れた。凍えそうになってきた。羊を見守りながら火を焚いた。大きなエメゲレジだった。燃えている。羊はまったく静止した。ここには山羊が少ない。ほとんど羊じゃないか。羊はかわいい家畜だ。動かない家畜ではないか。月が出ているので見ていた。うい！寒い。家畜の皮を薄くして作ったズボンだ。この [親指と人差し指とを張った指尺の半分の長さ] ような、長い毛のあるものだ。毛を内側にした。バトの羊群に1頭の子羊がいた。このようだ [子羊の背中が平らだと太っている様子をいう]。今夜は凍え死ぬのか。その子羊を屠った。屠って食道を出し、脚を切り取って内臓を取り出して捨てた。とても太っている子羊だった。[毛皮を] 剥いだ。脂肉のある脇部を焼いて食べ、咽が渇くと雪を取って食べた。シャツを脱いで火にあてた。雪がやんだ。風は続いた。あれ [子羊の皮] を取って来て毛皮を火にあてて乾かし、背中にまとった。毛が長い。そうして過ごした。夜が明けて [天気] がよくなった。何とか凍死せずに生きている。そうして叫んだ。嫁が家で待ちながら茶をわかした。それをかついで、夜、家を出た。あそこの山の頂上にのぼって探した。私が叫ぶと来た。「どうしたのか」 [と聞くと]、「死んだのかと思った」と泣くのだ。「こんな吹雪の中で」 [私は] 言うと、[彼女は] 「これを追い立てて行かないでと言ったじゃないか」と。[私は] 「彼が来て私の草を食べさせたのだ！母をなめるやつだ。ほっておくと今度は家畜を入れるのだ。彼に会った。そうして遅くなり、彼の家を出ると吹雪が起きた」と言った。「私は夜あなたを探し歩き、寒くてたまらなかったので家に戻り、身体を暖めて昨夜寝なかった。徹夜で起きていて夜明けになった。叫んで歩いて来たのがこれだ。羊と一緒にどこで死んだかと思って歩いて来た。夜、死んだのならすぐブルガンに行き、羊を見捨てようと思った。よその人たちが自分の羊を回収できるかなんてかまうもんか [と思った]。うい！この人が死なずに生きているとは何よりだ」と言った。嫁が新しい毛皮の靴を持ってきてくれた。2重の靴下を牛の皮で繋いだ1足の靴だ。家にいるとき履くものだ。羊を放牧するとき、あれを脱いでこれを履く。それも背負ってきた、彼女は。茶を飲んでから、「おまえは帰れ。家を片付けろ。私はこれ [家畜] を放牧して早く帰る」と。こうして苦勞しながら暮らしたのだ。その夜、子羊の毛皮がなかったら凍死していたにちがいない。

DM300141(1) タルバガンの狩り

(人から預かっていた) 羊を返した。5月に200頭の羊と30頭の山羊を引き受け、出産させた。それに加えて、100頭の2歳の羊を引き受け、7、8年間放牧した。あの山で、ハサギン・ヤスンというところで。私は川のところに入って来て1ヶ月ほどすると、ハサギン・ヤスンに出て行く。そこで冬、秋を過ごし、夏営地に出て川に戻り、数日間しか滞在しない。何頭かの馬がいる。暑くて耐えられない。2頭ほどの馬がいる。それらをつまみ、つないでおいて、ここを去る。このヤマント、ブルガストで数日を過ごすと、ハサギン・ヤスンに出て行く。馬は勝手に出て行く。牛はあそこにいられない。雪が多いからだ。牛は兄が放牧してくれた。

第10バリガド⁵⁵⁾(隊)にいるとき、7、8人がタルバガン狩りに行った。タルバガンを狩って戻った。ソリギ、ツァリツァ、ニムバル、ウーゴ、ウゲー、キム、私、こうして、7人が行った。ドグシンというところでタルバガンを狩って帰ってくる。当時、ネグデル(牧畜協同組合)はなかった。私には家畜が少ない。生きるために銃でタルバガンを撃ち、そのほか野生動物を狩り、地元民の家畜を放牧して生計を立ててきた。そうこうするうちに、ネグデルに加入したのだ。

タルバガンを狩りにドグシン、メレहतというところへ行った。このブルガン(川)の源流へ狩りに行っていた。白いタルバガンがいる。黒いタルバガンがいる。ドグシンというところは新ブルガン(現在のモンゴル国バヤン・ウルゲイ県の領内)のトムルト地方の向こうにある。馬に乗って、あそこを出て、途中2泊してここに着く。わがブルガン(川)にタルバガンはもういない。うちの夏営地にはタルバガンがいる。

1戸あたり税金として15枚のタルバガンの毛皮を(割り当てて)徴収する。だから、他の戸のためにタルバガンの毛皮を集めてあげて、代わりに少量の穀物、子山羊、3歳山羊をもらった。私は60、70匹のタルバガンを狩っていた。兄の分を出した。残りはほかの人の分だった。バリガド長のシリグの代わりにタルバガンを提出した。シリグの家に「平和な祖国」という唯一のラジオがあった。私たちは聞きに行っていた。

タルバガンが巣穴から出ると撃って獲る。タルバガンの巣穴はこう、こうなっている。タルバガンが巣穴からこうして〔半身〕を出すと、猟銃で耳の穴を撃って殺した。そのように撃つと、脳が割れ、穴の中に落ちたら、取ってくる。即死しない箇所を撃つと、穴の中へ戻ってしまう。穴のないところでタルバガンを撃つのは難しい。いつも穴を出たときに撃つ。私は42歳になってタルバガン狩りをやめた。猟銃を300個の銃弾と一緒に息子にあげた。マウザー(Mawazar)というロシアから輸入した銃を持っていた。〔私は〕ツェグ⁵⁶⁾に移動し、家畜を送り届ける仕事に行くとき、ボンバライのバースタイという人に「マウザーを貸してください」と言われ、10個の銃弾と一緒に貸したきり、彼はマウザーをなくしてしまった。返すことを求めると、酒を飲んだときに落としたという。そのときから、狩りをやめた。私の狩るものは何かと言うと、狼だ。それ以外には

手をつけない。昔、〔狼を〕狩って暮らした。その後、ネグデルに入って裕福になった。そして、裕福な人が野生動物を殺すのはふさわしくないと思って、狩をやめた。

DM300141(2) ネグデルへの加入

ネグデルには先行者たちが入り、2年経ち、3年目に私はネグデルに加入した。ネグデルは良いものとか悪いものとか言われる。そうこうするうち、私たちの中で先に入った者に家畜を与えた。ジャズ⁵⁷⁾をヤマントに移動させ、イデという人が放牧した1500頭の羊と山羊をここに移動させて放牧した。そのとき、わが家はジャズのこちら側に、兄の家はそちら側にあった。彼〔兄〕は〔ネグデルに〕入っていなかった。私はネグデルに加入して雄羊を放牧し、また、羊を出産させてジャズから38頭の羊をもらった。そして19頭の山羊をもらった。これを見て、兄は「おおい、これに入らないとだめだ」と言い、翌年、わが兄も〔ネグデルに〕加入した。1つはジャズの牛、もう1つはジャスの馬を〔任された〕。〔その賃金として〕翌年10数頭の羊、10数頭の山羊、1頭の牛、1頭の雌馬を〔兄に〕与えた。そうして、人びとはみんな続々と加入したね。

ネグデルが成立した翌年、私は加入したよね。自分の家畜を私に放牧させるために、〔家畜の所有者たちは〕「〔ネグデルに〕貧乏人は加入しないものだよ。加入すると、おまえは負債者になる。この数頭の家畜を没収してしまうよ」と言って、自分の家畜を放牧させていた。こうして、私はこの、ホロスン・ウジュールというところに羊を放牧して入って来た。4月に山に家畜を放牧していると、ホルシャのドゥグルという人が来た。挨拶を交わした。〔ドゥグルは〕「かわいそうな男だな。山で家畜を放牧しているなんて。どうして民の家畜を放牧しているのか。馬鹿だ」と。〔私は〕「私にはネグデルに預ける家畜がない。何を預けて〔ネグデルに〕加入するのか」と言った。〔ドゥグル〕「ああ、なんてこった！これは貧富の差をなくすためのものだぞ。この人たちが今度は逆に貧しくなって、おまえからものをもらうかもしれない」と言ってくれた。〔ドゥグル〕「どうなるかという、25枚の紙幣（25,000トグリグ、モンゴル国貨幣）が働いた日の総数から引かれる、わが子よ。社会化するのだ。頑固だね。おまえは1群の羊を引き受けろ。それがおまえの財産となる。1頭1頭と屠って腹を満たしていけ。羊の毛皮の耳印を見せて死んだと言って供出すれば、それを記して総数から減じておく」と言うのだ。「それなら、私は加入する」と言う、〔ドゥグル〕「加入しなさい。ウーゴンとウガーも加入した。今日、おまえも入った」と言う。彼〔ドゥグル〕は、羊を放牧する男を捜して、会って話して回っていたのだ。

そして夕方、帰って来て羊を囲いに入れ、茶を飲んだ。食事を作ってくれた。バト〔雇い主〕が来た。彼の妻も来た。「私はネグデルに加入しようと思う。兄さん！ネグデルに加入しないとだめだ。人びとはネグデルに加入している。私も加入すれば」と〔私は〕言った。〔バトは〕「もう、こいつめ！ネグデルに加入すると、狼が羊を捕まえるとか、

羊が無くなったら、すべて賠償しなければならないよ。危ない」と私を説得したじゃないか！そうこうして、夫婦〔バトと妻〕が出て帰った。そのゲルに泊まり、翌日、グループから呼ばれた。〔私は〕「申請書をどうしようか。兄さん」と訊くと、「私が書いて加入させる」と言った。

そのとき、1つのグループしかなく、その役所と言えば、芝を踏み固めて3軒の木製家屋が造ってあった。このソム（郡中心）のあるところは木々に覆われていた。その〔小屋〕のそばに2軒のゲルがあり、3人の老僧がいた。そこで〔病気を〕診てもらい薬をもらう。身体を診てもらっていた。

DM300121(2) ネグデルの家畜を放牧した話

セチェン：あなたは昨日、バトの家畜を放牧したことを話してくれました。その後のことを話してください。

ノースタイ：ああ、私は民の家畜を5、6年、放牧して、それからネグデルに入って18年放牧して2年トール（家畜の送り届け）に、4年ツェグにいて、それから年金生活に入った人間だ、私は。

セチェン：ネグデルにどうやって加入しましたか？

ノースタイ：ネグデルか？ネグデルが成立し2年、3年目に私は加入した。ホルシャのドゥグルが紹介した。「どうして人の家畜を放牧してこのように回るのか。報酬もない。この国は裕福な人と貧乏な人を平等にするとしている。おまえは知ってるか。明日、私は貧乏になるかもしれない。すると、おまえに1頭の羊を乞うて食べるような時期が来る。あれはおまえの財産だ。おまえが家畜を増やせば、財産が増える。裕福になる。どうして若くせに他人の家畜を放牧して歩くのか」と。そうして、私を〔ネグデルに〕入れた。

あのホロスン・ウジュルに羊を放牧して歩いているとき〔ドゥグルが来て入れてくれた〕。こうして、同じ年に私とウーゴン、ウガーの3人が〔ネグデルに〕に入った。〔昔〕バイタグで戦闘が起こったじゃないか！そのとき、マジュイン（馬仲英）は破れて逃げ去ったのだ。〔彼らが造った砦の〕その木材を運んでいた時期だ。つまり、そこの建物の木材を運んできて、ブルガンに建物をつくった。私をその仕事に行かせるのだと言った。5頭ずつの駱駝を連れる。3人は15頭の駱駝を連れて木材を運ぶことになった。翌日、決まってから、鞍をつけた駱駝を与える。あの木材を運んで来るからだ。あの仕事に大勢が参加したね。馬でも運ぶことになり、馬で10回だ。駱駝で運ぶことになって1夜を過ごした。翌日、（予定が変わった）。アルバイのニマが兄弟2人でネグデルに加入し、ネグデルの840頭の雄羊を数えて渡した。彼らの2人は追ってバイタグに出ると、誰かに盗まれた。「放牧できない」と言って4月に折り返して移動して来て戻った。いやいや、3月上旬だ。〔彼らが〕戻って来たとき、私たちはちょうどネグデルに加入したばかり

りだった。私を木材の仕事に行かせる予定だったが、翌朝、「この息子にこの羊を与える。木材の運搬には他の人を行かせる」[とされた]。こうして私に840頭の去勢された羊を数えて与えた。そして、川に行くか、山に行くかを自分で決めろと言って私に任せた。私はバトの家畜を放牧してそこ（バトのところに）にいた。あの〔ネグデルの〕羊たちを追って来て2日間寝かせた。畜糞のないところ（宿营地ではないところ）にいると、雄羊たちの口が白くなって過ごした。

いや、こんなこともあったね。そのとき、6頭のめまい病の2歳羊を与えられた。「生きのびたらおまえが受け取ればいい」と言って〔私に〕与えた。私はそれらを連れて来て草の囲いに入れておいた。そのとき、草があった。ホルシャのドゥグルは「この6頭は私が責任をとる。死んだら、私が処理する。心配ない。生きのびたらもう」と言った。数頭連れて来ておくと、動いていた。草の囲いに入れておいた。2日経った。3日経った。おい、これはだめだ。移動する。オンゴ（地名）に出て行く。これらの家畜は苦しくて死ぬ。人の家畜だ。駱駝に荷を載せて立ち去った。オンゴに宿営した。あのホルシャのドゥグルはバトのシリグに言い渡した。〔ドゥグル〕「この6頭の羊を草の囲いに置いておくことになった。死んだら、私に言ってくれ。役所に書いておいてやる。罪を彼に負わせない」

あの雄羊群を追って行くとき、ガリンデブが来た。書記長だったね。彼は来て「おまえはどうだ」と。〔私〕「まあ、これから移動します。北のほう、オンゴに移動します」。彼はまた「あの雄羊の中から選んで屠って食べろ。あの中から月に1頭を屠って食べろ。2ヶ月に2頭を食べろ」と。〔私は〕「この数頭の子羊はこの草の中に置いておきます。水を入れておきました。この人たちに任せます」というと、〔ガリンデブ〕「あれはね、屠って毛皮を取ればいいんだ」とすっきり〔解決した〕。〔あのめまい病の家畜には〕太っているものがある。当時、私は個人的に少数の家畜を持っていた。兄には30頭あまりの家畜がいた。私には20頭あまりの家畜がいた。放牧しているうちに増えたね。

オンゴに行って家畜を放牧した。そこにいと、ホルシャのドゥグルが来た。「兄さん、これからこの雄羊たちをどうするか」と〔私は〕訊いた。〔ドゥグル〕「雄羊たちは元気だね。おまえはそうしてくれると思って任せただよ。5頭の駱駝を連れて、腹を減らせて行くより、おまえにこれら雄羊を任せようと相談して私はおまえに与えた。文句はない」。「これから、これら雄羊はどうなりますか」と訊くと、5月に食用ノルマとして供出する」と。「そうしたら、私には何も残らないですね」と言った。「おお、さらにネグデルの家畜はある。あの高地で500頭の羊を放牧する人、150頭の羊を任せる人を出して休ませない」と言う。高地はわがオボーの北側、ウランタワーの後ろにあった。ソリジェと2人は500頭の羊を持つ。ネグデルに加入した2年目に雌羊ばかりを任せた。〔私〕「あなたは500頭の羊から150頭を分けて、私にください。私はこの雄羊の中で出産させます。〔そうしないと〕また、私には何も残らないことになるでしょう」。

クングという老人はこの南側に住んでいた。彼から50頭の羊と30頭の山羊をもらった。合わせて200頭あまりの家畜になった。〔私は〕「それらを別に放牧して出産させます。心配は要りません」と言った。

妻は出産する羊を放牧する。私は、あの雄羊を放牧する。昼ごろ帰って来て、両方を囲いに入れる。とても悪い羊を50頭くれた。身体の大きい、仲間はずれのものだ。選んでくれた。山羊をくれた。すべて、子山羊を見捨てた山羊だ。〔放牧されないで〕餌付けされたこれらの山羊は出産しますかね」と言ってみると、「昨日加入したばかりだろう、おまえは。おまえより前に私たちは審査を受けずにネグデルの家畜を放牧していた」と言うので、私は答えようがなかった。家畜をもらい受けて世話をし、2つに分けて出産させた。そうこうするうち、だめだ。雪が溶けてきた。だから、こうして移動してイヘ・トリに住んだ。トリに宿営すると、あのハラに砂煙が立ち上っている。すると、ガリンドブとドゥグルの2人が来た。〔2人〕「最近、どう」。〔私は〕「羊は出産し終わるところだ。クングから受け取った山羊は2頭しか出産していない。そのほかはすべて不妊だ。このことを言うと、昨日入ったばかりのおまえが私を審査するのはまだ早いとクングに叱られた」と言った。〔ガリンドブとドゥグルは〕「あの爺さんはそうするものです」と言った。「雌羊はすべて不妊のものだ。毛もない。毛はすべて刈られていた。数頭の仲間はずれの羊をくれた。夕方、1頭の仲間はずれの羊をゲルのそばにおいたが、そこで出産し、その夜、狼に食われてしまった」と言った。彼らは「出しなさい。分けなさい。クングは川のほうへ移動しようとしている」と言った。そして、ドゥグルとカリンドブは書類を書いてくれた。〔私は〕羊と山羊を分けて追って行った。「受け取らなければ、家畜群に入れて、ゲルの帯に書類を挟んでおいて、馬を走らせて来なさい」と言った。彼らは行った。雄羊を北側から行かせ、ほかの羊を南側から行かせた。混ぜない。日が昇らないうちに追った。クングの家に着くと、クングはいなかった。「どうしたのか」と。「この羊を返しなさいと言われた。自分の家畜を受け取れ。不妊の山羊は出産していない。私は前日加入し、あなたはこれを与えた。私は前日加入したばかりで、これらの子羊を賠償するわけにはいかない。これらの子山羊を賠償するわけにはいかない。賠償しません。返しなさいと言われた。書類はこれです。これを受け取ってください」と言うと、〔相手〕「私は受け取らない」と言う。「受け取るかどうかは自分で決めてくれ」と言い、私は腹が立った。〔書類を〕ゲルの帯に挟んでおき、「あの群れの頭数は減っていません。この書類に書かれています」と言って走り去った。

そして秋、川のところに入った。そうこうするうち、ドゥグルが来た。そこに私たちが移動して来た。そして、雄羊を引き取った〔ノルマの食肉供出用の雄羊を担当した〕。あの150頭の羊は出産した。アシデレゲで150頭の3歳雌羊を移してもらった。あの3歳羊は良いものだ。淡黄色ばかりだ。大きな羊のようだ。私はそれを喜んで引き受けた。それらを受け取って、雄羊を追って、妻は子羊を放牧し、私は雄羊を放牧した。そのと

き、私はこのハラガナ植物の中にいた。ブルグスタイと2人で追って行けと言われた。ブルグタイと2人は、合わせて1,400頭の羊を追い、その中から300頭の雄羊を分けて、彼の弟に与え、残りのものを2人で追い立てた。私はその羊を長く放牧した。

DM300087(1) 牛を届ける仕事

トープリ⁵⁸⁾として、ウーガンのプルブと私の2人が240頭の牛を担当した。高地や丘や山の険しい道に行く。牛を追った、羊と山羊を追った、馬を追った、通れないほど行くのだ。途中、半分はツァガン・ヌールというところに入り、半分は北のフフ・エレゲというところに出る。そこで私は2年家畜を届ける仕事をした。〔家畜を届けるのに〕道中1ヶ月かかる。時どき、1日休む。時どき、2日休む。そうして行き、ようやく着く。自分の家から食糧と乗馬を持って行く。食糧として生きている（小型）家畜を、届ける家畜の群れの中に入れておく。1人あたり2頭の家畜、2人で4頭の家畜を〔食用に〕連れていく。そうして進んでいるうちに家畜を屠る。私たち大型家畜を追う者と小型家畜を追う者は別だ。一緒に進んで行く。

さあ、そして、〔家畜を届けるというのは〕基本頭数を満たして行く。1人あたり400頭の家畜を受け持つ。3人なら1200頭の家畜を追って行く。牛を追う者は、3人で170頭を受け持つ。だから、プルブと私の2人は148頭の牛を追って行った。フフ・ウジュールというところから出発し、新ブルガン⁵⁹⁾を経て、2～3日、5日、7～8日かかってフフ・エレゲに着く。そこにモンゴル（ロシア）国境がある。ロシア（ソ連）はあちら側に、モンゴルはこちら側にある。順番に家畜を供出する（各地から来た家畜を届ける者たちには順番が与えられている）。ツァガン・ヌールに行った家畜はそこで分けて、残りをフフ・エレゲに届けていた。

わがアープ・ノヤンの山があり、アルタイ・タブン・ブグダと言う。この山のそばにフフ・エレゲというところがある。その地のカザフ人は〔その山を〕「あなたたちのバンガハンのアルタイ・タブン・ボグド」と言う。〔彼らは〕「私たちは一生ここで暮らしている。〔貴方たちの殿は〕立派な王だったね。わがオスマンのカザフ人は裏切りものだ。泥棒だ。人殺しだ。強盗たちだ」とこれらのカザフ人の悪口を言う。〔そのカザフ人たちの〕良い人たちだとは言わない。

そこにロシア人がいる。〔国境の〕間に部屋がある。このような狭さだ。あち側にはロシア、こちら側にはモンゴルだ。その木立から程度の距離（約50m）だ。入り口にロシア兵士が立っている。こちら側にモンゴル兵士が立っている。そうして家畜を入れる。このような細い道だ。両側に人間の高さほど（約160～170m）のレンガの壁がある。牛たちが流れるように入る。向う側に柵がある。ロシア側には1人の男性と1人の女性が立っている。その女性が指示すると、男性が〔家畜を〕畜舎に入れる。牛が次つぎと行く。30頭ごとに〔入れて重さを〕量る。建物（トープンというレンガで建てたもの）

がある。その秤に入れて向う側に渡す。牛をすべて出しきると、向こうの空地に馬に乗った3人のロシア人兵士が3方に立っている。渡った牛を集めている。そうして牛が渡りきって、頭数が揃うとそれを追って行く。もう1つの受け取るところがある。〔これらロシア人たちは〕牛を受け取ると、あそこにそれら〔牛たち〕を届けてから3人の兵士はまた戻って来る。ツォゴルムという人の1頭の雄牛が届けられた。その牛を連れて入れてから、ほかの牛たちを追い払うと、続々と入っていく。そこにたくさんの建物を建てた。その秤へ30頭の牛を入れて入り口を閉じ、量ったものを向う側に出している。また後ろから流し入れている。供出されたものは苦闘しない。入り続ける。たとえ家畜でも何が起きていることを知ってるのかな。どうかな。

その牛を追い出し、頭数を満たしてパダン⁶⁰⁾を作って向う側に渡している。私たちにパダンを作って渡して帰らせる。家畜を渡して帰って来るじゃないか。1頭の馬に乗って4日で帰って来る。帰って来て、〔供出した〕肉が〔ノルマより〕多ければその分の金を〔私たちが〕もらう。牛肉の余分だ。ここから出発するとき、地元民から集めた牛は重さの規準は定められている。出発して放牧しながら肥えさせていく。〔最初に受け取った時の肉より〕大きな重さにする。最初の重さより30%増える。途中どれぐらい重さを増やすかの規準が定まっている。機関が最初の肉の重さに増えた分を足すのだ。そうして規準の肉量より以上の分は、牛追い人に与えられる。当時、〔決まった重さより〕3000kgあまりに肉が増えた。ここに戻って3人で分け合うと、1人あたり9,000トゥグリグになる。

その家畜はフフ・エレゲにも届ける。その中から残った家畜を屠り、頭や足を整理して火を通して食べる。ほかの肉は水分を少し除いてから、容器に入れて馬に載せて行く。1頭の荷物用の馬を持って行く。帰るときは昼夜行き、4日目に夏營地に着く。向こう(牛を届けた地)から出発するときに300トゥグリグをもらう。残りの分はここに戻ってからもらう。

DM300164 家畜を追い立てた話

ノースタイ：家畜を追うのは1ヶ月かかる。ノルマがある。1人に1,400頭の家畜が任せられる。1日私が追って行き、夜、見張りをして、翌朝、次の人に任せる。次の人はまた1日追って夜見張って過ごし、次の朝、もう1人に任せる。また、1日違う人に任せる。テントを持って行く。外に露天で料理を作って食べる。3つの石を五徳にする。こうしてある山の稜線上の平らなところを越えて行くと、薪が得にくくなる。〔だから〕白樺を1袋持って行く。

ムンヘバートル：食糧はどうしますか？自分で持って行きますか？煎り小麦粉を持って行きますか？

ノースタイ：自分で食糧を用意して行かないと。〔自分たちの食用の〕羊を〔追っていく

家畜の群れの中に]置く。1人が2頭の〔小型〕家畜をもって行く。小麦粉は新ブルガンで購入する。小麦粉で菓子を作って食べて行く。1頭の雄羊を屠り、内臓に4本の脚とその他の肉を入れる。また、一部の肉を塩に漬けて10日間持つ。腐らない。当時の泥棒は大変だ。新ブルガンを過ぎると、2日間で目的地に着く。フフ・エレゲに着いて供出する。シャラ・ヌールで羊毛を刈る。3時間以内に刈り終わる。羊毛を刈る人は子ども、婦人、老婆がたくさんいる。50、60人だ。カザフ人ばかりだ。羊毛はそこで供出する！シャラ・ヌールの長官に〔出す〕。そこに機関がある。その地を出てツァズに泊まる。そして、北へ曲がって5日間をかかってフフ・エルゲに着く。

シャラ・ヌールを出て追っていくと、2人のカザフ人がついて来れなかった。羊毛を刈ってから、私は茶を飲んで褐色馬の鞍をつけて、その紐にタバコを吊るした。私自身はタバコを吸わない。出会った人にタバコを出すんじゃないか！歩いていくとなかなか長い道だ。広々とした平野だ。料理を作って食べた。食事と言っても何も無い。茶をわかして菓子を食べた。そして長いこと横になった。また馬に乗って行き続けた。夜明け前、あそこの北側の高地の稜線に〔2人のカザフ人の〕叫び声が聞こえている。私は無視した。羊を放牧していた。そうしていると、2人のカザフ人が「ボルボルヤボルボル、ホタヤ、ホタヤ」と。〔あの2人は〕来てテントを張って茶をわかった。私は「おまえたちは何をしているのか」と訊いた。「おまえを探していた」と。「探していて夜が明けた」と。「探したって、なぜ早く来なかったか。カザフ人にネグデルの羊を捕まえてあげる代わりに2歳羊をもらいに立っていたではないか。私はそこの長官に話してすべて出してもらって、ここに来たではないか。おまえはあの2歳羊で何をしたいのか。1kgの肉は私たち3人にとっては牛みたいものだろう。それを取ってノルマの総重量を減らすつもりだね。おかしいカザフ人だね、おまえは。おまえをリーダーにしたのだよ」と言って、私は行って寝た。2人のカザフ人は茶をわかして菓子を食べて寝た。朝、2人のカザフ人は羊を追って行った。腹が立つ。

バインゴルの川を渡るとき橋がある。1度にたくさん渡れない。早く起きないといけない。1人の老人は赤い小旗を持って立っている。私はしばらく寝ていた。それから起きて茶を飲み、荷物をまとめて馬に荷をつけ、夜明けに出発した。バヤンウルギーのこちら側に着くとき日が昇った。ちょうどバヤンウルギーに着いているところだ。彼ら2人は馬を走らせて、私たちより先に入った。〔私は〕「あの長官にすべてあげてもかまいません。あの長官と相談して交換するか、もらうか、何でも勝手にしてください。私はガラマグ（モンゴルを意味するカザフ語）です。彼らはカザフ人です。リーダーは彼です。私たちに関係ありません。私たちにそのような権力がありません」。〔リーダーのカザフ人は〕「あなたが決めています」。〔私〕「いいえ、私にはわかりません。エネスキ・ガラマグと言った。〔私は〕迫り近づいた。「おまえは何と吠えたか。なぜ人を罵るのか、おまえ。あの長官と相談してやり取りしろと言っているじゃないか。やり過

ぎのカザフ人だね、おまえは。オスマンの残党め」。そのときの私は勇気がある。銃を持っている。おう、私は怒ったら銃撃するよ。彼は私を罵っていないと言う。「罵っていないと言うんだね。罵っていないって言っても「エネスキ・ガラマグとはどういう意味だか、あれは。私はカザフ語がわかる」ということになった。そうすると、ツェカたちは「放っておけ。大丈夫。交換したり、国の財産を手にしたりする人がどこにいるか。彼がどうするかは勝手にしろ。私たちは自分の道を歩もう」と。こうして渡さず、止めた。

なんてこった、ある老人はずっと走っている。走っている。家畜群が途切れて、途切れてだったが、泥棒が少なかったから、どうにかこうにかやり遂げた。私は〔群れの〕真ん中にいる。さっきの彼は、後ろから追っていく。また、私は後ろから誰かに盗まれるかと心配して監視している。1時間、2時間、3時間かかってやっと小さな橋を渡った。こうして正午になった。渡って向こう側の水のところに行った。その上のほうに飛行場がある。ツェカが言った。「私の弟がバヤンウルギーにいる。〔だから行ってくるのでそのあと〕どうするかは勝手にしろ、息子よ」と言って、1頭の3歳雌羊を持って来て置いた。「置いてください。私はあなたのゲル（移動式住居）で3日間茶を飲んだり肉を食べたりして1日寝て休みました。〔好きな家畜を〕あげなさい。あげなさい。私はこれだけを決めることができます。好きな羊を捕まえて上げましょう」と言うと、彼は行ったじゃないか！彼は「わあ、私は駅のこちら側に泊まる」と言う。

2人のカザフ人が馬に男を乗せて一緒に来た。「役所で数頭の家畜が死んだか。私は獣医だ。死んだ家畜の数の統計をとっている」と言う。あの2人は私を見たりしている。「役所に死んだ家畜はいない。屠った家畜もない。役所がむやみになぜそんなことをするか。私は羊を追い立てたことがない。先般、牛を追い立てたことはある。今回、この2人と羊を追い立てている。うちのリーダーは彼だ。彼らが知らなければ私にはわからない」と言うと、〔相手は〕「いくら何でもわが弟を犯罪者にさせない」と言った。〔カザフ人は〕「3頭の羊を売ってくれ」と言った。〔私は〕「リーダーに売ってもらってください。半分が売られてもかまいません」と。あのリーダーとささやきながら3人が行った。3人はひそひそ話しあっていた。そうして2人が行った。「じゃ、今、老人の弟に羊を届けろ。私の親戚がいる」とツェカが言った。あのカザフ老人が言った。「親戚に会って来よう。ここに宿泊することになる」と。〔私〕「私は泊まらない。ここにどうして泊まれようか。私は発つ。誰かが羊を担当しろ」。そして自分の分の羊を追い、テントをそのままにして去った。4リットルの容器に水を入れて馬の鞍ひもに吊るした。鍋を馬の鞍ひもに吊るした。馬を引き連れて服を上に乗せた。随分待ったが、なかなか来ない。私は羊を追って出た。駅のこちら側に出てくると広い平野だ。平野を進むとウラン・ホトク（地名、赤い井戸という意味）がある。ウラン・ホトクに泊まるのだ。以前、牛を追って通ったことがある。それはとても良いところだ。進んで行き、着いてみると、自動車 came。あの人に乗っている。「ここに泊まる予定だ。おまえはどうやって行くか」と

いうのだ。〔私〕「まあ、私は行く。先を進んでウラン・ホトクに泊まる。捕まえろ。捕まえろ。好きな羊を捕まえろ。一番すばらしい羊を取れ。昨日言った。羊を放って置いた」と。あの男は角のない、赤毛の雄羊を捕まえた。2人のカザフ人が来た。2頭の羊を取ってあげた。〔私〕「また、あの長官から立派な羊をもらってください」。〔リーダー〕「ここに泊まろうとすると、おまえがこの長官の言うことを聞かないのだから」。〔私〕「こんなところにどうやって泊りますか。夜、何か起こって国の財産を取って行くところを探しますか。こんな知らない場所で」。〔いやいや。1、2頭の羊を売りませんか〕。〔私〕「ね、私にはわかりません。あのリーダーと相談してください。10頭をあげるか5頭をあげるか、私にはその数だけ分かれば十分です。そのほかは要りません」。また、あの人たちは話し合っていて「イテキス・ゴス〔勇気のないやつ〕」と言う。こうして、私は「もういいです」と言って自分の羊を呼び集めて追って北へ行った。〔私は〕「早く来なさい。あの自動車に羊を乗せて行かせ、早くウラン・ホトクに行行って泊まります。あなたはウラン・ホトクというところを知っていますか」と言った。〔リーダー〕「あそこにあります」と指している。

そして私は進んだ。日が沈んだ。井戸の南側のでこぼこの地を行って。私たちは牛を追って行ったとき、一度泊まったことがある。この井戸のこちら側にこのような大きな谷がある。夕方その谷の口に入った。羊たちは腹いっぱい食べたようだ。羊を追って来て集めた。鍋をかけて茶をわかして飲み、半分を明日もって行く。明日1日じゅう、水がないのだ。1日の道程だ。頑張っていけば、水のあるところに着く。頑張らなければ、水場に着かない。あの北へ。茶をわかして飲み、黒馬に鞍をつけた。1頭の馬に足かせをしていて、軽く縛った。もう1頭の馬に乗って進みながら待っていて来なかった。翌日の夜、1人で過ごすことになった。「今度羊を追うことになったらね〔絶対断る〕。このように、他人の手に握られてまったく〔しょうがない〕。〔今回は〕気をつけて届けよう」〔と進んだ〕。待っていた。待っていた。そうしていると、南から黄色っぽくなり、夜明けになってきた。あのウラン・ホトクの北側で騒々しい声が聞こえる。私は声をかけず、茶を飲んで荷物を積んだ。羊を谷から追って、ウラン・ホトクの上のほうを通りかかるときカザフ老人に出会うと、「夜明けまで探しました」と言う。〔私〕「探したって、ざまをみろ。どうして一緒に来て泊まらなかったのか。あの羊は今日水のところに着いて泊まることができるなら、朝、私は骨を数えてあげる。あの2人は、このモンゴル人をこうすればと囁いていたのだ。私たちはそのように囁いていないと言う。パヤンウルギーで私の見えないところで、何頭羊をあげたか。渡っているとき何頭あげたか。シャラ・ヌールで毛を刈って出たとき羊がすべていた。これから羊が足りなかったら責任を取れ。私〔リーダー〕は羊をあげなかったと言うね。遠く行って吠えなさい。狂暴〔なカザフ〕め」。こうして羊を追って行った。「今日が私が追おう。明日はあなたたち2人が追え。この前、野宿した。今夜また野宿した。朝、私は羊を数えてあなた2

人に任せる。〔家畜を〕人にあげたりするモンゴル人はいない。国の財産をそのようにしない。あそこに行って茶をわかして待ちなさい」と言って行った。道の片方に赤い山、もう片方に黒い山がある。そこを通り、向こう側で正午を過ぎた。また〔家畜を〕追い立ててそこを出ると、あそこは何という地名だったっけ、あの地域に着くのだ。1日中、水がなく進んで着くところがそこだ。

そして進み続け、進み続けた。2つの山のところに来た。〔彼らは〕いない。あそこの山の稜線に煙が立つ。羊を追って近づいてみると大きな何かがある。来てみると、新ブルガンの黄色のカザフ人とあの2人のカザフ人と会った。〔私は〕彼らの羊を任せて馬を走らせて去った。〔あの黄色のカザフ老人のところに行った〕〔私は〕「昨夜、あの2人は私を野外に泊まらせた。あの駅の内側に泊まろうとしたら、こわくて泊まらなかった。昨日の昼ごろ、羊を追って出発し、暗くなってウラン・ホトクに来た。今来ると待っていると、夜が明けた。困ったなあ。もう、だめだ」と。〔黄色のカザフ老人〕「こちらに来てください。茶を飲みなさい」。〔私は〕降りた。茶をくれた。菓子もくれた。〔黄色のカザフ〕「あの2人はあなたを探しに来るでしょう。私は党員政策の実施についてあの2人をよく教育しておきましょう。モンゴルで、こうしては死んでしまうと、国の財産をどうするつもりかと言って叱ります」。〔私〕「では、では、追い立てなさい、追い立てなさい。茶を飲んで羊を追って早く進みなさい」。彼らは今、出発しない。彼らは朝早く出発すると言う。私は1人だ。あの2人が来てくれるかなと〔思った〕。彼らは道の上側で茶をわかして飲んで寝ていた。私はそばから通って行った。彼らは寝ていて私が通ったのを知らなかった。そのまま私は進んだ。羊を追って進んだ。そのうちに涼しくなった。進んだ。水のあるところに入った。上のほうに3軒のゲルがあり、下のほうで野菜を栽培していた。この人たちは水を引いている。上のほうへ走ったり、下のほうへ走ったりして、2回往復していると、2人のカザフ人が来た。「途中で待っていてくれと言ったのに、どうしたのか」と訊くと、「まったく私たちの中に頭の良いやつがいなかったね。呼んでも勝手に山に沿って行ってしまった」という。呼んだって、こん畜生め。バヤンウルギーのあのカザフの名前をあげて、あの2人はごまかす。こうして羊を追って〔目的地に〕入った。それから、2度とカザフ人と一緒に家畜を追い立てないと私は思って彼らをその分の家畜と一緒に残して去った。こうして1回家畜を追ってフエレグに届けて、別れた。

あの家畜をロシアに提供する。ロシアとモンゴルのあいだにこのような道がある。一方がロシアで家畜を受け入れる。一方がモンゴル側だ。そのあいだはこのように狭い。そこを通過して秤場に入る。羊なら50、60頭が入ることができる。秤がある。その秤で量って向こう側に渡す。向こう側で、騎馬した3人のロシア人が見ている。羊を受け取ると彼らが追って行く。こうして受け取って行くと、また、あちらに提出する機関があるそうだ。あちらに届けてから、あの3人は、夜、戻って来る。あそこの国の馬は駱駝の

ようだ。みごとな体軀の馬だ。つけられた鞍はすべてロシア風のものだ。

さあ、そしてロシアに家畜を供出してから気が楽になった。羊は1頭も失わなかった。ハラハイのベキという人が1頭の2歳羊を持って行った。それを屠らせなかった。私たち2人は困いっばいの家畜を持つ。あの日、供出した後で、彼の羊が残るのだろう。「あのう、ハラハイのベキよ、この中から1頭を捕まえて自分の2歳羊と交換してください」と言うと、その中から1頭の2歳羊を捕まえて残した。それをカザフに売ったらしい。まあ、とんでもないよ。貧しいからだ。1、2頭の痩せている馬をもつ。白まじりのと栗毛の2頭の馬だ。

ムンヘバートル：このツェグにいたとき羊を担当していましたか？ どうしたのですか？ なぜそこで仕事をしましたか？ 何をしていましたか？

ノースタイ：誰が知るものか！ この政府は、2年間、骨を集めていたのではないか！ ホロスン・ウジュルの平野に1軒の家がある。その中で。

ムンヘバートル：あのゆでた骨は、あなたたちから買い集めているのですか？

ノースタイ：骨を袋に入れてソムの中心地に届けておく。毛皮と腸と一緒に。ツェベグを知らないのか！ 黄色の車がある。〔あの車で〕死んだ家畜の肉を届ける。

ムンヘバートル：1日いくつの家畜を潰して毛皮を剥がし、骨を届けますか？

ノースタイ：あれはいつも屠るのではない。獣医がいる。治療をしていて死んでしまう。顎を取ると死んでしまう。痩せて死ぬ。病気で死ぬ。痩せた悪いやつらだ。私はその皮と腸を取って骨をゆでる。大きな鍋に入れてする。

ムンヘバートル：骨をどこに届けて誰に供出しますか？

ノースタイ：ソムの中心地に持って行って管理人に出す。ニンダグのバースタイという人が集めていた。肉も毛皮も彼が集めていた。腸と骨はハライダムジャブの妻が集めていた。それらを集めてまた中国へ輸出していたか、国内で回収していたかはわからない。白い骨、悪い鍋だ。肉が剥げ落ちるまでゆでる。一枚の手袋をして骨を取り出す。

ムンヘバートル：あのツェグでどのぐらい働きましたか？

ノースタイ：下のほうのツェグで2年働いた。3年目に4つのツェグは合併され1つになった。

ムンヘバートル：家畜が牧草地に出ていて死んだらどうしますか。

ノースタイ：放牧を担当している人が持って来てくれるね。持って来てくれれば、私が毛皮を剥がして処理する。太っているのもあれば、痩せているのもある。良い肉は持って来ない。最初るとき、めまい病になった、太っている羊を届けてくると屠ってぶら下げていた。〔ある日〕帰って来ると、ゲルの戸のところで3、4頭の家畜がばたばたしている。ゲルの後ろにまた10数頭の家畜が縛りつけてある。私は水のあるところに行き、顔を洗おうとしたら、また2頭の家畜が水の中で死んでいる。そこに来たばかりのときだね。規則で〔決められた日に〕移動させられた。守らないと、規則の日数〔の罰金〕

が私たち夫婦に課せられる。罰金は数頭の牛と雌馬を出しても足りるか！（足りない。）兄の家に自分の牛を連れて行った。

この施設を管理する1人の娘がいたではないか。彼女は獣医だった。めまい病の家畜を取り除く。薬を与える。注射する。駅長のバースタイの息子がいた。彼は一度来てまた行ってから〔獣医の女性が〕2日間見えないと言われていた。「朝、縄を引いて羊を追って来よう。めまい病の家畜をすべて追って来い」と。私は水の辺に穴を掘った。「何をしますか」と〔人に訊かれた〕。〔私は〕「どうなるかを見よう。賠償になってもせいぜい2頭の牛だろう。こうして困っているより、立派なのを私が屠って解体処理しよう」。そうして20数頭のものに押印してもらって屠る。屠って、頭と脚をこの穴に埋める。上から責めて調べるなら、これらの頭などを数えて出そうと思って〔羊の〕頭を打って倒していた（羊の頭を打つと前足で立ち上がるという）。屠っておいた。屠って木にぶら下げて少し乾かす。あるものは太っている。まったくこのような〔掌を開き、5本指を伸ばした様子で羊の尻尾の大きさを示す〕ものだ。あるものは痩せている。あるものはまあまあ家畜だ。腹が大きい2頭の羊はどうしても起きられない。それを屠ると中に酸乳のようなものがある。腹の中だ。屠ってゆでた。また、3頭の家畜が残っている。こうして21頭の羊を屠った。そうこうするうちに、ヘルトのバグバは妻と一緒に来て「あなた、問題を起こさないでね」と言う。「治療して治ったものがどこにあるか。あの水の中の2頭を賠償しないでどうするか。あの中に1頭の黒いのと1頭白いのがある」と。彼の妻が「そうですか」って見に行行って来て「ほんとうですね」と〔言う〕。「そうだよ。ブルガン（中心地）に行行って見ろ」と〔私は言った〕。ジャガルは来て「あなたは問題を起こしました」と〔言った〕。〔私は〕「遠くに吠えろ。私の牛は妊娠して7、8ヶ月になる。賠償になるなら、2頭の牛に相当する。連れて来てこれを売るほかない」。ツェベグの家はまだ移動して来ていなかった。ここに死んだ家畜の肉を吊るす鉤竿がある。家がある。すべてこのような鉤がついている。そうしていて、バグバが来た。〔バグバ〕「ほら、だめなことをしたのだよ。きっと首になるよ」。「それは一番楽じゃないか！首にならないと思っている。せいぜい賠償して終わるだろう。」

さらに日が沈もうとするとき、たくさんの駱駝が下りて入って来た。駱駝の中から1頭を捕まえ、敷物を置いて肉を積んで細い道を進ませた。あの屠った家畜の肉を家の中に入れて吊るす。それは9月のことだ。腐らない。寒くなっていた。2、3日を過してもっと寒い部屋に入れて吊るす。悪くならない。皮、腸、脂をすべて入れておく。

ツェベグは移動して来ていない。というのも、明日来るという噂が流れていた。翌日の午後、ツェベグはゲルを運んで来た。私はツェベグを手伝って、ゲルを立てた。「私はたくさんの家畜を屠り、肉を用意している」。〔ツェベグ〕「誰が許可して屠らせたか」。〔私〕「誰にも許可させていない。私が決めて屠った。どうだか。治療していない。あの獣医はどこに行ったのか。何もしていない。あの水の中に浮いている。ゲルの外にいつ

ばいい」。〔ツェベグ〕「畜生。もう終わりだ。わからない。わからない」と言う。ツェベグはゲルを立てて過ごした。私たちは朝、夜が明けないうちに起きて、〔私〕「私はこの肉をソムの中心地に届けます。法律に違反したのなら、法律で処理しよう。私が首になろう。欲しいならあげて炒めてもらおう。バトジャブと2人で行く」。

バトジャブと2人でバースタイの家に来た。9月、肉がかなり減ってきている時期だ。あのネグデルの仕事が進まない時期だろうよ。着いて戸口に止まり、走って入った。〔私は〕「ほおい、バースタイ、私はかなりの肉を持って来た。すべて屠った家畜の肉だ。自然に死んだものなどいるものか。2頭の痩せている馬の肉がある。欲しいなら取ってくれ。もらわなくてもかまわない」と言った。〔相手は〕「太っているか」と訊いてくる。〔私〕「太っている。出て見てくれ」。「そうしよう」と言ってツェベグと一緒にいった。ホルンバはその上のほうに住んでいた。〔バースタイ〕「ホルンバの妻に押印してもらおう。それから、もらおう」。「そうしよう」と言ってツェベグと〔私〕2人が行くと、ホルンバの家は上のほうの脇にいた。当時、ホルンバは暴れん坊だった。恐ろしい。私はこわい。走って行って入った。2人の息子がいる。ホルンバは「何をしに来たか」と言った。「私は肉を持って来た。奥さんに押印してもらいたい」。〔ホルンバ〕「彼女は朝、出て行ったよ。どこに行ったかわからない。行け」と。あの人はとても厳しい。さあて、どうしよう？どこに探しに行くというのか！朝出たそうさ。2人で北へ行っていると、あの奥さんが見えた。彼女に会って「あれほどの獣医に許可されましたか」と訊かれた。当時、軍隊に1人の医者があった。あの軍医が許可したので屠りましたと嘘をついた。「こうして地下に埋められるより、この太っている肉を屠って分けなさいと言われた。だから、私は持って来た。印を押してもらおうとやって来た。」あの2頭〔だめなもの〕についても訊いた。そう言った。あの2頭はどうしてもだめだと言われた。だめなら、折り返して骨を売ることにした。それをほっておこう。そのほかのをもつてツェベグの家に来た。「なんてこった、どうしたのか」と〔彼は〕言う。「押印することになった」と。押印してもらってあげた。このような尻尾を持っている。体調の悪い家畜をすべて屠ったのだ。そのほかに、めまい病の家畜は届けられてない。バースタイたちは喜んでもらった。悪いものを残した。「これに押印してくれ。バトがほしいならあげる。要らなければ放っておく」というと、「やめましょう。今度来たときに立派なものをあげよう」とあの女性は言う。「今度来るとき、あなたにこのような〔掌を開いた様子〕羊を持って来てあげよう」と言って、あの家畜たちに押印してもらって喜んで来た。バースタイはもらった。バダイとあの2人を放っておいた。〔ツェベグは〕「いや、あれを1つ1つの骨に切断して混ぜて与えないでどうする！あれは国の財産ですよ！私の私物ではありません」と言った。〔私〕「あれはちょっと気になります。2頭はだめです」と。だからあの2頭を捨てた。肉を提供してから、腸と皮を持って来て、あの老婆に渡した。〔私は〕「ツェベグ、おまえは行ってそこで待っている。私は下のほうの軍隊に行つて来よう」と。〔ツ

エベグ)「車で行こう」と。[私]「それなら、そうしよう」と、2人で車に乗って軍隊に行った。そこであの家の主人を訪ねると、あそこの下の方にいるそうだ。あの家に入ると、あの人が座っている。あの人を呼び出して外で会った。[私]「こういうことで私は羊を屠った。12頭の羊の債務になったそうだ。あなたに許可された、と言って出した」と。[相手は]「まあ、良いでしょう」と言って解決しました。

あそこでの2年間に、150頭に至る羊を屠ったね。屠って運んで来て供出していた。だから、たいした収入になったと言われているね。そして、肉を無駄にしていないとほめられた。私に賞を与えてくれた。その後、あの医者牛の注射に来てわが家に泊まった。[医者は]「おまえがいるから、2頭の牛に注射しなさいと言われた」と言った。朝、2人でツェグに行った。そのとき、2、3頭の雄羊が届いていた。[私]「見ていますか！あの1頭、この前に1頭、今、山から届いた1頭がいる」と。「屠りなさい。私が許可する。屠って吊るしてくれ」と[彼は]言った。それから、届いた家畜を屠っていた。それから、私はめまい病の家畜の肉を食べたことがない。バグバは1頭を屠って食べたいと言って、もらい受けた。あれはすべて金だね。羊を数えて頭数が足りなかったらバグバは1頭を、ツェベグは1頭を、ノースタイは1頭を取ったと記録して給料から金を引く。[ツェグに]2年いた。3年目の4月の初め、合併したツェグに行った。そして、私は、アラシヤン・ハラに3頭の駱駝を探しに行った。アラシヤン・ハラはバイタグの領内にある。2頭の駱駝を見つけて毛を採った。もう1頭の駱駝をアラシヤン・ハラで探したあげく、回っていると、イーシヤンが来た。[イーシヤンは]「このアラシヤン・ハラに1頭の種牡駱駝が発情している。一昨日、私はただ1頭の雌駱駝を追い立てていた。すると、あの種牡駱駝が発情して人間を追うほどだった」と言う。「私は馬に乗って駱駝を探しに出たら、あの2頭の駱駝が見えて近づいてみると、前方から走って来た。走って来てハラガナの上で転がったりした。私はこわくて逃げた。私の雌駱駝ではなかった」と彼は言った。1泊して翌日やって来ると、なんてこった、[あの駱駝は]毒の草を食べて鈍くなっている。そこでぶらぶらしている。放っておいた。

放っておいて帰って来ると、1つに統合されるツェグに派遣された。ハグシャルで4つのツェグが合併するそうだ。[私は]そこには行かないと断って、隠れていた。車が遠くに見えるとすぐ身を隠していた。そこであの駱駝を見つけてきて毛を切り、敷きフェルトをつけて、アマトの北に行かせて2日経っていると、[ある日]アルバランというカザフ人がわが家の戸口に立った。[私を]捕まえてツェグに連れて来た。どうしてもだめだから、ゲルを崩して運んでもらい、牛を追って行ってもらった。牛は生まれた。6、7頭の牛を持っている。3頭の駱駝はアラルにいる。兄に[駱駝たちを連れ戻して]世話をしよう頼んで去った。ジャガルはハラ・ウジュルに牛を追って荷物を運んでいる。[私は]そこに行った。ジャガルを見送ってから車が来た。アラグで待っていた。妻を車に乗せてもらって行かせ、私は牛を追ってツェグに来た。こうして57、58歳で下のほう

〔ツェグ〕に2年いた。このハグシャルに2年いた。61歳でそこから逃げてアラグに来て警備員になり、62歳で退職した。

ツェグから逃げて兄の家に行った。警備長のツェレンジャブがいた。〔私は〕アラグの建物の中で2、3頭の家畜に手をつけていると、ツェレンジャブが叫びながら入って来た。「あなたに警備の仕事をしてもらう」と言った。〔私は〕「どうやって移動して来るのか」と訊いた。〔ツェレンジャブ〕「方法を考えて移動させましょう」。そして、リーダーたちはセミナーのため、3日間、ソムの中心地に行った。そういうことでツェレンジャブは行った。その後、党の中で私たち2人に処罰を与えなかったので、それで問題がなくなった。兄に会ってきってから帰ると言って行った。また、帰って来てくれと言われる。そうして、兄に会って来る途中、オトホンは駱駝で草を運んでいる。この駱駝で草を運んでいるのだと思って通り過ぎたが、また、よく見ようと戻って来ると、烙印がいっぱいつけられている。肥えているという。なんと肥えているか！背中はこれぐらいだ。〔私が〕「あなたはこのような股をもつ家畜をなぜそのように使うのか」というと、〔相手〕「まあね、これで2、3回引運んでいます」と。この駱駝を連れて兄の家に行った。〔私は〕「これをつないでくれ。見つからなかった駱駝が今見つかった。取られたものはきつと出てくる」と。こうして兄の家に届けて馬を走らせて行くと、後ろからツェベグが来た。〔私〕「どこに行きましたか」。〔ツェベグ〕「ツェレンジャブに薪を運んで来いと言われた」と。ツェツェとお母さんが私たちと一緒にいた。その一家をそこに置いていくわけに行かない。親戚のところを下ろしてやる。ツェツェは結婚するそうだ。あそこにシヤラ・バトは彼女のゲルを立てた。ポンスグの〔息子〕ホントと結婚する。朝、早く嫁を迎えに来る。だから、とても早く来た。老婆に頼んで薪をまとめて夕飯を作っておいた。

DM300165 警備になったこと

ムンヘバートル：その後、あなたはどこに行きましたか？

ノースタイ：私はアラグにいた。私は結婚式に行かなかった。

あの老婆と婦人たちが降りようと言ったが、運転手が降ろせなかった。チメドは彼女たちを連れて行ったそうだ。こうして移動してきて、ツェレンジャブと会ったね。来てから、シリグの代わりに私を入れて家々の警備をさせ、私に任せた。警備だね。鍵を開けなかった。外から見ているだけで回っていた。そのとき、囲いがなかった。その後、中の建物を壊してそこの外側に囲いを作った。アラグ・トロガイに。ゴーク老人は「このように空間を置いて作らないと、嵐に打たれて倒れますよ」といって隙間を置いて作った。あの囲いをダシが作った。中の囲いを崩して運んできて私に任せた。また後に北側にクラブ（公民館）を建てた。ダシがまたかかわった。北側の公民館はバリガドが造った。数日のうち造り上げた。上のほうから木匠を派遣し、床と屋根を造らせた。警備

の仕事で61歳で退職した。61歳で年金をもらい、これまで、何年も経っているね（27年間年金をもらっている）。そうだね。最初、年金はわずかだったね。ずっとその調子でいて、最近、81,000〔トゥグリグ〕になった。

DM300127 定年

ある老人は30頭の山羊と50頭の羊を預けた。去勢された雄羊たちの中において放牧し、出産させた。5月上旬、雄羊を食肉に提出した。5月以降、私には出産した家畜だけが残ったじゃないか！70頭ほどの子羊と20頭ほどの子山羊、このようなものが残った。また、ダシデレゲという人に100頭の雌子羊をもらった。こうして200頭あまりの家畜になった。私は200頭の家畜を放牧し、カーズ⁶¹⁾に家畜の乳を提出していた。義務として家畜の乳を集めていた。地元の人びとはここに来てカーズに乳を供出していた。羊と山羊の乳を提出する。ノルマがある。1頭の羊に何百グラムの乳を徴収するか、1.5kgを徴収するかをノルマにして定める。乳のノルマが足りたら給料をもらう。家畜の頭数で計算すると私の給料は70,000紙幣だった。子畜の料金ももらう。それを合わせて70枚⁶²⁾の紙幣をもらう。そして、放牧の給料をもらう。それは家畜を放牧した報酬だ。それは、現在でいうと1頭の子羊が1トゥグリグだ。その子羊の給料が多い。放牧の報酬は月に40,000トゥグリグをもらう。こうしているとき、ここに洪水が入り、ブルガン川の水が溢れてしまった。私たちは夏営地に逃げて行った。そうして乳を徴収していた。そのとき、子牛を連れた1頭の牛に250リットルの乳を徴収した。だから、富人たちは義務の乳を提出できなく家畜を社会化した。社会化してから、その家畜、乳などが民衆の手に入り、ザボード⁶³⁾を作っていた。当時、牛のザボードというのがあった。ザボードとは、例えばおまえに5頭の牛があったとしたら「乳を供出せよ」と賃金を与えてその牛たちを任せるところだ。

私はネグデルの家畜を18年間放牧した。〔その前に〕民の家畜を6年間放牧した。その後、私はネグデルに加入した。ネグデルに加入し家畜を放牧しているうち、妻が亡くなった。私は家畜を返してブルガン川に来ていると「若いおまえたちが仕事をしないので、義務を与える」と言う。家畜の税金の義務を与えることになる。だから、私はトープリという、家畜を辺境に届ける仕事に行った。トープリの仕事に2年間行った。トープリの仕事は大変だ。気をつけないと国家の財産が泥棒に盗まれてしまうかもしれない。その様子が見られた。そのため、2年間トープリの仕事をしてやめた。また、このノルジンというリーダーはどうしても「羊を届けてください」と言うので羊を届く仕事をした。1年間、羊を追って行った。秋に帰ってきてここに住んでいると、ツェグ⁶⁴⁾に行きなさいという通知が出された。だから、私はツェグに行った。死んだ家畜の皮を剥がし、骨を取る。当時、私自身の牛が増えた。牛たちを兄に任せ、出産する牛を私自身が連れてツェグに移動した。7、8頭の子牛を持つ。妊娠しない数頭の牛を兄に残してツェグ

に行った。ツェグで1年が経ち、2年目になるころ4つのツェグが合併し、第1バリガドに置くことになったそうだ。ホシユドのツェグ、バンギンのツェグ、カザフのツェグ、ベルンのツェグという4つのツェグがあった。そこに行って2年間だった。そこで仕事していて60歳でアラグというところに来た。61歳で定年した。

DM300080(7) 次世代

今88歳だ。酉年だ。母はここで亡くなった。兄は亡くなった。姉は亡くなった。そのうち私が残っている。姉の1人の娘がいた。ナライハ（地名、ウランバートル近郊にある炭鉱）に行ってそこで亡くなった。2人の娘と1人の息子の3人〔の子どもが残った〕。

注

- 1) 調査地における聖なる主のこと。用語解説を参照。
- 2) 全身黒い毛で覆われた聖なる主のこと。用語解説「アルタイン・サブダグ」を参照。
- 3) 調査地において「フレー（寺院）」という語は、寺院周辺に住む人間集団も意味している。用語解説を参照。
- 4) 調査地において「ストック（故郷）」という語は、故郷を同じくする人間集団も意味している。用語解説を参照。
- 5) モンゴルと中国の国境にそびえる山。漢字で「北塔山」あるいは「拜塔克山」とつづる。用語解説を参照。地図参照。
- 6) 「アープ・ノヤン（父なる領主様）」と呼ばれていた当該地域の領主ミシグドシルブのこと。用語解説を参照。
- 7) 調査地において、「仏の居るところ」と了解されている。用語解説を参照。
- 8) 調査地において、「ダライ・ラマの居るところ」すなわちラサと理解されている。用語解説を参照。
- 9) DM300080(2) で言及される3人の名前はソランバ、テムル、トンベであり、ここではオチルという名前が加わって異なっている。
- 10) マメ科の灌木。用語解説を参照。
- 11) オイラート方言で格子壁「ハナ」のことを「テレム」という。格子壁だけを用いた天幕については、用語解説「ジュルマ」を参照。
- 12) 雪害をゾドという。用語解説「ゾド」を参照。
- 13) カザフ人の蜂起グループのリーダー。用語解説（人名）を参照。
- 14) 「ウジュル」というのは丘陵などの「突端部」を指す。この地名は「青い先」の意味。
- 15) 一般に「仏」を指す。ここでは仏事や寺院のことを広く指す用語として使われている。
- 16) 寺院の僧侶の位。チベット語の dge・tsul。
- 17) 義勇兵の組織。用語解説を参照。
- 18) モンゴル人の革命家。用語解説（人名）を参照。
- 19) 着物の一種。用語解説を参照。
- 20) 着物の一種。用語解説を参照。

- 21) 用語解説「バイタグ」を参照。
- 22) 馬仲英。20世紀前半の中国の軍閥。用語解説（人名）を参照。
- 23) モンゴル国の東部および中央部では一般にデルスと呼ばれる。調査地では、トウングという。用語解説を参照。
- 24) 小さな天幕。用語解説を参照。
- 25) 村。用語解説を参照。
- 26) ここでは母を指している。用語解説を参照。
- 27) 1頭の馬に2人乗りをするとき、前に乗るのが幼い子どものようだから、後ろに乗ると主張している。
- 28) 揚げ菓子ボールツォグのことではないかと思われる。
- 29) 身を寄せる場所のない、放浪する者という意味の罵倒語。
- 30) トルグードに特有のフェルト製靴下。用語解説を参照。
- 31) 漢字で「大娃子」とつづり、男児の意味である。
- 32) 現地ではウイグル人を指す。
- 33) 売買する家畜のこと。親しみをこめて罵倒語用いる表現。
- 34) 母のことをここでそう呼んでいる。「脂肪でつつんだ糞は犬も食わない」という諺があり、「脂肪でつつんだ糞」は、表面をごまかしたもの、役に立たないものを意味する。親しみをこめて罵倒語を用いる表現。
- 35) 牧畜協同組合。用語解説を参照。
- 36) 協同組合。用語解説を参照。
- 37) 木製もしくは骨製の四角い札を使うゲーム。
- 38) ニマの親しい呼び方、ノースタイの兄のこと。
- 39) 人や家畜など大勢が行くときシュロという植物と触れ合って音をすること。
- 40) 馬車。主に農業や草刈に使う。写真参照。
- 41) ミルクのお湯割り。
- 42) 当時、民間で物を交換するとき穀物のはかりに用いる容器。
- 43) 小麦粉を肉汁に入れた粥。用語解説を参照。
- 44) 穀粒を砕いてゆでたもの。用語解説を参照。
- 45) 脱穀作業の中心部。用語解説を参照。
- 46) おすそ分けのこと。
- 47) 灌漑用の溝のこと。
- 48) 70kgの容量の袋。昔、70のシュダイという。
- 49) 一定の大きさの杓子。現地でカザフ人によく使われたため、カザフ杓子ともいう。
- 50) 当時、穀物の秤に使った杓子は「カザフの杓子」と呼ばれるもの。
- 51) 清朝時代の爵位「貝勒」のこと。ここでは集団を指す。用語解説を参照。
- 52) トルグード人の女性が用いる帽子である。
- 53) 一種の銃。
- 54) トルグード人の独自の革製の靴下。
- 55) プリガード。ロシア語からの借用語。用語解説を参照。
- 56) 出張所。用語解説を参照。
- 57) 寺院の財産。家畜は委託放牧される。
- 58) 家畜追い。用語解説を参照。

- 59) 現在のモンゴル国バインウルギー県内。
- 60) 領収書のような物。送り状。
- 61) 畜産物を徴収するセンター。
- 62) 1枚の紙幣は1,000トゥグリグである。
- 63) ここでは酪農場。「工場」を意味するロシア語から借用されている。
- 64) 出張所のようなもの。